イナズマイレブン　王の瞳が見た記憶

アリ酸

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

野球が大好きな貧乏大学生、不破柊。

将来は体育教師を目指しバイトと勉学を送り続けている日々の中、彼女は偶然河川敷で円堂守と出会った。サッカー経験はほぼ皆無。しかしどういう訳か、運動神経の良さと指導力から、雷門中サッカー部のコーチになってくれと円堂に頼まれてしまう。

かつて絶対に勝つことが不可能と呼ばれた帝国学園野球部。これはそんな帝国を屈服させた野球大好き人間による、雷門中サッカー部を強くするお話だ。

目次

第一章：新たな蹴球指導者

1話：河川敷での出会い ―― 1
2話：投げる、蹴る ―― 8
3話：野球選手からサッカー指導者へ ―― 16
4話：雷門サッカー部集合！ ―― 24
5話：僅かな確率を生むために ―― 31
6話：不穏な空気 ―― 40
7話：来襲 ―― 46
8話：vs帝国学園　前半戦 ―― 53
9話：vs帝国学園　後半戦 ―― 60
10話：一難去ってまた一難 ―― 68
11話：決意の日 ―― 75
12話：きっかけづくり ―― 84
13話：葛藤を超えて ―― 93
14話：vs尾刈斗中　前半戦 ―― 103
15話：vs尾刈斗中　後半戦 ―― 110
Extra：外野三人衆 ―― 118

第一章：新たな蹴球指導者

1話：河川敷での出会い

四方八方から波のように襲いかかってくる大音響。目の前のダイヤモンドには9人の敵と、3人の味方。電光掲示板には赤く光る二つの死のランプ。大きく息を吸い込み、心の波を鎮めるように深呼吸を一回。覚悟を決めて再びルーティンを済ませると、彼女は誰もが注目する特等席へと立つ。

手に馴染んだ黒のグローブごしに体の一部となった一本の武器。構えれば相手は己を殺そうとやって来る。それに抗おうと全身全霊を込めて一撃を振るうが、手応えはない。変わりに黄色の警告信号が一つ点灯し死へ一歩近づく。続けてもう一撃を繰り出すが、今度は手ごたえはあるもののダメージは入らない。同じようにまた一歩死へ近づく。警告信号の点灯数は二つ、次はもう無い、あと一歩で自分自身は死ぬ。当然自分が死ねば味方も消えてなくなる。だというのに歓声はより一層大きくなっていく。

彼女は笑った。自分こそが今ここにいる主役だと。それと同時に彼女は一撃を振るうと、あの歓声が一瞬だけ凍結したように静まり返り、直後に大歓声へとなり変わった。

◆　◆　◆

「――ねぇ！　ちょっと、ねぇってば!!」

「――うぅ……ん？」

からだのあちこちが痛い。鈍器で叩かれた後のように痛い。そう思いながら彼女は目を開けると、目の前で一人の少女がサッカーボールを片手にのぞき込んでいた。

「う～ん、どうしたのさ。私に何か用？」

「お願いがあるの。ちょっと聞いて！」

河川敷の天然ベンチと名付けた石の上から体を起こすと寝起きの

目をこする。暖かい風が頬を撫でるように吹き抜けると続け様にあくびを一回。ここはどこだ？　ああそうか、自分はここで横になっていたらいつのまにか寝ていたのか。
寝ぼけた様子で目を覚ました彼女は周りをキョロキョロと見渡す。意識は完全には覚醒していない。太陽の光が慣れない目を容赦なく攻撃してくる。そんな彼女へと向けて少女は言った。
「今日友達が一人来られなくなったの。だから代わりに一緒にサッカーしてくれない？」
少女は笑いながらサッカーボールを掲げると先程まで熟睡していた彼女へと手渡した。目をパチクリさせながら彼女はう～んと悩むような素振りを少し見せるが、日の光を見て頭の中のスイッチが切り替わると、そっと返事が口から出た。
「サッカーって……私やった事なんてほとんどない初心者だけどいい？　投げたり捕ったりするのは得意だけど蹴るのは本当に音痴なんだ」
「だいじょーぶ、だいじょーぶ！　一緒にやろっ！」
サッカボールを受け取った直後に服の袖がグイッと引っ張られた。「ちょっと待って！」と口にするが少女の力は増すばかり。目覚めた彼女は寝起きで力が入りきらない体をされるがままに少女に連れられて行かれた。
河川敷の真ん中にくれば小学生の少年少女たちが既に数人揃っていた。とはいってもそれはいつも見ているメンバーであり、顔も大体覚えているような子たちである。
「みんなー！　いつも端っこで寝ているお姉ちゃんが一緒にやってくれるって！　円堂ちゃんが来るまで特訓しよー！」
少女の声と共に周りにいた子供たちが歓喜の声を上げる。サッカーを一緒にすることがそんなに楽しみだったのだろうか。彼女はそんな事を思ったが、目の前にいるのが純粋な子供である以上その程度のどうでもいい疑問なんてすぐに消え去っていった。
今日はこれといって特別に忙しい日でもなかった。むしろ暇な一日だったといってもいい。なんと言ったって現在在学中の大学は学

費が払えないため休学中。せいぜい最近の時間に費やしている事なんてバイトか勉強か今みたいに昼寝か。そう考えてみれば、子供と遊ぶことだってたまにはいいかもしれないと彼女は思った。
「そういえば、お昼寝のお姉ちゃんの名前ってなに～？　私は如月(きさらぎ)まこ！」
「お昼寝のお姉ちゃ……コホン、私は不破柊(ふわしゅう)。勘違いしないで、あれはただ寝ているんじゃなくて精神統一。決して暇だから寝ている訳じゃない、分かった？」
「せいしんというつってなに～？」
　というつじゃなくて、とういつ。子供に対してなに訳分からん言い訳をしているのだと、柊は自分に呆れながら歩き出した。さて、サッカーボールを蹴るのなんて何年ぶりだろうか。もしかすると中学ぶりかもしれない。懐かしいなぁ中学時代は。
　子供たちとサッカーをするうえで、今日の特訓のメニューはドリブル練習らしい。適当に子供たちの行う準備運動に柊は一緒に参加し、そして気が付けば特訓のメニューがスタートだ。
「よっ、あ…ありゃ？」
　さすがにドリブルなんて簡単。ポポポ～ンと上手くいくだろう。そんな甘い考えでいた柊に現実が襲いかかる。テレビなどで見るようにグングン動けるかと思いきや、真っ直ぐは移動できても左右に上手く動けない。無理やり動こうとすれば、ボールと体はお互いが嫌い合っているかのように反対方向へと動き出す。
　ブランクがあるなんて可愛い言い訳ができるかと思いきやそんなレベルでは無かった。特訓が始まってみれば、子供たちが凄まじく上手い。もはやプロかというほどに！　というのは冗談で、あまりにも柊自身が下手過ぎで相対的に子供たちが上手く見えていたのだ。
　もともと柊自身サッカーがほぼ素人でボールを蹴るのが音痴といえど、本当に今この場にいる小学生たちと同レベル。いや、それ未満かと思えるほどだ。
「馬鹿な、私自身ここまで下手くそだとは驚いた。これもある意味才能なのだろうか？」

咄嗟にそんな事を柊は口にしてみれば、小学生たちが彼女の方を向いていた。
これは笑われても仕方がないな。そう思ってどう言葉を返してやろうかと考えていたところで、まこが口を開いた。
「不破ちゃん、初心者にしてはすっごい上手だね！　変な方向にボールが飛んでも咄嗟に反応できるなんてすごいよ！」
――すっごい上手。もしいい歳した人間に言われれば皮肉をありがとうと返していただろう。しかし目を輝かせて純粋に自分自身を褒めてきた少女に柊は「えっ」と間抜けの声を漏らしてしまった。
「そうそう、あんな無駄な動き多いのに息一つ上がってないのもスゲーよ！　何かスポーツでもしていたのか!?」
「僕スタミナないから特訓付けてよ！」
まこの第一声から次々とやって来る称賛の言葉。驚きだった。馬鹿にされると思っていた。でも、その時ふと垣間見た気がした。どんな些細な事でも人の長所を尊重し、全員で喜び合う。それはかつて自分がスポーツに没頭して頂点を目指していた時のことを。
「よしてくれ。これじゃ君達の練習相手にすらならないよ」
「そんなことないって！　不破ちゃんとサッカーやってると凄く楽しいもん。私だけじゃない、皆がそう感じているよ！」
汗が光る彼女らを見てみれば柊の瞳に全員の笑顔が映る。それは本当に楽しそうであり、喜びに満ち溢れている。そうだ、これは本当に好きな事に夢中になっている人達の姿だ。
――確信した。目の前にいる小さな彼女らは大好きなのだ。サッカーというものが。

時間が過ぎるのはあっという間だった。太陽は傾き、気が付けば辺り一面は真っ赤な景色。正直夕方になるまで子供たちとサッカーに没頭するとは柊自身も思ってもいなかった。
そんな様子で日が沈むまでもう少しだけ続けようと思っていると、ふと河川敷の階段から大きな声が聞こえてきた。変声期を終えた少年の声だ。ふと振り返れば視界に映ったのは額に巻いたバンダナ。

そしてゴールキーパーがはめるグローブ。
「あ、円堂ちゃんだ！　おーい！」
まこが我先にと声を上げると、一緒にサッカーをしていた子供たちも嬉しそうに声を上げ始めた。
「おや、どうやら新しいお友達の登場みたいだ。私の出番は終わりかな」
今来た円堂と呼ばれる少年のもとへ子供たちが寄っていくのを見届けると、柊は腰に巻いていた上着を羽織り退散の準備を整え始める。実に充実した時間だったと言えよう。これで夜活動するにあたってのモチベーションが保てる。そう思いながら皆に別れの言葉をかけようとしたところで、あの少年は柊のもとへ一気に駆け寄って来た。
「もしかして、あなたがこいつらの面倒を見てくれてたんですか!?　ありがとうございます！　俺、円堂守って言います！　雷門中でサッカー部のキャプテンをやっています！」
雷門中。その名を柊はよく知っていた。なぜならそこには小さな頃に色々と縁のあった学校。彼女にとっては忘れもしない記憶がたくさん詰まった場所だ。
確か雷門中は過去に無敗を誇る程にサッカーの凄い中学校だったと噂されていた。今はどうか分からないが、そんな場所のキャプテンと言葉を交わせるなんて光栄だ。一気に円堂が駆け寄ってきたことで驚いていた柊だが、今目の前にいるのがあの雷門中のキャプテンだということに自然と興味が沸きあがって来た。
「不破柊です。面倒を見ていたというより、たまたま一緒に遊んでいただけですよ。みんな良い子たちですね、私も久しぶりに楽しめました」
「敬語はよしてください、見た感じ俺より年上じゃないですか！」
「ん、そう？　なら円堂君、君も私に敬語なんていらない。気を使われるのって好きじゃないんだ。頼むよ」
波長が合うというのはこのことだろうか。今現在２２歳の柊にとって中学生相手に会話しても話なんて特に弾みもしないと思って

いたがまさかその逆だ。今さっきしていたサッカーの話題が上がった途端に、円堂との会話が火が付いたように盛り上がり始めたのだ。それは勢いが増すばかりで消えることを見せない。

柊が彼、円堂と会話をしていて思ったことは『彼は馬鹿なんだな』だった。それは馬鹿の中でも群を抜いての馬鹿、『大馬鹿』だ。しかしそれは悪い意味での大馬鹿ではない。いい意味での大馬鹿だ。彼はサッカーに対してどこまでも夢中になれるサッカー馬鹿だ。その姿は誰よりも生き生きしていて、誰よりもサッカーを愛して、そして誰よりも今は眩しかった。

「なぁ柊さん、よかったらまだ帰らないで一緒にサッカーをしようぜ！　上手い下手なんて関係ない、楽しもうぜ」

「望むところだ。こうみえても数年前までは結構名の知れたスポーツ選手だったんだぞ。サッカー選手じゃないけどね」

サッカーは見ることはあってもやる事はほとんどなかった。それは柊自信がサッカーに関しては音痴であり、出来ないとずっと思い込んでいたからだ。

しかし今日ここで再び始めた結果どうだろう。それは本当に上手下手なんてものは関係なく、ただ楽しいとしか言葉で表せないほどの時間だった。柊は久しく忘れていた、この感覚を。

「くそっ、上手いな円堂君」

「ハハッ！　良いシュートだったぜ柊さん！」

最終的にゴールキーパーの円堂を相手にみんなでシュート練習をする特訓が始まった。

もちろん柊のシュートはバシッという音と共に防がれてしまう。簡単には入らない。それでも円堂の見せるあの姿にどこか懐かしい気持ちと、嬉しさが今にも込み上げてきそうだった。

日が沈み、特訓という名の練習を終えると柊と円堂は共に帰路の道を歩いていた。

「今日はスッゲー楽しかったよ。よかったらまたやろうぜ、柊さん！」

「いいとも。またやろうか、私も面白かった」

「そうだ、よかったら今度雷門中に顔出してくれよ！　俺の仲間達にも柊さんの事を紹介したいんだ」
「ふふ、まぁ縁があったらこっそり顔を出させてもらうよ」
円堂守。それは不破柊にとって運命ともいえる出会いだった。
楽しい時間というのはあっという間に過ぎ去り、今日という一日が幕を下ろす。そして明日がまたやって来る。日常というのはそういった毎日の繰り返しだ。そのサイクルの中で自分がどれだけ有意義に時間を過ごすかが人生というもの。
どんな形であれ、柊にとってはこれが始まりであった。この円堂守との出会いが、人生を変える一つの分岐点であると。ただ、まだその事は本人は気付く由もない。

2話：投げる、蹴る

日は完全に沈み、辺りが支配するのは闇の空間。夜の幕開けだ。

柊は座席に座り込むとガムを噛みながら音楽をかける。バイトの開始時刻である。仕事内容は至ってシンプルで、乗客を目的地まで送り届ける。そうタクシー会社のバイトだ。

興味本位で取った普通自動車二種免許。それを使ってバイトを行っているのだが、これがまた便利で、タクシーバイトという自由な時間にお金を稼げて実に良い。主に夜行性の柊にとっては願ってもないほどにありがたいものだ。

駅前の路肩に車を止めて今日は誰も乗ってこないなと柊はガムを膨らませていると、数十分後ようやく人影らしきものが近づいてきた。

「ご利用ありがとうございます、パンダ交通です。目的地はどちらでしょうか」

「……稲妻総合病院まで」

「かしこまりました」

後部座席に座り込んだ乗客に前を向きながら声を掛け、バックミラーからその素顔を確認すると逆立った頭髪が視界に入る。一言でいうなら洗髪の際にシャンプーを使って髪の毛を一気に逆立てた時。そんな時をイメージすればわかりやすいだろう。

髪型が特徴的なクールな少年を乗せた柊はアクセルを踏み込み車を走らせる。今時ほとんど見かけないＭＴ車を面倒な操作が多いなと思いながら運転していると、ふと柊の中で何かが引っかかった。

後部座席に座る少年。その特徴的な目と髪型はどこかで見覚えがあったのだ。しかし、それがどこでかは分からない。記憶の引き出しを開けるが答えは中々出てこない。友人に似ているとかその程度の思い過ごしだろうと柊は思った。

「――フン、フン、フフン」

特に会話も無く窓の外を見ている少年を他所に、柊は流れる音楽に合わせて鼻歌を鳴らしていると少年が不思議そうに見つめてきた。

「……歌」
「え？　あぁ、もしかして音楽邪魔でしたか？　申し訳ありません」
「いや、そのままでいい。嫌いじゃない」
今鳴らしていた鼻歌『立ち上がリーヨ』。最近では流行の曲だ。
「その制服。もしかして雷門中の生徒さんですか？」
「これからそうなる。転校してきたんだ」
「そうなんですか。あ、そういえば、私も今日雷門中でお友達になったん人がいるんですよ。円堂守君という人なのでもし良かったら友達になってあげてください。彼とてもいい子ですから」
「そうか」
自分で語っていると何だか昼間の事をついさっきの事のように思い出してしまう。柊は自然と零れる笑みを見せながら少年へと向けて言った。
「私、野球ばかりしていたおかげでサッカーはまるでダメだというのに、つい今日はその円堂君と夢中になっていたんです。気が合えば一緒にやってあげてください。きっと楽しいですから」
「――サッカーはやらない」
「え？　あぁ、そうですか。申し訳ありません…」
少年の眼光は私の言葉に反応するかのようにギラリと光ったかと思えば、直ぐに悲しそうな目と共に消え去っていった。
こんな真っ向から否定されるとは思いもしなかった。しかしなぜ、さっきの様子から一変して私に噛みついてきたのだろうか。柊は頭の中にクエスチョンマークが浮かび上がるが、その理由は簡単にほじくれるような空気ではない。
はてさてどうしたものか。空気が少し重くなってしまったかと思っていると、柊はここでふと大事な事を思い出した。それは今日一番の重要事であり、絶対に忘れてはいけないものだ。だというのに完全に頭から抜け出ていた。これもまたあのサッカーの影響だというのか。
「ごめんなさいお客さん、少しだけラジオに切り替えますね！」
慌ててオーディオ機器を切り替えると今まで流れていた音楽が打

ち切られ、ラジオから人の声が出始める。
『さぁ早くも試合は最終回ランナー2人と2アウト。点差は僅か一点。パシフィックホエールズの攻撃はここで日本人代打、大空元気！
一打逆転のチャンスではありますが、相手は本試合絶好調のアレックス。さぁ元気、一打逆転なるか!?』
「うそ!? ちょっと、なんで負けてるの！ 元気、どうにかしてよ！」
ラジオから流れるのはメジャーリーグではなく、マイナーリーグと呼ばれる野球大会の生中継だ。もちろん日本で行われているものではなく、本場アメリカで行われている試合である。
柊は試合を応援し忘れていた後悔と、応援しているチームのピンチから、自然と後ろに少年が乗っているのにもかかわらず大声が漏れてしまった。普段こんな事は絶対にしないというのに。
「野球……それに座席に置いてある赤いグローブ」
「――っ！ お見苦しいところを申し訳ありません。私野球馬鹿なものでして、仕事の後にちょっとボール触って汗流そうと思っていまして……」
普段絶対仕事中にこんな姿を見せないというのに、今日に限って失態を晒すなど柊は考えてもいなかった。しかも自分よりも五つ以上幼い子相手に。
もうだめだ。座席に自身の野球道具を置きっぱにしているのを見つかったりと、こんな醜態を見せてしまえば鼻で笑われたって仕方がない。そう思っていたが、後ろの少年の表情は笑うどころか、むしろ真剣そうな顔を見せていた。
あ、あれおかしいぞ。何でそんな表情しているんだ？ 柊がそう疑問に思った直後にラジオが再び大きく鳴り響く。
『大空元気打った！ 大きいぞ、これは大きい！ 伸びる、伸びる、まだ伸びるぞ！ 一体どこまで伸びるんだ、文句なしのホームランだ！
サヨナラ、サヨナラー！ ホエールズ逆転勝利！』
「――え、入った!? うそ、うそ！ やった！ さすが元気、日本球児め！」
再びラジオに条件反射するように声を上げると、ハッと柊は正気に

戻る。またやってしまった。乗客がいるのに何と言う事を！これはクレームを出されても文句を言えない。
急いで少年に謝ろうとすると、彼は少しだけ笑いながら投げ掛けてきた。
「野球が好きなんだな。大空元気という選手は知らないが、お前の好きな選手だという事はよく分かった」
「あ……あぁ……お恥ずかしいところを」
本当に今日は自分らしくない姿を見せる日だ。河川敷で子供相手に夢中になってサッカーをしたり、バイト中に大声を出したり、もしかつての友達がいたりでもしていたら笑われていただろう。
「――着きました、稲妻総合病院です。料金は２０００円です」
「２０００円丁度だ。わざわざ一番近いところまで送ってもらってすまないな」
「とんでもない、それはこちらのセリフです。お恥ずかしいところをお見せして申し訳ありませんでした。こちらお釣りです」
「――ん？　なぜ釣りで２０００円全部返ってくるんだ？」
「新生活に向けての軍資金です。本日は稲妻タクシーのご利用ありがとうございました」
逆立った髪の少年が降りた事を確認すると、柊は少年の制止を聞かずに颯爽とタクシーと共に走り出した。

◆　◆　◆

目が覚めたのは朝の９時を回ってからだった。昨夜タクシーで少年を病院へ送り届けた後、鉄塔の下で野球ボールを触り、帰ったのは深夜１時。そこからラジオで聞いていたマイナーリーグの試合のハイライトを見て、眠りに着いたのは３時。柊にとってはとんでもない夜更かしの一日であった。
今日は完全にオフの一日である。昨日のようにバイトも無ければ、これといって用事もない。なので今日は柊は教員になるための勉強に励む事にした。常に目標をもって置き、意識を高く保っておくの

だ。何せ柊は常に金欠の貧乏学生。復学した途端に留年し、学費をもう一年分払いなさいとなってはシャレにならない。無理を言って大学に入れてもらった以上、一度そんな事をすれば実家に住む家族に柊は抹殺されかねないだろう。だから目標である教員採用試験を合格するまではモチベーションを維持しておくことが大事なのだ。

４時間程時間が経った頃だろうか。殺風景な一人暮らしのアパートの中で午前中は勉強に費やしていると、後に集中力は切れてきた。ジッとしているのが苦痛になって来たのだ。

「バッティングセンターでも行こうか？　いや駄目だ、今月はそんな金などない」

知恵はついてきたものの今日はこれ以上ペンを握る気にはなれない。結局このまま家に引きこもっていても気分が悪くなりそうだ。そう感じた柊はいつもの河川敷に向かう事にした。ボールが投げたい、ボールが打ちたい。なぜか分からないが野球が無性にしたくて体が動く時があるのだ。

河川敷に到着すれば今日は誰もいない。当然だ、平日の昼頃など人がいる訳などない、つまり独占状態だ。早速ウォーミングアップを済ませ、紺色のリボンで背まで伸びる頭髪を後ろで一つにまとめると帽子を浅くかぶる。これで準備完了。

今日用意したものはパネル版。そう、今からやることはストラックアウトだ。柊はサッカーグラウンドの脇にある小さな野球グランドに立つと、マウンドへと上がる。

「サッカーも面白かったが、やっぱり私が愛するのはこっちだ」

オーバースローで投げられたボールは一直線のラインを描くと、パコンという音とともにパネルを吹き飛ばしていく。続けるように二枚、三枚。心地よい音が河川敷に響き渡る。

大体１００球ほど投げたくらいだろうか。大分息も上がり始めたところで柊はクールダウンを行う。上着を羽織り、いつものように右手にはミサンガ、左手に腕時計をはめると結んでいた髪をほどいていつもの天然ベンチで横になった。腕時計は３時を示しており４時まで昼寝をするのは十分すぎる時間がある。

「今日の夕飯何をつくろうか。あの円堂君なら何が食べたいと言うだろう？　もしまた会えたら聞いてみようかな」
柊はそんな言葉を青空に向けて吐くと、眠りに着こうと目を閉じようとした。
「――俺、今日の夜だったらカレーが食いたい！」
「――うわっ！　え、円堂君!?」
「へへへっ！　またみんなで来たぜ柊さん！」
突然視界にぬっと現れたバンダナ少年に柊はベンチから転げ落ちそうになった。
ビックリしたなんてものじゃない。急に出てくるものだから心臓に悪い。口の中から何か飛び出してくるかと思った。
「驚かせないでくれ、びっくりしたよ。今日はまたいつもの皆と……おや？　見ない女の子だね」
小学生の中に立つ一際背の高い黒髪の女の子。見た感じ彼と同じ中学生だろうか。随分と可愛らしい子だ。
「初めまして。私、雷門中サッカー部のマネージャーをしている木野秋といいます。円堂君からお話は聞いています、サッカーを一緒にしてくれたという不破柊さんですね」
「秋さんですね、初めまして。雷門中のサッカー部と仲良くなれて光栄です」
まさか円堂君に会えるどころか、マネージャーさんと顔を合わせられるなんて思ってもいなかった。柊はちょっとした感動を覚えながら彼女の手を握る。
「柊さん、また俺達とサッカーをやらないか？」
「もちろん、私で良ければ付き合うよ」
柊はニコリと笑顔を見せる。昼寝をしようとしていたが彼らが来たというのでは仕方がない。さぁ夕陽が沈むまで夢中にボールを追いかける時間の始まりだ。
「円堂君は楽しそうにサッカーをするね。いい選手だよ彼は」

「ええ、本当にサッカー馬鹿ですよ円堂君は」
すっかりこの短時間で柊は秋と打ち解けると、小学生とサッカーを楽しんでいる円堂をネタに会話に花を咲かせていた。
「それにしても現在は練習場所が無い、か。加えて部員の士気も低下していると。大変なんだね」
「本当にそうなんですよ。このままだといつ廃部になったっておかしくないです。どうしたものでしょうか」
柊は初めてここで雷門中サッカー部の現状というものを知った。やる気がある者がほぼ皆無で、部員は足りない。練習場所も限られている。スリーカードの完成だ。首を振りながら柊は両手の平を見せると絶望的だとお手上げの様子を見せた。
柊としても秋と同じ女性として何か力になることを伝えてあげたいが、変な励ましはかえってダメージになる。逆効果と言う奴だ。そう簡単には軽い言葉はかけられない。それほどまで思春期の子供というのは繊細なのだ。
でもこのシチュエーションは柊にも過去に経験したことがある。だから彼女はその時に行ったことを経験として伝えることにした。
「数年前、私の部活も当時は今の君達と同じ状況だったんだ」
「え!?　まさか柊さんもサッカーのマネージャーをしてたんですか？」
「まさか。私は選手だったよ。ベンチに置いてある赤のグローブを見てもらったら分かると思うけど、私は野球部だったんだ」
夕焼けで一層赤く見える見えるグローブを左手にはめると、ポスポスと手で叩いて鳴らしながら秋の方へと振り向いた。
柊は思い出す。そうあれは今の円堂と秋のような状態だった。
「やる気が無い者に説得を試みればうるさいと煙たがれ、部員を集めようとしようものなら他の部に邪魔だと蹴散らされたよ。懐かしいね、あの頃は」
そう、そんな中で今の円堂と同じ人間がいたんだと思い出す。彼は遥か手の届かないところへ行ってしまったが、当時の記憶は昨日のように残っている。柊は右手の手のひらを夕陽ににかざすとギュッと

握りしめた。

3話：野球選手からサッカー指導者へ

――柊、ちょっと投げてくれよ！　いつも外野守ってばかりじゃつまんないだろう？　楽しんでいるところ見せてやろうぜ。そうすりゃみんな自然とやってくるさ！　俺様が言うんだ、間違いはない。絶対だ！

ふとそんな当時の記憶が甦った。彼に言われるがままマウンドに立ってピッチングをしたり、二人だけで秘密の特訓をしたり、それは今までの人生で一番の黄金期だった。

〝スポーツは口でどうにかするものじゃない、魂と肉体を使って表現するものだ。〟私の大切な人がよく言い聞かせてくれた言葉さ。だから、見せてあげればいいんじゃないかな。君達の頑張っている姿をみんなに」

「みんなに……」

「まぁ新入部員を募ることに関しては……うん、そこは勧誘するなりして頑張ってとしか言えないな。……何だかこれといってアドバイスらしきことを言えなくて申し訳ない」

「いえ、そんなことないですよ。相談に乗ってくれてありがとうございました」

世の中消滅する部活なんて巨万（ごまん）とある。しかし、あれだけサッカーを愛している少年が報われないというのは何とも言えぬほどに悲しいものだ。柊はチクチクと痛む心臓を押さえるようにギュッと服を握った。

日もだいぶ落ちてきたことだし今日は先に帰ろうかと思っていると、突然柊の視界の端で二つの人影が映った。チャラチャラとした黒い服装の男に、それにくっついて歩くガラの悪そうな小さな男。一目見て分かる程にあまり関わりたくないような二人組だ。

だが、何事も無く過ぎ去ってくれと心で思っている時に限って、災いというものはなぜかやって来る。

「――クソが、あぶねーなオイ！　誰だボール蹴った奴はァ！」

小学生が蹴ったボールは空を舞い、最悪な事に偶然あの二人組へと直撃しそうになったのだ。当然向こうはご立腹。見かねた円堂が必死に謝りに行くが向こうの気に食わなそうな表情は治まらない。
「本当にすみませんでした。申し訳ないのですが、ボールを返しては頂け――うぐッ!?」
鈍い音とが聞こえたかと思いきや地面に円堂が腹部を押さえてうずくまる。鳩尾へと綺麗に入った足蹴りに、それを見ていた秋からは「円堂君!」と不安に満ちた声が漏れた。声には出さなかったものの、同じように今の光景を見ていた柊も自然と瞳孔が開いていく。
「ガキ相手に玉蹴りか? くだらねぇ」
「よく見りゃコイツ雷門中ですよ。雷門といえば部員も足りねぇ弱小サッカー部ですよ」
「笑わせてくれる。手本でも見せてやろうか?」
吐きつけられる唾がボールを汚す。その瞬間燃えるような炎が柊の中で舞い上がった。見ていられなかったのだ。ボールは彼らにとって魂だ。それに唾を付けられるという事は、サッカーどころかその人そのものを否定していることに等しい。
「やめろ! 何をしている!」
「あ~ん? なんだお前、中学生ってガラじゃねえな。どこの高校だ?」
「柊さん!」
うずくまる円堂の声を片手を向けて制止すると柊はガラの悪い二人の前に立つ。
「こちらの不注意は謝ったはずだ。まだ何か因縁があるのか? これ以上ここにいるみんなを侮辱するようならこちらも黙ってはいないぞ!」
「ほぉ、面白れェ! やってもらおうじゃねぇか。こっちはボールの蹴り方でもご教授してやろうと思っていただけなのによ。――こんなふうになァ!」
急に蹴られたボールに反応できずにいる柊を他所に、勢いを増すボールは弧を描きながら休憩していたまこへ向かって飛んで行く。

しまったと思ってももう遅い。直撃コースは間違いない。
「――お前ッ！」
「アハハハッ！　いいコースじゃねぇかこれ!?」
よくもやってくれたなと柊は逆上しそうになると、上空に影が飛び込んで来たのが分かった。その直後に強烈なボールを蹴った音が聞こえるとガラの悪い男の顔面にボールが帰ってくる。
勿論最初に蹴られた威力よりも数倍威力のあるボールを顔面で受け止めた事もあり、その男はノックアウト。一発ＫＯ、フラフラしながら後ろへと倒れていく。
まさに一瞬であるその刹那の光景に、柊は何が起きたのか状況を理解できなかった。
「う、うわあぁぁぁぁ！　覚えていろー!!」
片方を担ぎ上げて去っていく二人組を放って置き、今ボールを蹴った本人をみればそこには見覚えのある顔があった。あの逆立った髪の毛に、柊と同じ猛禽類を模したような目。そうだ、昨日柊が稲妻総合病院まで連れて行ったあの少年がたっていたのだ。
逆立った髪の少年はまこに笑みを見せると、背中を見せて踵を返して歩いて行く。
「彼は一体……」
礼を述べようとしてもまるで私達に関しては興味ないとばかりに語る背中。その様子から声を掛けようにも柊は言葉が見つからなかった。
だが一方で水を得た魚のように彼へと食いつく人物が一人。円堂は一気に柊の横から飛び出るとあの少年のもとへ駆け寄っていった。そうだ、あのサッカー魂に火が付いたのだ。
でも一部始終を見ていれば結果は聞くまでも無い。あの少年が無言で立ち去った事から、勧誘は失敗。円堂は残念そうな顔をしながらみんなのもとへと戻って来た。
「スゲー奴だと思ったんだけどな。一緒にやりたかったぜ」
「凄いシュートだったね。でも円堂君、本当に心配したよ！　柊さんもですよ?」

「心配かけて申し訳ない。黙って見ていられなかった」
　反省した様子で円堂と柊は秋に視線を向ける。
「柊さんは特に反省してください。いくら年上といえどまだ高校生でしょう!?　問題事起こしちゃ駄目ですよ」
「こ、高校生!?　私が？　もしかしてそう見えるのか？」
「え、違うのか？　俺もてっきりそうだと思って接していたんだけど」
　確かに柊は身長もそこまでは高くない。顔だっていまだ幼さが残っていると言われている。外食をして間違えられたことだって多々ある。年齢確認だってしょっちゅうだ。しかし、しかしだ。まさか現役の中学生にまでそんな事を言われたのは柊にとっては初めてだった。
「……一応こう見えて私は２２歳なんだ。車だって乗れるし、お酒だって飲める歳だぞ？」
「ええ!?　めちゃくちゃ大人じゃないか！」
「大人だよ！　まぁ若く見られるのは私にとっては嬉しいよ、こういう時は素直に喜んだ方がいいのかな？」
　野球をして、サッカーをして、変な二人組に絡まれて、助けてもらって、高校生だと間違えられて。本当に昨日といい、今日といい面白いことが立て続けに起こる。ここまでくると、明日はどうなるのだろうか。柊はマンネリ化していた最近の生活から変化が見え始めた事で好奇心が沸き始めた。
「柊さんは現在大学生？」
「一応そうだね。と言っても学費が払えないから今は休学中かな。将来は体育の教員になりたいと思っているんだ」
「体育の先生ですか。運動神経が良い理由はそうだったんですね！」
「なるほどな！　――そうだ、体育教師を目指しているって事は特訓のメニューって考えられるか？　雷門中のメンバーが集まったら鍛えてほしいんだ！」
　あまりにも意外な頼みごとに「えっ!?」と変な声が柊から漏れる。それはつまり俺達のサッカー部の指導者になってくれということだろうか。そう柊は解釈する。

確かに聞いたところ面白い話かもしれない。体育教員を目指すうえで中学生と共に運動が出来るとはいい話だ。自分と歳の離れた人たちの接し方も覚えられる。考えてみれば柊にメリットは多くある。

――しかし、あくまで承諾するにあたっては今回サッカーが出来るという前提条件があっての話である。柊は青春時代はサッカーではなく野球に費やしてきた。サッカーが上手くできないどころか知識だってほとんどない。知っているのはルールぐらいだ。当然指導するというならばサッカーよりも野球の方が明らかに向いているだろう。

「私個人としては別に構わない。しかしサッカーなんて詳しくないけどそれでもいいのか？　せいぜい特訓メニューなんて言っても私に出来ることは強くなるためのきっかけを作ることぐらいしかできないと思う。私用だってあるから当然毎日付き合ってもいられない。それでも本当にいいのか？」

「当然さ！　それに柊さんは運動神経スゲーからよ、多分一緒に出来れば凄いヒントを得られそうな気がするんだ！　な、一緒にやろうぜ！　頼むよ柊さん!!　今度お礼はするから!!!」

柊は秋の方に顔を向けると彼女もまた笑顔で「お願いします」とばかりに答えてきた。

円堂からの申し出に、彼らの期待に応えられる自信はない。だから、嬉しい話ではあるがこれは断るしかない。そんな気持ちが最初は強かった。しかし、こんな視線を向けられれば断ろうにも難しい。少しだけ沈黙が流れる。

正直不安しか残らないこの感情に対し覚悟を決めた様子を柊は見せると、そっと赤い空に息を吐いた。そして円堂の気迫に押され屈服した柊は降参だと両手を上げる。

負けた、負けたよ。仕方がない、これも何かの縁だろうか。諦めたように笑顔をつくると「分かったよ」と口にした。

日も完全に落ちかけてきたところで今日の練習は終了。帰る準備を済ませると円堂、秋、柊の３人は連絡先を好感した後に今日は解散となった。

◆　◆　◆

――翌日午後４時。ここは稲妻フラワーショップ。柊は掛け持ちしているもう一つのバイトの終了時刻が来ると、急いで赤いエプロンを外して身支度を済ませる。

「店長、今日先に上がります。あとはお願いします」

「おや不破さんが急いで出て行くなんて珍しいね。もしかして彼氏とデートかい？」

「ふふっ、ハズレです。でもちょっとだけ青春してきます！　ではお疲れ様でした！」

フラワーショップを飛び出ると柊は目的地である小高い丘に位置する鉄塔を目指す。距離は約１．５キロメートル。全力で走れば柊であれば５分もしないうちに着くだろう。しかしそれでも約束の時間までに間に合うかどうかは怪しいところだ。

ランニングシューズの紐を結び直すと柊は目的地へ向けて視線を送る。そして鞄を下げたまま走り出した。

「柊さんこないな。それにしても帝国学園か。なんてことはない、絶対勝ってやる！」

雷門中サッカー部キャプテン円堂守は今日の出来事を思い出していた。豪炎寺修也という名の転校生がやってきたこと。しかもそれが昨日河川敷であったあの凄いシュートを蹴った人だったということ。人数をそろえるためにひたすらサッカー部の勧誘をしたこと。そして帝国学園と練習試合が決まり、負けたらサッカー部は廃部になること。

夕陽を見つめながら出来事を振り返ると、円堂は持ってきた特訓ノートを確認し、詰み上げられているタイヤに視線を送った。

「よし！　やるか！」

自分の体程もあるタイヤを背中に背負うと、吊るしてある別のタイヤのキャッチングを始める。タイヤの振り子を使った特訓だ。とはいえ、簡単に止められる訳はない。
「ぐあッ!!　くそ、まだまだぁ!!」
止めようとして、弾かれて。止めようとして、吹き飛ばされて。止めようとして、打ち砕かれて。
だというのにもかかわらず円堂には諦めるという文字は無かった。絶対に出来る、そう心で確信に満ちて。
「お、やっているねサッカー少年。遅刻しちゃったよ」
「柊さん！」
円堂が練習を始めて五分ほど経ってからだろうか。鉄塔へと続く階段を柊が額に汗を軽くにじませながら上って来た。円堂は喜ぶように柊のもとへと寄るとハイテンションを見せながら目を輝かせる。同じように柊もまた円堂を見るなりニコリと笑顔を見せた。
「待っていたぜ、特訓とそれから今日あった事と……とにかくいっぱい話したいことがあるんだ！」
「じゃあ特訓はそれを聞いてからにしようか。聞いてあげるよ、話してごらん」
円堂は鉄塔下の椅子に柊と隣同士で座ると今日の出来事を全部話した。円堂の今の気持ち、そして悩み。まるで今の二人は、弟が姉に相談するかのような様子というべきか。柊は相槌(あいづち)をうちながら一つ一つ円堂の言葉に耳を傾けた。そして、ときおり笑顔を見せながら自身の苦労を肯定しているしてくれる柊の姿に、円堂はすっかり時間も忘れて無我夢中になっていた。
「帝国学園か。また面白いところと当たったね」
「みんな負けるなんて言ってるけど俺は絶対に勝てると思うんだ！だって同じ中学生なんだぜ？　勝てない訳がない。柊さんはどう思う？」
「どうだろうね。でも一つ言えることは、サッカーも私がしていた野球も同じチーム戦。皆が一つにならなければ勝つことはできない」
柊は上着を脱いでいつものように後ろで髪を一つにまとめると円

堂に向き直った。
「でも、ハッキリ言ってあげるさ。どんな弱い生物にも武器はある。
――私のいた弱小野球部、〝桜城学園は帝国学園の野球部に勝った〟ことはあるぞ」
「え？　帝国学園て野球部あったのか!?」
「知らなかったのか？　サッカーが有名過ぎて隠れてはいるが、あそこは野球部だって恐ろしい強さを持っているんだぞ。かつて帝国学園野球部は、その圧倒的な強さから〝悪魔の球児達（デビルズナイン）〟と呼ばれていたほどだ。日本野球界の頂点付近に君臨するレベルと言えば分かりやすいかな？」
「じゃあそこに勝ったってことは柊さんて凄いプレイヤーだったのか!?」
「当然！　今だって現役で通用できる程に体は鍛えているさ」
ちょっとした自慢話を柊は円堂に聞かせると、余程話の内容が気に入ったのかその眩しい瞳光線を放ち始めた。
「どんな弱い生物にも武器はある！　ハハッ、俺気に入ったよその言葉！　じゃあ早速練習だ。じいちゃんの言っていた通り諦めなければ勝てる！　それは嘘じゃないんだ!!」
張り切って円堂は立ち上がると柊に白い歯を見せる。どうやら上手く励ましにはなったらしい。じゃあ今度こそ特訓開始だ。

４話：雷門サッカー部集合！

「それで円堂君。その帝国学園との試合はいつになるんだ？」
「一週間後です！」
「――ブフッ!!」
あまりにも予想外の返事に「正気かこいつは!?」と言わんばかりに柊は吹き出した。
一週間で部員を揃えて、練習をして、日本一の帝国学園に勝つ!?
ちょっとそれはないだろう！　絶対に無理だ。私達が帝国に勝った際はとんでもない死に物狂いで数カ月練習してようやく勝ったのだ。馬鹿げた奇跡でも起こらなくては勝つことはできない。
まさかの一週間という短い期間で勝つとは聞いていなかったため、柊は絶望的な表情をつくることになった。しかし、勝てると言いきった以上それを否定してみせなければならない。
「円堂君、聞いてくれ。ハッキリ言って現状で勝てる確率はゼロだ」
「え!?　じゃあどうすればいいんだ!?」
ハッキリと柊の口から告げられた言葉に円堂は目を丸くすると同時に落胆する。当然だ、今の内に絶望しておくのが吉だろう。この際変な希望を持たせるくらいなら真実を伝えてやった方がいい。日本一の帝国に戦力すらまともに整っていない学校が勝てるものか。ひのきの棒を持ちながらゲームのラスボスに挑むようなものである。
しかし、さっき柊自身が言ったように「どんな弱い生物にも武器はある」という言葉はデタラメだと反発する人間もいるかも知らないが、紛れもない事実だ。柊はガックリと肩を落としている円堂に近づくと代わりに肩を掴みながらこう伝えた。
「特訓メニューを組んでやるさ。勝てる確率を無から有にするメニューをな」
やるさ、やってやる。本人が勝つというなら、１パーセントだろうが勝てる確率を生まれさせてやる。柊は軽く準備運動をするとすぐさま円堂に再び向き直った。
「時間が無い。早速円堂君の身体テストをさせてもらう。私の真似を

してほしい」
タンッという音と共に舞い上がる土埃。足を蹴り上げた柊は逆立ちの姿勢をつくる。続いて視線で「さぁ君もやれ」と合図が円堂に送られた。従うように今度は円堂が逆立ちの姿勢をつくるが、柊と比べて体が左右に揺れていたりとどこかおぼつかない逆立ちが出来上がる。
「ふぐぐッ、この態勢キツイぞ！」
一言だけ円堂の様子を見ながら柊は「よし！」と言葉をかけると、そのまま真っ直ぐ歩き出した。
「これはテストだ。今から丘の下まで逆立ち歩行をして戻ってくる。一度でも逆立ちが崩れたらそこで終了。いい？」
「あ……ああ！　オーケー……だぜ！」
「よろしい。その根性がどこまでのものか見せてもらおうか」
柊はバランスを保ちながらスイスイと歩を進め始める。その後ろに今にも崩れそうな様子で続く円堂。最初の鬼門は下り坂だ。バランスを崩せば一気に転倒する行きの難所である。柊は手首の力を上手く使い安定した様子で進む。まさに余裕と言うものだ。一方で円堂と言えば鼻を膨らませて気合で耐えているという状況。普通だったらもうこの時点で倒れてもおかしくはない。しかしそれでも耐えて進むものだから柊は素直に驚きの表情を見せていた。
「へぇ！　すごいな円堂君。私なんて中学時代は逆立ちすらも出来なかったというのに。さすが男の子だね」
「にゃ、にゃんにょこれしきぃ～～」
円堂は体どころか言葉ですらあやふやな状態になりながら必死に柊の後ろをついて行く。そしてようやくの往復点。ターンを返すと今度待ち受けるのは帰路の上り坂だ。下りと違って身体を支えるのにプラスして高い位置に持ち上げるという鬼門が待ち受ける。
柊は温存していた体力を使い始め一歩一歩力を込めて前進していく。大体中央程まで来たところだろうか。行きで既にばててていた円堂はここでついに大きくぐらつくと、ドスンという音と共に地面へ足をついてしまった。

「そこまでだな。意外とやるじゃないかサッカー少年」
「ぐあっ、腕がキツイ、パンパンだ！　柊さんよくこんなものを平気でやれるな」
「ふふん。言っただろう、鍛えているって。２２歳が中学生に負けてたまるものか」
　円堂の様子を見て柊は現状の体力についてまとめる。体力・精神力の面では非常に優れており、技術的な能力は欠如。逆立ちを通して今のを判断すると、今度はいつも円堂が行っていることを見せてもらう事にした。
　タイヤを気に吊るし、振り子のように勢いをつけキャッチング。しかもそれをタイヤを背負って行う。その光景を見て柊が口にした言葉は「化け物だな」だった。確かに常人がこんな自分の背丈ほどもあるタイヤを背負いながら練習に励む姿など滅多に見ることはない。さらにいえばこれはシュートを止めるための特訓だそうだ。円堂のノートを見せてもらった柊は解読不能な絵と文字の羅列に首を傾げてはいたが、当の本人には何が書いてあるのか読めるらしい。
　サッカー馬鹿。こんな光景を見せられれば疑う余地はなかった。おそらく今まで見て来た人間の中でこれほどまでにその言葉が似合う人間は他にいないだろう。柊はそう確信するとクスッっと口元を緩ませた。
「正面からよりも半身で受けた方がいい。足は肩幅、爆発的なエネルギーは下半身を上手く使う。やってごらん」
　カウンターを食らうように何度も吹き飛ばされていた円堂に柊は体の使い方をアドバイスすると、ここでついにタイヤのキャッチングに成功した。
「や、やった！　成功したぞ柊さん！」
「ああ、やったな。しっかり見ていたよ」
「今のでノートに書いてある必殺技が少しつかめた気がする！　ありがとう！」
　まったく、こんな無邪気に笑う人間を見たのはいつぶりだろうか。柊は気が付かぬ間にまた温かくなる胸を握りしめていた。

さてもう一息練習だな。そう思いながら円堂のキャッチングを指導していると、後ろから雷門中の生徒らしき人が視界へと現れた。
「無茶苦茶な練習しているな円堂」
「風丸!!」
背まで伸びた青い髪にスラリとした体。風丸と呼ばれた少年は練習でヘロヘロな円堂のもとへ駆け寄るとその体を支え起こす。
「あそこにいるのがお前の言っていた指導してくれている先生か？随分と歳が近いように見えるが」
「それでも年上さ。いい先生だよ柊さんは」
何かこっちへと視線を向けてくる風丸に気付くと、柊は彼に向けて笑みを見せながら手を振って見せた。これがまた面白く、向こうにとって予想外な行動だったのか、一方で風丸は反応に困ったのかキョトンとした様子を見せる。
「円堂、こんな練習ばかりしているが本当に帝国に勝つ気か？」
「もちろんさ。あそこにいる柊さんが言っていたんだ。どんな弱い生物にも武器はある、戦う力はあるんだってな！」
「……あの人が。……そうか、分かったよ円堂」
風丸は円堂に向けてそっと手を差し伸べる。
「風丸？」
「お前のその気合乗った。俺もやるよ、サッカー」
「――!!　本当か!?　ありがとう風丸!!」
目の前に差し出された風丸の手を円堂は熱く握る。それはもう友情に満ち溢れた握手であり、数メートル離れていた柊にも伝わる程のものだった。
――柊、俺様が力になってやるよ。いつまでもそんな不貞腐れている顔をするな。
やっていた競技は違えど、自然とその光景に柊はかつての自分がふと重なったように映った。
続け様に風丸は柊の方向を振り返ると、誰かに言い聞かせるように言葉を放った。
「俺はやるぜ。お前らはどうするんだ？」

その言葉に反応するかのように柊の後ろでゴソゴソと動く人影。柊もまたその人影に向かって言葉をかける。
「お前らはどうするんだ？ってさ。そんなところで見てないで出ておいで」
ぞろぞろと出てくる人影。壁のように大きな巨体をした人間から、小さな栗のような人間。そうだ、今後ろから出てきた人達こそ雷門サッカー部の部員たちである。彼らは柊の後ろから飛び出すと円堂のもとに一気に駆け寄っていった。
向こうの円堂と言えば、みんなに囲まれるや再び満面の笑みを咲かせる素顔。しまいにはどんな言葉をかけられたのか「みんな～」と口にしながら泣き出してしまうくらいだ。
青春しているな。そう思いながら柊も外からその様子を笑みをつくりながら見守っていた。
「ようし、みんな！　練習するぞ！」
円堂の掛け声と共に彼を囲む全員が声を張り上げた。その光景はバラバラになったパズルのピースが再びはまり、雷門中サッカー部という絵を映し出す。
円堂は柊の方に今度は向き直ると、こっちへ来てくれと手を上げる。
「柊さん！　こっちに来てくれ、みんなに紹介したいんだ」
言われた通りに柊は彼らのもとへ寄ると、それぞれの顔が視界に入る。初の雷門サッカー部の部員たちとのご対面だ。いかつい顔をした人。ポケ―ッとした顔。呼ばれたところに飛び込めば様々な顔立ちが揃っており、それは多種多様だ。
「みんな、俺と秋が話していた不破柊さんだ。助っ人と言いたいところだが、選手ではなく指導者だ。俺が無理承知で頼んだところ、手助けをしてくれると言ってくれた。仲良くしてやってほしい」
「あ、俺達見てたでやんす！　さっきキャプテンに逆立ちさせてヒイヒイ言わせてた人でやんすね！」
「なんだ栗松、だったら話は早い。彼女の運動神経を見ていて分かる通り、柊さんは一緒に動いて指導してくれる。柊さんからも一言挨拶

を頼むよ」
　一通りの顔を眺め終わったところで円堂からのバトンタッチ。全員の顔が己に集まり、注目の的となる。果たして彼らはこんなぽっと出のどこの馬の骨か分からない自分を受け入れてくれるだろうか。柊はそんな事を考えながら、彼らに伝えようかと悩みつつ自己紹介を始める。
「やぁ君達が雷門中サッカー部のみんなか。私も円堂君から話は聞いている。彼に頼まれて指導する側になった不破柊だ。困った時は頼ってくれ、応えられることならなんでもしよう」
　手短に挨拶を済ませると、柊は軽く笑みを皆に見せた。すると、それが思春期の少年たちに響いたのか顔が赤く変わる者達が現れ始める。しまいには、
「か、カッコ可愛いッス！」
「想像していたよりもすごくクールビューティでやんす！」
「そうかぁ？　俺には歳もそんな変わらんガキにしか見えないがなぁ」
　彼らが見せる反応は本当に十人十色だ。
　今から7年前。柊が桜城学園野球部に所属していた時、その時もまさにこんな感じの人間が揃っていた。懐かしいような寂しいような、これも運命というべきなのだろうかと柊は心の内をくすぐられる。
「今ピンクの彼が言ってくれたように私もたいして君達と歳なんて変わらない子供だ。無理に敬語を使う必要も無ければ、気を使ってくれなくてもいい。ハッキリ言ってしまえば君達が満足できるような指導ができるかどうかわからないし自信も無い。だから共に成長できればいいと思っている」
　今言えることは以上だ。柊はここにいる全員にその旨を伝えると多少は理解してくれたのか、ちらほらと「よろしく」という返事が返って来た。
　とりあえずだ。急ピッチではあるようだが試合を行うための土俵には立てた。次の課題は帝国と戦えるだけの技術を付けるところだが、一週間程度ではどうにかできるようなものではない。はてさてど

うしたものか。
課題を一つ突破したところで問題は山積み。とてもじゃないか消化させるのは厳しい現状だ。柊は唸るように考え始めると、各自練習に取り組みはじめた雷門イレブンに目をやった。

5話：僅かな確率を生むために

青紫色のインナーカラーが入った黒髪を指先でくるくるいじりながら、柊は初めてサッカー部の練習というものを目に焼き付けていた。

昨夜から一夜明け帝国との練習試合まで残り5日。今日もまた河川敷にてまた夕方からサッカーをするのかと思いきや、思わぬことに柊は雷門中を偶然通りかかった際に円堂の目に留まり、こっそりと雷門中グラウンドに連れてこられたのだ。おかげで目立たない場所にて柊は指導している最中ではあるが、今にも教師にバレて注意されないかと肝を冷やしながらビクビクしている。

「あぁ……本当に勘弁してくれ。円堂君め、何が〝若く見えるから大丈夫〟、だ。身元確認されたら通報されたっておかしくないぞ。頼むから変な先生の目にだけは付かないでくれよ……」

そんなこんなで周りの目を気にしつつも今実際にいつもの練習を見させてもらっているのだが、思っていた以上に彼らは筋は悪くなかった。

昨日は鉄塔での全員の個人的能力を円堂と同様に評価したところ、精神力、耐久力といい肉体的な能力では申し分ない。柊はかつていた桜城学園野球部の初期と比較しても、十分に彼らは力があると評価できていた。しかし、問題となるのはやはり技術力。サッカーをうまくこなせない柊から見ても、連携がまるでなっていないどころか今にも怪我をしてしまいそうな行動さえ見て取れる。

「壁山君、君は体が大きいのだからブロックの際はもう少しくっついてあげたらいいんじゃないか？　それだと簡単に抜かれると思うぞ」

「ハ、ハイッス！」

「栗松君は迷いすぎだ。中途半端にパスを回して奪われるぐらいなら自分で上がったほうがいい」

「わ、分かったでやんす！」

「風丸君はボールだけに視線を取られるな。周りの人間の動きにも注目し、視野を広く持て」

「ああ！」
　壁山と栗松は非常に素直な子たちだ。言っていることをしっかりと聞き実践に移そうとする。風丸は陸上部からの助っ人だということもあり、サッカーの動きはまだそこまで慣れてはいない感じがある。しかし、柊以上に向上率が早いのは見てわかるほどだ。
　柊はサッカーに関しては専門的な知識は乏しい。だからこそ基本的なことと、体の使い方くらいしか指導してあげることはできない。自分でも不甲斐ないとも何度も思うが、それでも少しずつ彼らは言われたことを理解して昇華させサッカーの動きへとモノにしていた。半端ではない成長力である。また、自分の言葉で技術の上昇が見て取れるのは柊自身にとっても嬉しいことだった。
「うわっ！　くそっ、取られちまった！」
「軸足がぶれているからだ。半田君、軸足で踏ん張りを利かせて重心をしっかり固めてごらん」
「うっ！　くそっ、うまくいかない！」
「まだぶれてる。自身より大きい選手に勝つ鍵はバランスだ」
「簡単に言ってくれるが難しいぞこれは！」
　だが逆も然り。当然全員が全員指示されたことを完璧にこなせるわけがない。上手く技術へと昇華が出来る時もあれば、今の半田ように苦戦するときもある。こんな時に関しては体の使い方を柊自ら手取り足取りマンツーマンで時間を掛けて指導してあげたいところだが、厳しいことにそこまでの余裕は今現在ない。切羽詰まっている状況なのだ。残り一週間もない現状では、少なからず問題は自身で解決しなくてはいけない。
　ＤＦの風丸・壁山・栗松。ＭＦの半田・宍戸・小林寺。ＦＷの染岡。そしてＧＫの円堂。全員の顔をようやく覚えて、大分馴染めてきたと感じ始めると柊は腕を組んでいよいよ特訓メニューについて頭を働かせる。
　ＤＦとＭＦはそれぞれまだまだじっくり見てみたいという感想はあるが、ある程度は実力が分かった。先ほど見せてもらったＦＷの染岡君に関してもだ。よし決めた、猶予はないとはいえ帝国戦まであと

5日あるなら、あのメニューをしてみよう。
柊は一度シュート練習をしていた染岡と円堂のもとへと寄ると、思いついた特訓メニューについて話しだした。
「――え？　みんなの一番弱いところを今から徹底的に鍛え上げる？」
「そう。君たちの技術練習はそれからでもいい」
「おい。どういうことだよ、そりゃ？」
「君たちの技術練習を見て思いついたことさ。絶対に後悔はさせないよ染岡君、円堂君」
技術練習のメニューに関してはハッキリ言って柊がどうこう口出すものではない。変に柊がこんなフォーメーション練習をしろだのと言うよりも、彼らには自分達で試行錯誤してベストな練習法を編み出させるほうが性に合っている。そこは練習風景を眺めていた柊が自信を持って判断できることだった。そういうところもまた自分のいた野球部と一緒だと柊は思うが今は当時を懐かしんでいる時間ではない。
技術練習を除いて彼女が指導すべきところはどこなのか。その答えはこれだ。サッカーを行うにあたっての体の使い方、そしてセンス。つまりスポーツすべてに共通しているところだ。それを磨くメニューを組み立て実践する。
柊は口元で悪い笑みをつくって見せると、二人の肩を寄せて耳元でこう言った。
「――ちょっとだけキツくて、明日まともに動けなくなると思うけど我慢してね。大丈夫、試合で絶対無駄にはならないから」
多分ネットリボイスとはこのことをいうのだろう。普段中性的な口調の柊が女性らしく、そして魔女が放つようなささやきで円堂と染岡の耳元をくすぐる。こそばゆいのか二人は身をよじると、羞恥心と得体の知れない悪寒で顔を赤くさせながら体をピクリとさせた。
そうとも。ただでさえ昨日の逆立ちテストで円堂達は腕がパンパンになっているというのに、それを平然と何往復もこなしていた柊の口からキツイという言葉が出たのだ。変な身震いが起こらない訳が

無かった。もちろん拒む権利など彼ら自らが柊を指導者として認めて頼んで来たのだから、ある訳は無い。
　雷門イレブンが円堂のかけ声で集合すると柊は手の平をパチンと叩き、全員に向けて笑顔を向けた。
「君達の特訓メニューＮｏ．１が出来た。その名も〝弱点くすぐりリズム運動〟。君達の弱いところをっ徹底的に鍛えるためのものだ」
「弱点くすぐりリズム運動？　何だそれは？」
「ふふん、やってみれば分かるさ風丸君。――ルールは簡単。私の動きを真似しながら後についてくればいいだけ」
「嫌な予感がするな。どうせリズムを取りながら昨日の逆立ちみたいなことやらせるんじゃないのか？」
「心配は無用、逆立ちはもうしない。ただ代わりに私がリズムをとるから、合わせてついて来ること。超簡単だ」
　とりあえずルールはやって覚えろだ。柊を先頭に全員が整列すると、全員の足がゆっくりと動き出す。
　最初は全員がついてこれるペースで走り始め、三分ほど走ったところで柊が動きを変え始めた。
「――そろそろ始めるよ、しっかりついておいで」
　タン・タン・タン・タン！　いわゆる２０ｍシャトルランの四拍子リズムバージョン。それで走るペースが少しだけ加速する。そして２ループ目でまた加速。３ループ目でさらに加速。あくまで雷門メンバー全員がなんとかついてこられる速度までループを増すごとに加速していくと、今度は減速だ。さっきとは反対に四拍子のリズムが繰り返されるごとに少しづつ減速していき、すぐに最初のペーススピードへと戻る。
　しかし、これが終わりではない。もとのペースに戻ったら次はまた加速。そして速度がある程度まで高くなったらまた減速。これの繰り返しが続いていく。
　大体１５分程度走ったくらいだろうか。そのあたりで手を膝について動けなくなる人が出始めた。
「もう駄目ッス、動けないッス!!」

「ペースが変わり過ぎて思うように動けないでやんす！　こんなの長くは持たないでやんすよ！」
　地面にへたり込みながら壁山と栗松が悲鳴を上げる。こうしてみるとまともにまだ活動が出来るのは風丸と円堂と染岡だけといったところだろうか。とはいえそれでも全員が苦痛の表情をつくっていたのには変わりはない。他にも悲鳴を上げたそうにこっちを見ている者もいるようだが、柊は気にせずにみんなへとドリンクを手渡し始めた。
「はい染岡君。君の飲み物」
「ああ、悪いな。それにしても不破……さんよ」
「呼びづらかったら不破でいい」
「じゃあ、不破。これはで本当に弱点が鍛えられるのか？　とてもじゃないが信じられないぞ俺は」
「まぁ、簡単に実感できるようなものじゃないのは確かだね」
「なんだそりゃ。そもそも俺達の今の最大の弱点てのはなんなんだよ？」
「帝国戦まで時間が無いから別に教えても構わないが、本音を言えばこの弱点に関しては自分達で見つけてほしいと思っている。その方が君達の成長につながるからね。でも例え今日明日で分からずとも、遅かれ帝国戦が始まってしまえば嫌でも気付くだろうさ」
　時間が無いというのに意味のない練習など絶対にするものか。柊は練習の意図がつかめていない染岡にそう伝えると、他のメンバーにも同様に励ましの言葉を送り続けた。
「さて、特訓再開だ」
「ええ!?　もうでやんすか!?　せめてあと何セットやるのか教えてほしいでやんす！」
「へぇ、栗松くん。君は残り何セットやるのか知りたいのか」
「もちろんでやんす！　全員も知りたいと思うでやんす」
　まだ一セット終わっただけだというのにフラフラな栗松。いや正直には彼だけでは無くてほとんどの皆がそうだ。逆に柊が全然と言っていいほど疲弊していないことに全員が驚いている。

柊は疲れて顔が歪んでいる全員の表情を見ると、楽しそうに悪い笑みをつくりながらこう答えた。
「――教えてあげない。５セット？　１０セット？　もしかすると２０セットくらいあるかもしれないな」
この女は何を言っているんだと円堂以外の表情が凍り付く。終わりが見えないといのは中々恐ろしいものだ。陸上部の風丸ですらこんな変な練習がキツイと感じている。だというのに楽しそうな表情を見せながら柊は雷門メンバーを限界まで追い込んでくる。せいぜい良い特訓だと感じているのは円堂くらいではないだろうか。
嫌でもこの時、円堂を除いた全員が痛感しただろう。そして思ったに違いない。この女、不破柊は〝ドＳ〟であると。
「みんな、大丈夫だって！　これは絶対に明日へつながる！」
「ふふっ、円堂君。やっぱり君は良い、面白い男だよ」
ただ一人、全員を引っ張るように円堂が立ち上がる。その表情にはまだ余裕とさえ見て取れる笑顔が残っている。さすがにキャプテンというだけあって周りとは違うな。今度は純粋な笑顔をつくりながら柊は笑いかけた。

リズム運動。それが終了したのは3セット目が終わった時だった。ＤＦ陣である壁山と栗松、ＭＦの宍戸と少林寺が完全に動けなくなったのだ。他の半田、風丸、染岡でさえまだ動けるにしても、もう見て分かる通りに膝が笑っている。あの円堂でさえ空元気状態だ。
「皆がこんな状態になっているところを見たの久しぶり。柊さん、一体何をしていたんですか？」
「あぁ、秋さん。君は途中から来たんだったね。ちょっとだけ〝身体慣らし〟の運動をしていただけだよ」
動けない人は柊が背負い、全員を邪魔にならない場所へと移動させる。壁山に関しては柊は持ち上げられないため、何とか引きずって移動させた。一緒に走っている時よりも今の引きずっている時の方がキツかったとは柊は口が裂けても言えない。

全員を休憩させている間に柊は秋のもとへ寄ると一冊のノートを差し出した。
「秋さんにはこれだ。選手の特徴と、弱いところを全部まとめてみた。万が一怪我した時の応急処置も書いてある」
「……すごい、これ全部まとめてくれたんですか!?」
「私は明日と明後日は用事があるため出られない。もし練習するようだったら、そのメニューを彼らに伝えてあげてくれ」
秋は雷門サッカー部の唯一にして一人のマネージャーだ。誰よりも身近で彼らを見て来た彼女ならば、きっと上手くやってくれるだろう。
さて、帝国戦までは残り五日。この間に彼らがどれだけ力を見に付けられるか。勝てる確率は未だゼロか、それとも少しだけ生まれたか。それは柊自身も分からない。だが約束した以上、勝てる確率を発生させる義務がある。例え最初に話したようにそれが1パーセントまで上がらなくても、0．1パーセントだっていい。決してゼロのままだという事には何があってもさせるものか。
柊は誰にも見えないように拳を握ると、そっと円堂率いる雷門メンバーを見つめ返した。

「――やっておりますね皆さん」
秋と柊が話していると、突然後ろから耳に届いた低い声があがる。振り返ってみればそこには眼鏡をかけた雷門中の教師と思わしき人物が立っていた。
「冬海先生!」
〝先生〟。突然な出来事と秋の口にした言葉でヤバいと柊が背中を向けるがもう遅い。冬海の視線は既に柊を捉えていた。一か八か自分はよその学校の中学生とでも言って切り抜けようとも考えたが、表情までも見られた冬海の目をごまかせる気がしない。
部外者の人間が許可なく校舎に立ち入っている。しかも成人を迎えた人間がだ。これはマズい、厳重注意で済めばいいが、下手すれば通報されたっておかしくはない。特訓に夢中になっていてすっかり

周りの目を忘れていた柊の表情がサーッと青ざめ、不安の色に変わった。
柊は焦る心を落ち着かせながら、この場を切り抜ける手段を考える。
「おや、あなたが不破柊さんですか？」
ふと後ろから名前を呼ばれると、柊の体がびくりと飛び跳ねた。
「ど、どうして私の名前を……」
「ええ、木野さんから伺っていたものでしてね。サッカー部を指導してくれる人が見つかったと。私は冬海卓、サッカー部の顧問です」
最悪な状況を考えていると、予測していた反応が返ってくる訳でなく自己紹介が目の前でされる。内心「あれ？」と思いつつ表情をうかがうが冬海に怒っている様子は見られない。柊は少し落ち着きを取り戻すと、秋が隣で親指を立てている事に気が付いた。「事情は既に伝えてあるよ」と秋は言う。そう、秋が遅れてきたのは柊の事を冬海に説明しに行っていたのだ。
まさかのお咎めは無しということに、事前に説明をしてくれていた秋へと感謝し、柊は胸を撫で下ろす。下手すれば一体どうなっていた事か。
しかし、そこは良かったものの、続いて襲ってくる嫌悪感に柊は今度襲われることになった。
ジロジロとつま先から頭の先、それも毛先までじっくり舐めまわしてくるような視線。そう、視線だ。そしてブツブツとこぼれる独り言。気持ち悪いことこの上ない。あまりにも変態染みた不可解な行動に、すぐさま生理的嫌悪感を柊は抱き始めた。
「あの……私に何か？」
「……不破柊さん。〝貴女の事はよく知っていますよ〟、サッカー部をよろしくお願いしますね。学校には私が伝えておきますので自由にグランドへ入ってください」
柊は冬海がそう述べた瞬間、一気に寒気と鳥肌が立つ。それは冬海がグラウンドから去った後もしばらく続くほどのものだった。
〝貴女の事はよく知っていますよ〟。

この辺で柊は有名でもなければ、特別な人脈がある訳ではない。だというのに、よく知っているなんて言葉が出てくるとは柊自身も思わなかった。

あの先生は一体何者だ。それは自問自答しても答えは出てこない。ただそれでも今少しだけ会話をしてハッキリ言えることは二つあった。あの人はまともそうな人ではないこと。そして少なからず変態に間違いはないこと。柊はそう判断し、冬海卓という名を頭の中に刻み込んだ。

6話：不穏な空気

色とりどりの鮮やかな彩色。香水よりキツくなく、優しく鼻腔をくすぐる甘い香り。ご要望には喜んでお答え致します。大切な人にいかがでしょうか、稲妻フラワー。

商店街の一角にてそんな看板が掲げられている小さな店、稲妻フラワーショップ。ものやさしい店長が経営するこの花屋で、一人の柊（バイト）が仕事をこなしながら腑に落ちない表情を見せていた。

「……一体なんだというんだ」

誰にも聞こえないような小さな独り言。ポツリと発せられた言葉が柊から漏れる。

――何者かの視線を感じるようになったのは、つい最近円堂達と一緒に特訓をするようになってからだった。

ストーキング。

柊にとっても最初は気のせいかと思う程度のものだった。チームに参加したという事もあり、必然的に多人数の交流が増えていた。だからせいぜい視線を感じるなんて言っても、知り合いになった人がどこかで自分の事を見ていたのだろうとしか思っていなかった。

しかし、それが違和感に変わり、やがて何かがおかしいと確信に変わる。常に後をつけてじっと行動観察のような事をされていると気付くまでは、そう時間はかからなかった。

誰だかわからないがコバエのように付きまとってくる者がいる。柊はいつも通り仕事をしながら考える。通報して懲らしめてやりたいのが本音だが、その正体というのがつかめてはい。現に今のようにずっと視線を送られてはいるが、手も出されてはいない。さてどうしたものかと。

「ええい、我慢ならん！」

柊は作業の手を止めると、毎度毎度うっとおしい視線を消すために、見られていると感じる店の外へ飛び出した。

「――前々からコソコソと、一体誰だ？　出てこい、用があるならいくらでも聞いてやるぞ！」

勢いよく店を飛び出したものの店の周りには現在誰一人として人の姿は無かった。人の気配はおろか、動物の気配すらも周りにはない。束の間、ずっと感じていた視線も一瞬で消える。
「あ、あれ？　おかしいな……どこへ消えた？」
いつも何かをしようとする度に凝視されているような気味の悪い感覚。あの感覚は絶対に間違いがない。それが消えたということは、どこかへと走り去ったということだろうか。
柊には思い当たる節はやはり見つけられなかった。なぜ急に視線を感じるようになったのか、その理由はいくら数日を振り返っても答えは出てこない。――だが、見ている人物が誰かと聞かれれば、柊はある程度の人物を絞ることは出来ていた。絶対とは言い切れないが、極めて確信に近い。視線を送っているのはあの人だ、と。

「――――はい、私です。……えぇ、間違いないでしょう。青紫が混じった黒髪、中性的な口調、そして幼さの残る顔。……はい、非常に勘が鋭いです。既に私の存在には気付いていました」
稲妻フラワーショップから数百メートル離れた日当たりの悪い物陰。そこで動くスーツを着た人間。ケータイ電話を耳に当てていた男は、走った後特有に息を荒げながら向こうからの声に頷いていた。
「……解かりました、引き続き〝不破柊〟の監視を行います。……はい、理解しています。『王の瞳』は必ずや我々のものに」
暗闇でギラリと光る眼鏡の奥で男の目尻が上がる。彼はキョロキョロと周りを何度か確認して人が誰もいないと知ると、再びケータイを顔にあてがい向こうの人物に向けて呟いた。
「――――再び不破柊（あの者）によって、帝国イレブンも帝国ナイン（敗北者達）とならぬように」

◆　◆　◆

『さぁ、本日のヒーローインタビューの時間です。６回の裏ツーアウトから逆転ツーランを放った――――』

ラジオを駆けながらいつも通りタクシーを運転していると、いつしか２時間を超えるマイナーリーグの試合は終わりを告げようとしていた。運転中に噛むガムの味もいつの間にか消えてなくなり、ただ暇になる時間が再び戻ってくる。

「はぁ、今日ならスタメンで出ると思っていたのに。こういう仕事が暇な日の試合に限って好きな選手が出場しない」

ラジオをブツリと切るように今度は音楽へと切り替えると、風船ガムを膨らましながら柊は座席に深く腰掛ける。今頃円堂君たちはしっかりと練習に励んでいるだろうか。ふと想像してみれば、円堂が全員を引っ張りながらサッカーボールを蹴っている雷門サッカー部の姿が目に浮かんできた。

きっと大丈夫だろう。柊はそう信じながら、渡した練習ノートを思い返す。特別に凄い特訓法を書いたわけではない練習ノート。あれを彼らがどこまで噛み砕き、咀嚼し、吸収できるか。帝国と戦うにあたって必要最低限のメニューはそこに書いておいた。あとは彼ら次第だ。

そんな事を考えていると、ちょうど車のミラーに人影が映った。

円堂達のような中学生程の背丈が二つ。珍しい乗客が来たなと思いながら柊はドアを開ける。しかしその直後だ。あまりの衝撃に、柊は目を見開いてしまう事になる。

女性と間違えられてもおかしくはないような顔立ちと眼帯をした少年。そして赤いマントに身を包み、ゴーグルで目元を覆ったもう片方の少年。凄まじくインパクトの大きい二人の少年が視界に入った。その瞬間にドクンと柊の心臓が大きく脈打つ。

――どうして、ここにいるんだ。

まるで個人を大きく主張するその格好。そして二人が放つ不気味

とも、怪異とも言い難い、形容することが出来ない異様な感覚。過去に散々縁があった感覚と、この独特な雰囲気から柊はすぐさまに確信した。この二人は帝国学園の生徒だと。
「パンダ交通です。本日はどちらまで向かわれますか？」
ただ、帝国の生徒と言えど彼らにとって自分は赤の他人。別にどうでもいいような事だ。柊はそう考えながら後部座席に乗って来た二人へいつもの営業スマイルで語り掛ける。
「指示通りに走らせろ。目的地までは俺達が指示する」
「……？　承りました」
随分と眼帯の少年は高圧的だ。そう思いながらも柊はハンドルを握りタクシーをゆっくりと走らせる。
それはそれは随分と重い空気だった。
これが自分よりも歳の少ない子供が放つ雰囲気だろうか。まるでどこかの偉い社長でも後ろに座らせているような感覚とでも表現するべきか。終始無言が続き、社内で発せられる言葉は、右へ曲がれ、左へ曲がれ、そんな指示と柊の返事が発せられるばかり。普段は後ろに誰かが座れば気の利いた話でもしてあげている所だが、今回ばかりは常に凝視されているような気がして、とてもじゃないがその気にはなれなかった。ラジオどころか音楽さえつける気にもなれない程にだ。
どこでもいいから早く降りてくれ。柊は味のしないガムを噛みながら切に願った。
「――雷門中サッカー部。今度そこと試合をすることになっている」
今まで黙っていたドレッドヘアの少年が呟くように口を開く。予想だにしない突然の事に、柊は少しだけ体が跳ね上がった。一体何事だろうと思えば彼は窓の外を見ながら口角を上げている。
「最近その雷門中サッカー部に新しい指導者が入ったらしい。話に聞く限りでは野球ばかりの人生で、サッカー経験なんてほとんどない素人だそうだ」
ゴーグルの少年は淡々と話を続ける。まさに柊に対し、いかにも聞いてくれよと言わんばかりに口調で。また同じように柊も黙ってそ

の話に耳を傾ける。
「だが、俺達には興味がある。かつて俺達のいる帝国学園を野球でひねりつぶした、その指導者とやらをな。はたして種目の違うサッカーでもそいつは才能を見せてくれるのか、この目で見てみたい」
柊は黙って聞く事しかできなかった。何かを返そうと思えば、何かに引きづり込まれそうになる。五十音、この全ての言葉で何を使っても地雷を踏むような気がしてならないほどに。だから彼らが喋っている間は、何も言葉を返すことはできなかった。相槌を打つことさえも。
「どう思う？　俺達はそいつを引き抜きたいんだ。技術力ではなく、才能を更に磨き上げるための指導者として」
雷門中で新しくサッカー指導者となった人物は一人しかいない。柊は厄介事に足を突っ込んでしまったと、参ったといわんばかりの表情をつくり上げた。
「――ひとつ」
「……？」
「スカウトの話は本人に会って直接するべきだ。菓子折りでも持って監督と一緒にな。私はただのタクシー運転手でしかない」
普段乗客の前では丁寧語を意識している柊が普段通りの口調で彼らに言葉を返す。すると今度は笑うようにして彼らは再び語りかけてきた。
「クククッ……、それは失礼をした。何せ話を聞く限りでは、花屋とタクシー会社を掛け持ちしていると話を聞いていたのでな。てっきり会えるものだと思ってつい口走ってしまった。もし不破柊という人物と知り合いであるなら今の話を伝えておいてくれ」
わざとらしく謝る少年に再び柊は黙ってしまう。この少年らが自分の事をどこまで知っているのかは分からない。しかし、帝国学園という存在が自分に目を付けたという柊にとって予期せぬ事態となった。
帝国学園の目にとまること。それはスポーツでは手段を選ばぬイカレた権力者の目にとまることに等しい。

――冗談ではない。私のチームメイトは奴らのせいでどれだけの人数が野球人生を断たれたことか。あの出来事があったにも関わらず連中が指導者として私を迎えたい？　どこまで舐めているんだ、腹立たしい。

柊は唇を噛みしめるとグッとハンドルを握る手に力が入る。それと同時に、気が付けば視界にはあの帝国学園の校舎が飛び込んで来た。

「――請求は帝国学園に頼む。それと、仕事中かもしれないがどうだ、帝国のサッカーでも見ていかないか？　あなたであればきっと総帥もお喜びになる」

敵地偵察をさせてくれるのか、それは有り難い。是非とも見せてもらおう。――とでもいうと思っているのだろうか。柊は「結構だ」と告げるとドアを開けて二人を正門前へと降ろした。

まるでどこかの要塞だ。見上げれば威圧感を放つほどに大きな校舎。そして軍隊でもあるのかのような雰囲気。圧倒的な存在感を誇る帝国学園を前に、柊は見慣れた筈の校舎を見ながら唾を飲んだ。

柊もここと雷門中が戦うと考えると、不安と絶望しかない。まさに今こうして敵地にいればその気持ちで心臓が押しつぶされそうなほどに。

「では本人に会ったら先程話したことを伝えておいてくれ。帝国があなたを欲しがっているとな。……では失礼する、タクシーのお姉さん。――――いや、かつて『9人の王様（ナインキングス）』と呼ばれた者の一人、『王の瞳』こと不破柊さん」

二人は降りた直後に口角を上げると、すぐさまあの帝国学園の中へと消え去っていった。

7話：来襲

――稲妻総合病院。

少子高齢化が進み、現在では超少子高齢化と呼ばれる時代の今、院内はほとんどが老人で溢れかえっていた。

消毒特有の薬臭さが鼻を刺激し、その臭いはいつ来ても慣れる気がしないと多くの人が感じるだろう。現に朝方からずっと病院の中にいる柊もその一人だ。漫画本を片手に平気そうな顔をして時間を潰しているが、顔に出していないだけで本人は早く帰りたいと前々からずっと思っている。

定期的にいつもの診察を受け、首を長くして待つこと数時間。しかし、いかに待てど自分の名前が会計に呼ばれることはない。寝坊という痛恨のミス、そして予約を取り忘れていたおかげで、病院に滞在する時間がそれは長いこと、ながーいこと。柊が窓の外を眺めれば青い空は赤い空へと変わり果てていた。

「さすがに長すぎるぞ。今日だけでホワイト・ジャックを読み終わってしまった……」

読んでいた医療漫画ホワイト・ジャックを閉じると柊はボーっと窓の外を見つめ始めた。やることがない、早く帰りたい。ただ今は病院から離れたいことで頭がいっぱいになる。まだかまだかと会計に無言で圧をかけるが、そんな思念は通じるはずもない。

ハァと精神的な疲労を見せながら柊は息を吐くと、何か小腹を満たすものを求めて立ち上がる。ジッとしているよりも少しでも動いていた方が気分的には良い。

席から立ちあがり売店へ向けて動き出そうとすると、その時急に柊の体へと鈍い衝撃が走った。

「あだっ！」

「うわっ！」

柊の女性らしくない悲鳴に重なる低い声。尻餅をついたまま声の聞こえた方向を振り返れば、視界にはいつしか見た逆立った髪の毛が映る。――あの少年だ。柊はタクシーの中といい、河川敷といい、再

び彼と出会ったことで気が付けば少年を指差しながら「あっ！」と声を上げていた。
「子供を助けた少年！」
「タクシーの……」
少年は「すまない」と一言だけ口にすると柊の手を取り立ち上がらせた。どうやら彼も柊のことを憶えているようで、「数日前はありがとう」と続けて言葉にしてきた。
今のご時世タクシー代は馬鹿にならない。中学生の小遣いには大ダメージであることは貧乏学生である柊はよく知っている。だから、出会ってすぐさま彼が以前のタクシー代のことを口にしようとしたところで、柊は自分から遮るように言葉を発した。それも今回は運転手という立場ではない事から普段の人と接するように。
「数日前に河川敷で私達を助けてくれてありがとう。君が助けてくれなかったら私も何されていたことか」
「――！　まさかあの場にいたのか？」
「あ、もしかして背中を向けていたから気が付かなかった？　一瞬だけど君とは目が合ったと思ってはいたんだけどな」
「いや、あの円堂とかいう男がしつこかったから全然分からなかった」
これは一体なんという偶然か。思い返せば彼は以前にもここへ来ていたことがあったようだが、体のどこかでも悪いのだろうか。いや、様子からして健康状態に見える。おそらくは誰かのお見舞いといったところか。ふとそんなことを考えながら柊は彼の着ている制服に目が行った。
彼もまた円堂と同じ雷門中。学校では彼と仲良くやっているのだろうかと柊は学生生活を送っている姿を想像する。
「学校生活は慣れたかな？　円堂君が君とサッカーをやりたいと言っていたよ」
「――――！」
柊は前に円堂が柊に向けて相談してきた事を口にすると、少年の顔色が一気に変わった。ギラリと眼光が光ったかと思いきや、研ぎ澄ました剣のように鋭い瞳が柊を射抜く。

「サッカーはやらないと言ったはずだ。なぜお前も円堂(あの男)と同じことを言う？」
「……？　いや、円堂君が君のことを私によく話していたものだから、つい……」
「悪いがサッカーは辞めたんだ。お前は円堂の友達だったな？　ならいっそお前の口からも円堂にそのことを伝えてくれ。しつこく勧誘されて、俺もいい加減うんざりしていたんだ」
「……そうか、気に障ったなら謝る。――でも、勿体ないな。あんなに凄いシュートが撃てるというのに……」
「凄いシュート？　ああ、あれか。あんなものを撃てても、サッカーさえやっていなければ今頃は……！」

鋭い視線を放っていたかと思えば、今度は少しずつ消えていきそうになる声。
一体なんだというんだ。この少年は何をムキになっている？　一緒に会話をしていてもまるで彼の心情が読めないことに柊は表情を曇らせる。ただ単に円堂君の事が嫌いで情緒不安定なのか、それともサッカーという単語は彼の何かに触るのか。ともかく彼には何か訳ありな事情があることは一目瞭然だった。多分これ以上のことを言えば地雷を踏む事になる。そう感じた柊は深く掘り下げずに落ち着かせようと声を掛ける。
「まぁ、君のことはよく知らないし、そこまで否定するなら特別な理由があるんだろう」
「……」
多分普段の柊ならばここで話を切って彼と別れていただろう。しかし、柊はなぜか今日に限ってそんな気にはなれなかった。それは自分でもよくは分かっていない。ただ目の前にいる少年が、柊にとって忘れられない人と同じ表情をしていたのだ。
「深くは詮索はしないが、君は似ているな」
「……？　何のことだ？」
あれは忘れもしない事件だ。いや、忘れたくても忘れられない事件

だ。その当事者と目の前にいる少年が同じ目をしている。表情では否定していても、心の底では反対のことを考えている、そんな目を。
　気が付けば柊もまた、人が少なくなってきた病院内で彼にその事件のことを打ち明けていた。
「今から何年前だったかな。私は過去にお兄さんの試合を見に行くと言って、交通事故に遭った少女を見た事があるんだ」
「――――ッ!?」
　ふと柊が口にした言葉を聞いた少年は大きく目を見開いた。
　そう。あれは本当におぞましい悲劇の光景だったのだ……。口から大量に流れ出て、止まることを知らない血液。腹部の皮膚だけでなく、肉という名の内壁が破けて飛び出してきていた赤黄色の内臓。さらにその内臓から顔を見せていた未消化物や糞尿、体液。道路のコンクリートに擦り付けられて付着した爪には皮膚と血痕がついて広範囲に拡散していた事故現場。肉体が半壊している状態で、これが本当に少女だった人間の姿と言えるものなのか。……そんな状況だったあの光景は柊はいつまでたっても忘れられない。
「その少女のお兄さんと君は同じ目をしている。〝自分がスポーツに熱中しなければ妹はこんな目に遭わなかった〟と何度も嘆いていた、あの目に」
「――――お、俺は……」
「変な話をして悪かったね。ただ、君がサッカーという言葉を聞いた時に見せる目。何か複雑な心境で鎖に縛られたような目は、君には似合わないと思ったんだ。気分を害させる話をしてしまったことを謝るよ。もうこれ以上は君の前でサッカーの話はしない」
　柊はちょうど会計に名前が呼ばれたのを確認すると、少年に背中を向けて歩き出した。これ以上は鬱になるだけだと区切りをつけて、柊の話は打ち切りだ。もし次にあった時に何か話をするのだとしたら、今度は野球のことについてだろうか。いっそのことキャッチボール相手にでもなってもらおう。そうだ、それがいい。柊は河川敷で彼とボールを投げている様子を描き上げる。
「――待て！」

急に背中へと声をかけられた柊の足が止まる。
〝まだ話は終わっていない〟。そんな表情が後ろを振り返った柊の瞳に飛び込んで来た。もうこれ以上話す事なんてないと思っていた柊の表情に驚きの色が現れる。彼は、柊を呼び止めると続けて少し口ごもった様子で問いかけてきた。
「その少女と兄というのは！」
「うん？　私の友人の話さ」
「――！　友人の話?!　いや、それもそうだが、ならばその兄妹は後にどうなったんだ!?」
まるで自分の話でもされていたのかと思いきや、友人という言葉が出て来て素っ頓狂のような声を少年が上げる。しかし、話の内容が気になるのか柊のもとへ詰め寄ると、話に出てきた兄妹の結末について
「頼むから教えてくれ」とばかりに訴えてきた。
「それ以上のことは話したくない。私だって感情があるからね」
柊は彼から顔を背けると再び背を向けて歩き出す。まるで何かを掴もうと、その後ろ姿に向けて伸ばされた少年の手が空を切った。その時の彼の表情は色々なものがグチャグチャに混ざり合い、何とも言えぬほどに複雑なものだったのは言うまでもない。
「――ただ……」
「――！」
「あの兄妹は〟人間は立ち止まっていては何も始まらない〟という事を教えてくれる、良い教科書だったよ」
少しだけ足を止めて後ろを振り返ると柊は少年へ向けて、小さく笑顔を見せながら消えていく。
何とも言えぬ虚無感、焦燥感。今もなお頭の中で自分の今の心境が分からなくなってきた少年は、歯を食いしばりながら、ただ今は彼女の消えゆく背中を見つめることしかできなかった。
「夕香……俺は……!!」
少年は俯きながら拳を強く握る。そして柊の後姿に向けて最後に彼の放った言葉。それは院内の誰にも聞こえることはなく空気中に溶けていった。

◆◆◆

――帝国学園との練習試合当日。

嵐の前の静けさとでもいったところであろうか。小鳥のさえずりがよく聞こえる程に静かな朝。今日の空模様は、絵の具をまんべんなくベタ塗したように青く、それでおいて澄み渡った青空だった。

程よい太陽光は戦場であるグラウンドを温め、直接日に当たればまるで光合成でも行えるかのように心地よい。誰もが口を揃えて「運動日和」と言うだろう。

この一週間の雷門イレブンを一言で例えるならば、〝一夜漬けで試験勉強をした受験生〟と言ったところだろうか。突貫工事による安全性がまるで保障できないような、対帝国練習。それがどこまで通用するのかは分からないし、果たして勝てる確率が生まれたのかも分からない。だが、その答え合わせが今から始まる。

「やるぞ皆!!」

円堂の声に続いて他のメンバーも呼応する。追加戦力として補充されたＤＦの影野、ＭＦの松野、そして切り札と自称するＦＷの目金。１１人（イレブン）となった彼らに柊はもう今になって言えることはない。やれることはこの一週間やった。もう柊が出来ることはせいぜいこの一週間の練習から、何かしらの芽が出てくれと祈るばかりである。

――そして、澄み渡る空に暗雲はやってきた。

要塞のような大きな乗り物に、帝国学園という存在を誇示させる旗幟。傍から見れば映画の撮影でもするのかと勘違してしまいそうな光景が現れた。

先程まで心地よかった風は異様な冷たさを帯びながら背筋を舐め、薄暗くなった周囲が恐怖と不安を一気に煽り始める。

「相変わらず派手な演出だな。７年前を思い出すよ」

柊はベンチで腰を掛けながら懐かしそうに様子を眺めていると、よ

うやく向こうの主役陣がお出ましになった。サッカーボールを使いながら敬礼をしている帝国生徒の間を抜け、ぞろぞろとやって来る彼らの姿はまるでどこかの軍隊とすら表現できる。屈強な身体つきに、恐れを知らぬという面構え。誰一人その顔には緊張の色は見られない。

足を組みながら帝国の生徒を一人一人確認していると、当然柊にはあの姿も映った。眼帯の少年と、赤いマントを帯びた少年。つい数日前にタクシーで送り届けた生徒だ。彼らは一瞬柊の顔を見るとニヤリと笑ったかに見せたが、すぐさまウォーミングアップに移り始めた。

――強いチームというのは最初のウォーミングアップで力量が分かるものだ。スポーツに精通している人なら誰しもが知っているだろう。

ハッキリ言おう。柊は彼らのウォーミングアップを見た時点で力の差を知らされることになった。

いつも自分が行うスポーツに対してはポーカーフェイスで見ている柊でさえ、今ばかりは技量の差を見せつけられて瞳孔が開いてしまう。

「彼らの力がどこまで通じるか……」

しかし、指導者が驚いてなどいたら失格だ。すぐさま表情を元に戻すと攻略プランを頭の中で練り始めた。

８話：ｖｓ帝国学園　前半戦

練習試合開始直前、そこでトラブルが一つ起きた。
ウォーミングアップをしていた帝国学園による挑発の一撃（シュート）。それがベンチ脇にいる円堂に向けて放たれたのだ。円堂本人はそれを上手く受け止めて怪我は無かったものの、代わりにすぐそばで見ていた壁山が怖気づき校舎内へと逃げ出してしまったのだ。
試合前から溢れる不穏な空気。誰もが円堂のように「燃えてきた！」などと言えるようなメンタルは持ち合わせていないのは当然のこと。不安というのは柊も含め、雷門メンバーは誰しもが抱き始めていた。
「円堂君、不破さん、マズいですよ。このまま向こうのチームを待たせるわけにはいきません！」
「う……分かりました冬海先生。ちょっと皆で探してきます。柊さん、直ぐに戻るから待っていてくれ！」
一向に戻ってくる気配の無い壁山を探しに円堂達は校舎へと潜っていく。その様子を見ながら柊は最悪な状況だなと軽く舌打ちをすることになった。
「数日ぶりだなタクシーのお姉さん。いや、不破柊」
ベンチで足を組みながら座っている柊に向けられる言葉。見上げれば視界に入るのは赤いマントと、青いゴーグルをトレードマークとした顔。目の前に再び現れた彼の名前は帝国学園キャプテン鬼道有人だ。彼らが自分のことを散々調べてくれたように、柊も帝国学園の情報を調べ無い訳がない。真っ先に覚えた名前だ。
「鬼道有人君か。一体何の用だ？」
「ほう、俺の名前を知ってくれていたとはな。まあいい、俺がお前に話しかけたという事は、何が言いたいかもう分かっているだろう？」
「帝国学園の指導者になれという話か？」
「話が早くて助かるな」
柊は数日前に指導者としてスカウトされたことを思い出した。あの帝国が元野球選手に対して帝国学園のサッカー指導者として仕え

てくれと言ってきたことを。柊は腕を組むと「ふ～む」と喉を唸らせた。

率直な意見としては、言いたいことは山程あった。柊も帝国とは過去に色々と因縁もあり関係が無い訳でもない。しかし7年だ、7年という長い間を空けて今になって何を言ってくるんだというのが柊の最も言いたいことだった。なぜサッカー部を育てろというのか。野球部を育てろというならばまだ分からなくも無い話だが、そこが柊は理解できない。おそらく帝国のことだ、何かよからぬことでも考えているのは何となく察しはつく。

柊は鬼道の顔を見上げると鼻で笑って見せた。相手は謎だらけの訳の分からぬ集団だ。加えて柊には過去の出来事もある。返事は深く考えるまでも無く既に決まっていた。

「私は帝国学園のお偉いさん達の事は大嫌いなんだ。悪いがあそこで高みの見物をしている〝影山総帥〟に言っておいてくれ。〝お前のような奴のスカウトなんて誰が受けるか、バ～カ〟とな」

グラウンドを見下ろすかのように高い位置で椅子に座っている男。帝国学園総帥、影山零治に向けて柊は〝あっかんべー〟と小馬鹿にしたように舌を出した。すると、その様子が向こうからも見えていたのか、高みの見物を決め込んでいた影山本人が、ほんの一瞬だけ僅かに口元を歪ませたのが柊の視界に映る。

下から馬鹿にされる気分はどうだろうか。どこまで偉そうにするつもりか分からないが、同じ土俵に降りてこないなんて言い度胸である。先程からずっと気に食わないと柊は思っていたのだ。だからあの男が表情を少し変えた事でケラケラと柊は笑わずにはいられない。

一方でそれを見ていた鬼道も少し驚いたようなしぐさを見せるが、すぐにいつものように低い声で言った。

「なら仕方がない。力づくでも君がこっちに協力すると気になってくれるようプランを立てよう。総帥の機嫌を損なわせる訳にはいかんのでな」

まるで俺は総帥の命令なら何でも実行するサッカーマシーン。そう表現しているとも受け取れる言葉に、笑みをつくっていた柊の表情

が崩れていく。それに続いて今度は不機嫌そうな表情が鬼道へ向けられることになった。
「ふん、君達も機嫌取りを行う人間か。だから帝国は嫌いなんだ」
「何とでも言え。――楽しみにしておけ、この試合地獄を見せてやる。今回は欲しいデータが沢山あるのでな、せいぜい逃げ出さないように頑張ってくれよ」
じっと視線を向けてくるゴーグルの中の瞳がどんな色をしているのかは分からない。笑いの色なのか、それとも馬鹿にしたことで怒った色なのか。はたまた機械のように無機質な何の感情も無い色なのか。彼を見ているだけでも、試合開始直前という空気がピリピリとした静電気のような感触となって皮膚を刺してくる。僅かばかりの時間ではあったが、鬼道は先程の柊のように鼻を鳴らすと、赤いマントを翻し不気味な微笑を浮かべながらチームのもとへ戻っていった。
最初は温かく心地よいと感じていた風が一気に冷たくなったかと感じれば、次は生ぬるいような気持ち悪ささえ感じるのは錯覚か。この試合は絶対奴らの思うようにしてたまるか。肉食恐竜が獲物を捕らえて噛み殺す、そんな心境が燃え上がるのを柊は感じずにはいられなかった。
試合開始数分前。ようやく円堂達が戻ってきたことでいよいよゲームが開始される。彼ら全員が緊張の様子を見せる中、柊も同じように心臓を高鳴らせていた。なにせ廃部という未来が残っているのだ。それに以前鉄塔の下で交わした円堂との約束も忘れてはいない。
「――おや、これは！　貴女が噂の雷門イレブン指導者さんですか?!」
「――あわわっ、何だ!?」
「アハハ、驚かせてすみません。随分怖い表情をしていたので取材をしたくなっちゃいました！　私、新聞部の音無春奈といいます」
ずっと試合開始ばかりに意識を取られていた矢先に突如の取材。あまりに予期していなかったことから、音無春奈と名乗った少女に柊は驚きと戸惑いの表情を見せ付けることになった。
「ぶっちゃけ、この試合勝てると思いますか!?　マネージャーの木野さんは勝てる自信はないと言っていましたが、皆を見ていると勝つか

もしれない気がするとも言っていました。指導者から見て何かありませんか？」
「え!?　う～ん、そうだな……」
　キラキラと目を輝かせながら質問してくる春奈。それに苦笑いで返しながら、参ったなという表情で考え込む柊。しかし少しだけ黙り込むと、柊は顔を雷門イレブンに向けたまま口を開いた。
「――翼を持つ者は、雛鳥の頃から大空に立ち向かっていくことが宿命付けられている。私は翼の動かし方は教えた。飛ぶ前に獲物に狩られるか、それとも飛んで未来を手にするかは、彼ら次第だ」
「うわぁ！　何だかカッコイイ!!　ということは彼らには翼があるのですか!?」
「もちろんあるとも。あれだけサッカーを愛している少年がいるんだ、雷門イレブンに翼が無い訳がない」
　これは名言ですよとメモ帳にペンを走らせる春奈に再び苦笑いを見せると、いよいよキックオフの瞬間が視界に飛び込んでくる。ホイッスルの音が大きく鳴り響き、試合開始だ。

◆　◆　◆

『雷門中ｖｓ帝国学園！　試合が始まって優勢にいるのは、なんと我が雷門中学だ!!　実況である私、将棋部所属の角馬圭太もこんな展開は予想していなかった！　強いぞ雷門イレブン、頑張れ雷門イレブン！』
　実況がテンション高く吠えるように雷門の出だしは順調だった。最初のボール支配率は圧倒的に雷門が上、相手の動きにもしかと反応出来ていた。相手がリズムを変えてこようものなら、こっちはリズムを順応させ、簡単に奪われまいと常にボールをキープできている。
「へっ、ちょろいもんだぜ。不破の特訓メニューってのはこの弱点を補うものだったんだな！　ゴールまで一気に行かせてもらうぜ」
　染岡を始めとし、あの〝弱点くすぐりリズム運動〟を受けていたメンバー達の運動能力が上昇していることは見て分かる程に明確なも

のだった。相手の動きが見える、反応できる、動ける。それは明らかに自信をもって言えることであり、プレーをしている本人たちも実感できるものだった。

緩急の変化に順応するというのはスポーツでは必須だ。雷門メンバーは特にそこが弱かったものだから、少しでも能力が向上したと感じることが出来た時点で、それは大きなモチベーション上昇力となる。沸き上がった闘志は爆発力となり、ペースをつくり、勝利の扉をこじ開ける合鍵となる。

「行け、染岡！　シュートだ！」

「おおッ!!　くらいやがれ!!!」

円堂がかけた声と同時に染岡の渾身の一撃が帝国ゴールに向かって放たれる。コースは悪くない、むしろ絶好のラインを描いている。これを止めることはそう簡単には無理だ。この瞬間、雷門メンバーは誰しもが一点が入ったと心を躍らせた。――しかし、現実というものはいつも予想外のことを突きつけてくる。

バシン、という音が鳴ったかと思えば帝国のＧＫはいとも簡単にボールへと触れ、汗一つかかずに余裕の表情を見せながらキャッチして見せたのだ。

『ああっ！　惜しい！　帝国キーパーのナイスセーブで雷門得点ならず!!』

ベンチにいる柊たちを含めて、雷門メンバーが落胆する。「あと少しだったのに」と試合を見ていたギャラリーを含め、大勢の人が声を上げる。一方でシュートを打った染岡とベンチで様子を見ていた柊は「あれを止めるのか」と顔を歪めることになった。

簡単には点は取れない。一筋縄ではいかないと柊が痛感したところで、いよいよ帝国メンバーの顔つきが変わる。

「驚いた。思っていた以上に順応してきたな。寄せ集めの烏合の衆がこれだけの動きが出来るようになるとは。不破柊、やはり面白い。ますます欲しくなった」

「鬼道、遊びはこれぐらいにしておくべきだ。まだまだデータを集めなくてはいけない、奴を引きずり出すのを忘れるな」

「分かっているとも源田。見せてやるとしようか帝国のサッカーを。
――やれ、お前達」
グラウンド内の雰囲気が一気にガラリと変わることにいち早く柊が感ずく。生き物で例えるならば檻の中で鎖につながれていた猛獣達が一斉に野へ解放された感覚。自然界で言うなら、雨雲が大きさを変えて積乱雲を形づくり始めたような感覚。それほどのような急激な雰囲気の変化が見えない形となって、柊の五感を揺さぶりをかける。
明らかに何かが変わった。一体何が起きたんだ。そう疑惑が浮かんだ直後に、柊は息を呑むこととなった。大きく形を変えるゴールネットに、吹き飛ぶ円堂の姿。それが柊の視界に飛び込んで来たのだ。
『――ゴールッ!!　帝国学園先制！　一体何が起きたのか!?　雷門イレブン誰一人として一歩も動けないまま得点を許してしまったー!!』
「……!?
?!」
目の前で起こった光景に雷門側は誰もが目を見開いた。
元々帝国は無敗を誇る有名な学校。力の差はあって当然だと柊も重々承知だった。だが、それでも今のはおかしすぎた。相手ボールとなった途端に数秒でゴールが決まる。そんなことを誰が予想できようか。未だに理解が追い付かない柊の頭の中で幾度となく今の相手ゴールがリピートされる。
戦力差があまりにも違いすぎたのだ。予想をはるかに凌ぐほどに。
再びゲームが再開すれば帝国は赤子の手を捻るようにボールを奪い、いとも容易くゴールを奪っていく。その様子はまさに一方的な弱い者いじめと言っても過言では無い。
「――――く……そんな……」
柊が顔を歪めている間にまた一点。成す術がないまま雷門イレブンは蹂躙されていく。既にスコアボードは二桁へと突入。十点という大差をつけられたところでようやく前半終了のホイッスルが鳴った。
疲弊して士気が急激に低下している雷門イレブン。柊は唇を噛み

しめる。ものの見事にやられたと。
　最初の優勢に見えていた時は帝国にとってはただの様子見でしかなったのだ。実力なんてものはほんの氷山の一角程度しか見せていない。つまり彼らがしていたことは精神的戦略、最初は雷門イレブンに少しでも希望を持たせて、その後内に秘めていた実力差を見せつけ絶望に浸らせる。いわゆる〝舐めプ〟と言うやつだ。これのおかげで雷門イレブンの精神は一目見て分かる程にガタガタだ。
「まだ前半が終わったばかりだろう！　みんな顔を上げろ！」
「まだやるんスか、キャプテン？　やるまでも無いっスよ、皆もう走れないッス」
「何を言っているんだ壁山！　勝利の女神がどっちに微笑むかなんて最後までやらなきゃ分からないだろう!?　そうだろう、みんな!!」
　一人闘志が残っている円堂が全員に向けて声を上げるが、それに賛同して立ち上がる者はいない。
　円堂が言っていることはもっともだ。そのことは誰もが理解はしている。だが、こんな現実を見せつけられているのだ。まだ逆転の可能性があるとしても、それは途方も無く程遠い。
　まだ燃え尽きてはいない、試合は終わってはいない、勝敗はついていない。とはいえこの状況をどうやって塗り替えるか。柊は円堂の気持ちを無駄にはしたくなかった。たとえ負けて廃部になるとしてもこんな形での廃部なんかは絶対に納得出来る訳がない。せめて最後に何かできないかと必死になって思考を巡らせた。
　どうすれば向こうに一泡吹かせられる？　どうすれば流れを変えられる？　どうすれば勝利の女神に振り向いてもらえる？
　だが、いくら考えようにも柊にはそのイメージがつけ難かった。練習時間、それがもう少し時間があればと後悔しても始まらない。もはや自分が指導者としていかに不甲斐ないことかと、柊は己の無力さに握り拳を作るしかなかった。
　そして、後半戦は間もなく幕を開けた。

9話：vs帝国学園　後半戦

後半戦の開始。
ベンチで握りこぶしを作っている柊が見たのは、7年前に一度経験した地獄の試合風景と何一つ変わらない光景だった。
後半の帝国ボール。そこでデスゾーンと呼ばれる必殺技の炸裂。それを始めとして帝国学園はラフプレーに近い必殺技を多用する試合展開に持ち込み始めた。風を操り暴力的な風圧でボールを奪うサイクロン。連打による何倍にも威力が倍増された百裂ショット。慈悲の無い必殺技は雷門イレブンを傷つけ、体力、精神力を削り取っていく。
「審判！　こんなものやめさせろ！　怪我で済まなくなるぞ!!」
見ていられないと柊が審判に向けて抗議を申し上げるが、まるで聞く耳が無いかのようにプレーは続行される。数秒に一回づつ迫りくるボールの脅威。もはやトラウマになってもおかしくはない。
『雷門まるで歯が立たない！　風丸が体を張って円堂を助ける場面があったものの、状況は何一つ変わらない！　打つ手なしか!?』
柊はこんな相手に都合のいい試合ばかりあってたまるかと、ベンチに思いきり拳を突き立てた。
翼の動かし方を教えた？　そうだ、その通りだ。だが、空が存在しなければ翼がある意味がない。買収された審判に、まともに試合をする気のない相手チーム。こんな状況で翼など意味があるものか。こんなものスポーツでも何でもない。
「――影山零治ッ！　サッカー部のお前といい、野球部の〝陽海無限（ひのうみむげん）〟といい、どうして帝国の総帥達はこうも汚い真似を！」
柊の怒りに満ちた声と鋭い視線が、未だ高みの見物を決め込んでいる影山へ向けられる。だが、むしろ返ってくるのは不気味なほどまでの笑みと、うなじを冷えた手で鷲掴みにされるかのような寒気さえ覚える眼光。
『貴様のいるべき場所はそこではない。強者は強い場所にいるべきだ。そのためにも雷門のような雑魚は淘汰されるべき害虫だという

事を教えてやろう』
　まるで言葉にしなくとも脳内に直接響いてくるような感覚。視線を交えた際にぐるぐると頭の中が回り始めるのを柊は感じる。
　次第に右眼がズキズキと痛み始めるようになった。同時に過去の傷跡をほじくり返されるかのようにフラッシュバックしてくる記憶。
　骨折によって自由の効かなくなる脚。指先に力が入らず物をろくに持てなくなる指。失われて反応できなくなる聴覚。かつて共に切磋琢磨していた野球部員達が相手チームによって壊されていく様子。思い出したくもない記憶に今の雷門イレブンが重なろうとしていた。そして、かつて帝国によって負わされた右眼の外傷。一瞬にして真っ暗闇の中に引きずり込まれた当時の自分の記憶も、心の奥底に仕舞っていた引き出しからゆっくりと顔を出そうと蠢き始める。
「冬海先生、棄権だ。このままじゃ、彼らは二度とサッカーが出来なくなるぞ！」
「え!?　し、しかし……！」
「しかしもなにもない！　これは試合じゃない、一方的な蹂躙なんだ！　まともに相手はサッカーをしていないんだぞ。これ以上やれば未来が潰れることになる!!」
　最初から警戒しておくべきだった。こんな暴力的な展開を見せられるのは野球部だけだと思っていたが、サッカー部でもこんな事が起こるとは。不破柊、お前という女はなんて浅はかな考えをしていた人間なんだ。もっと考えれば予想できたことだろうに。柊は己を恨みながら、ただひたすらに後悔という念に頭を蝕まわれることとなった。
「どうだ不破柊。少しは心変わりでもしたか？　これはまだ序の口に過ぎないぞ」
「こ……このッ……!!」
　鬼道の不敵な笑みに、柊は返す言葉は出ない。
　自分が雷門イレブンと関係さえ持たなければこんな事にはならなかったのか？　あのとき逆鱗に触れるような挑発をしたからこうなったのか？　帝国の言う事を素直に聞けばこの光景は終わるのか

？　もはや、自分でもよく分からなくなってくる現実に、柊の右眼は更に痛みを増すようになってきた。
　もう考えている時間は無かった。帝国学園が言うように、向こうの協力者となればこの光景は終わるかもしれない。いや、もうそれしか選択の余地はない。唇を噛みしめて、一番言いたくなかったことを口にしようとした瞬間――――

「――――まだだッ！　まだ終わってないッ!!」
　信じられない姿が柊の瞳に映った。全員がもう動けないでいる中、円堂がただ一人「俺はまだやれるぞ」と目に光を宿して立ち上がっていたのだ。顔は擦り傷と打撲で痛々しくさせながら、なおそれでも二本足で地面を捉えている。普通に考えて有りえない光景だった。
　円堂はこんな状況に置かれても勝つ気だ。
　その表情と、光を失わない瞳。それが今、柊にとって燃える上がるような何かとなって心臓の鼓動を早めていく。そして一瞬。そう、たった一瞬だが、記憶の引き出しから忘れ物を見つけるかのように、大切な人の面影が円堂の姿と重なり合った。

――お前はメンタル強くないくせに意地を張りすぎなんだよ。どんな未来になろうと、お前はやるべきことはやった。それは間違いじゃないだろう？　あとは仲間をもっと信頼して肩の力を抜きな。だろ？　柊……いや、柊璃（しゅり）。

　それは錯覚かもしれないが、間違いなく柊にとって過去が現実となって舞い戻って来た瞬間だった。そして不思議な事に、ズキズキとした右眼の痛みが次第に和らぎ始めた。
『帝国がさらに追加点、これで１９点目!!　雷門のキックオフで試合再開だが、目金以外誰も立ち上がることが出来ない!!』
「ひぃぃ～ッ!!　こ、こんなの嫌だ～!!」
『なんとぉ！　雷門のエースナンバー１０を脱ぎ捨てて、目金が敵前逃亡か!?　これで雷門は１０人となってしまった!!」

そうだ。彼らを信じてやれなくて、何が指導者だ。相手がまともに戦う気にないなら、まともに戦わざるを得ない展開にすればいい。こんなところで終わってたまるものか。実況の絶望に染まる声も今や意に返さないと、柊はベンチから立ち上がった。
「無様だな。お前は俺達から一点も取ることが出来ずに終わる」
「いや、まだだ！　まだ終わっちゃいねぇ!!」
「ほう、これでもまだそんなことを言うか」
雑魚は雑魚らしく地面に這いつくばっていろ。そう解釈できる笑い声が帝国から発せられると、再び円堂がボールと共にゴールネットへ突き刺さる。これでついに２０点目……。
誰もがもう駄目だと諦めていた。これで雷門サッカー部はお終いだと。
「いや、円堂君の言う通りだ。試合はまだ終わっていない」
「――！　柊さん!!」
「円堂君、またせてすまない。ようやく見つけたぞ、一つの〝突破口〟を」
口角を上げて笑うのは帝国ばかりではない。今度はこっちの番だ。柊の見せた笑顔により、円堂の表情が一気に明るいものへと変わっていく。
「こんな局面で何を言い出すかと思えば……。笑わせてくれるじゃないか、不破柊。こんな雑魚共がいくら束になってこようと俺達の敵ではない」
「それはどうかな？　今からその雑魚に指を食いちぎられるかもしれないぞ」
「ほう、ならば見せてもらおうか」
試合は雷門ボールから再スタートとなる。このキックオフでこれまでの地獄の光景はお終いだ。柊は円堂に向けて笛が鳴り響く前に指示を伝えようとすると、ここでさらに嬉しい誤算が訪れることになった。
不在となった１０のエースナンバー。それが乗り手を変えて舞い戻って来た。こともあろうに、その顔は円堂も柊もよく知っている

顔。二人の知る限り、願ってもいない現状で最強戦力の持ち主だった。
『おおっ、何ということだ!! あれはフットボールフロンティアで一躍ヒーローとなった豪炎寺修也！ こんなこと誰が予想できようか。目金に変わって彼が雷門のユニフォームを着て戻って来た!!』
「――豪炎寺!! 来てくれると信じていたぞ！」
「大丈夫か円堂！ ――それと……」
「数日ぶりだね少年。きっとどこかで見ていてくれていると思っていた。だが、長話は無しだ。今は君たち二人が試合の要となる」
時間が無い中、円堂と豪炎寺の背中に手を当て出来るだけ近くに呼び寄せる。
「へへっ、任せろ柊さん！ それで、突破口というのは!?」
「ああ、いいか直接は言えないがよく聞いてくれ。彼らは攻撃の際、再び大勢で円堂君を攻撃してくるだろう。もう一度言うぞ？ 〝大勢で円堂君を攻撃〟してくるだろう」
「大勢で攻撃？ う～ん……。――あっ！ まさか……！」
「そういうことだ。少年は始めから気付いていたようだね、流石だよ」
柊は豪炎寺に向けて片目をパチリと閉じて見せると、豪炎寺もまた「ふん」と鼻を鳴らして小さな笑みをつくった。
試合再開。
二人をポジションに着かせると雷門ボールでキックオフ。雷門メンバーもまたこれ以上は好き勝手させるものかと悪あがきに近い抵抗を見せるが、再び繰り返すように最初のパスがスライディングによって阻まれてしまう。
同時に「また帝国ボールに……！」と、秋と春奈の表情がまたもや不安げな色へと変わった。当然だ、ボールを取られれば雷門には成す術がないのだから。しかし、その一方で何一つ動じることなく柊は腕を組んでその動きを見ていた。慌てふためくベンチ陣の中、柊だけは表情を何一つ変える様子は見せることはない。まるで何かを狙っているかのように。
柊にとってここまでは想定内だった。雷門がボールを奪われ、一気

に帝国選手たちがゴール前に密集する。帝国はものの見事に予想どうりに動いてくれていたと。だが、問題となるのはここからであった。この作戦が成功する上で最も大切なこと。それは〝円堂がボールを止めること〟なのである。これが上手くいかなくては小さな突破口は閉ざされる。柊の作戦は言わば諸刃の剣と言っても過言ではないものであった。

「行け、デスゾーンだ」

鬼道の声と共に、帝国の三人が空中で回転を始める。三角形が次第に収束していき、莫大なエネルギーと共に発せられる強烈なシュート。おそらく今試合の中で一番強烈であろう必殺技が今円堂に向けて再び放たれようとしている。

「円堂君、必殺技は放たれてから反応していては間に合わない！　撃たれる前に行動しろ！　所詮三人で打つシュートなんてのは力技だ。際どいコースは狙えない。余計な事は全部忘れて、ど真ん中で身構えてろ、雷門中の守護神！」

シュート直前に柊の声が届いてくれたのか、円堂は笑顔をつくると共に力を溜めるような姿勢をつくる。すると、右手にエネルギーが電撃となって走り抜けるような現象が発生し、それが離れた位置にいる柊にも見て取れるほどに増加していった。

これは絶対に止められる。そう確信に至った柊が今度は豪炎寺に向けて指示を出した。

「今だ少年！　円堂君を信じて走れ!!」

帝国にとって予期せぬ行動だったのか、鬼道を始めとした帝国選手が「何!?」と声を上げる。合わせてシュートタイミングとなり、帝国の必殺技が今放たれる。

「「デスゾーン!!!!」」

シュートを放った三人の声が重なると共に、禍々しきオーラを纏うシュートは威力を上げていく。ここでシュートを止められなければ作戦は失敗だ。止めてくれ円堂君。柊は祈るように円堂を信じていると、まさにそれに応えるかのように円堂の手が金色に光輝いた。

「こんなところで終わってたまるか！　〝ゴッドハンド〟!!!」

吸い込まれるかのようにデスゾーンが光る手の中に入ったかと思えば、完全に威力が無くなったボールが円堂によって握られていることになった。
『デ、デ、デスゾーンが止まったぁ!!　雷門中キャプテン円堂の必殺技炸裂〜!!　帝国のシュートをついに防いだ〜ッ!!』
驚きのあまり帝国側ではその光景には目を丸くして見開いている者がほとんどだ。予想を超える事態が起こったのだ。必殺技と呼べるシュートが雑魚と馬鹿にしていた人間に止められたのだから驚かない方がおかしい。
「……ふふふっ、やってくれたな円堂君。野球以外でこんなに興奮したのなんて初めてだ。すごいな君は」
反撃の刻。柊が口にしていた突破口が今まさに開かれる。
帝国は強い、ドリブルもシュートもブロックも、何もかも雷門より何歩も強い。しかしそれでも、目に見える程の弱点はあった。――〝慢心〟という大きな弱点が。
「雑魚」だと口にしながら大勢でゴール前に上がって来ていたおかげで、帝国の陣地はガラガラだ。今の状況ならば〝カウンター〟にさえ転じられれば小学生にだってゴール前にボールを持っていける。それが豪炎寺修也というストライカーなら、点を入れてくださいと言ってくれているようなものだ。
「豪炎寺、頼むぞ!!」
円堂からのボールが豪炎寺まで繋がる。まさに柊が頭の中で描いていた通りの構図だった。
次の瞬間には豪炎寺は受け取ったボールを蹴り上げ、赤き炎を足に纏い回転力を加えてシュートを放つ姿勢をとる。
「ファイアトルネード!!」
直後、帝国のゴールネットが揺れたのは、まさに圧巻の一言だった。炎の渦が槍となって突き刺さる。その凄まじいシュートは見る者を魅了し、柊さえも興奮で鳥肌を立たせた。
試合を見ていた人達は誰もが思った。まさかこの状況から本当に得点をもぎ取るとはと。そして歓喜と驚愕の声があちこちから上が

ることになった。
『雷門中ついに得点ー!!　窮鼠猫を噛むか!?　あの帝国からついに貴重な1点を奪い取ったー!!』
「ふっ、想像していた以上に面白い情報を得られた。錆び付いていない豪炎寺のシュート、試合状況から最善の策を練り上げた不破柊の洞察力、そして眠れる力を隠して持っていた円堂守、か。――お前達、総帥からの命令だ、引き上げるぞ。情報収集は終わりだ」
『おおっと、どういうことだ!?　帝国メンバーが続々と背を向けていく!　これはまさかの試合放棄か!?』
鬼道は面白い余興であったと柊達に笑みを見せると、実況の角馬が言うように帝国メンバーを連れて引き返していった。それはいわゆる向こうが棄権したという表記であり、審判の口からも「帝国学園の試合放棄のため、この試合雷門中の勝利!」と宣言がされる。
結果論的な勝利かもしれないが、勝利は勝利だ。間違いはない。グラウンドを見れば雷門イレブンはガッツポーズを取りながらこのひと時を味わっている。柊は安堵の息を吐くと、力が抜けきったかのようにベンチへと腰を落とした。

１０話：一難去ってまた一難

空はいつものように夕焼けだった。
雲も無く、視界に満遍なく飛び込んでくる夕陽の光。何一つ普段と変わらぬ光景だというのに、それが今はなぜかいつも以上にスッキリとした綺麗な光景だと柊は感じていた。
横目で隣を見ればすり傷だらけの顔で笑顔を見せている円堂が視界に入り、いつものように河川敷の道を歩いていれば、温かい風が優しく包み込むように肌を撫でていく。本当に今日という日は大変な一日だった。冷めない興奮に、思い出すだけで高鳴る心臓の鼓動音。それはいつも一人で帰っている帰路の道で、今は隣に円堂がいるからだろうか。自然と彼の見せる笑顔につられて自分の眉も下がってしまっていることに柊はふと気付いた。
「いい試合だった。――とは言いきれないが、全然悪いものでもなかった。助けてくれた彼、すぐに帰ってしまって残念だったね」
「そうでもないさ。雷門はこれからもっと強くなる。豪炎寺はその背中を押してくれた、それで十分だ！」
柊も今日初めて知ることになった豪炎寺修也という名前。実力・センス、どれも今日の試合を見れば疑う余地のないほどにピカイチな選手だった。結局彼は円堂達を助けてくれたもの、試合が終わればユニフォームを置いてすぐに立ち去っていった。サッカーをするのは今日限りだと去り際に残して。
いい事もあれば残念な事もあるのが現実であるが、あの豪炎寺がサッカーをやらないと言っても、円堂はいつもと変わらない眩しい笑顔を見せていた。普通の人間であれば、あれだけの実力を持った人材なら様々な方法を駆使して仲間に引き入れることを考えるだろう。諦めるはずがない、ダイヤモンドが目の前に転がっているなら拾おうとしない訳がない。それが弱小であるのなら、なおさら。だが円堂は彼を引き止めることはしなかった。理由は分からないが、彼に対して思っていたことがあったのかもしれない。
円堂守。彼はどんな時でもポジティブに物事を考え、常に前向きな

姿勢でいる。豪炎寺がもうサッカーはやらないと目の前で言ってもだ。空元気なのか、それとも豪炎寺の意思を尊重してなのか。それは柊は円堂ではないためハッキリとは分からないが、もし己が円堂守と同じ立場だったのならば彼のように前向きではいられなかっただろう。柊にとって円堂のメンタルはまさに羨ましいもの以外なんでもなかった。

「柊さんには感謝だぜ。今日の帝国戦では柊さんがいなかったら、今頃どうなっていたか」

「いや、私はむしろ謝るべきだ。最後にしか助言をやれず、大勢の選手は怪我を負った。自分の無力さが……不甲斐ない……」

「ハハッ!! 柊さんでもそんな表情をするんだな! いつもは大人な雰囲気を見せた表情をしているのに」

「なっ……!? 普段は高校生みたいとか言っているくせに、からかわないでくれ。私は意外と臆病者なんだぞ?」

慌てた様子で弁明の意を見せる柊に「相変わらず面白いな柊さんは」と円堂が更に笑う。友達と言える人間がこの辺にはほとんどいない柊にとって、こんなふうにいじられるのはいじられるのは久しぶりだ。つい、ぷいっと柊は円堂から顔をそらしてしまう。再び円堂はその姿に笑みを見せると続け様にこう言った。

「柊さんが考えてくれた弱点くすぐり(特訓)リズム(メニュー)運動。あれを体験した奴らが言ってたんだ。〝怪我を負ったことに変わりはないが、あの特訓のおかげでボールは見えていた。だから危ない場所への直撃は避けられた〟ってな! それに試合後半で柊さんが考え付いたカウンター、凄く良い発想だったと思うぜ。あの作戦を聞いた時、イケるって俺は思ったよ!」

円堂が一人でガッツポーズをすると、その通りだと同調するかのように彼の影も同じ動きを見せる。果たしてこれではどちらが支えている側なのか分からない。柊は今度は照れくさそうに顔を背けると円堂に見えないように小さく頬を赤らめさせた。——でも、これでいいのかもしれない。どんなに野球が上手かった選手であろうと、比例してサッカーも上手いとは限らない。柊はその典型的な例だ。だっ

たら、支え、支えられ、そうしていくことのどこに可笑しなところがあろうか。柊は実感した。自分はまだまだ未熟である、だから彼らと共に成長していけばいい、と。

「それじゃまたね円堂君。しっかり体を癒しておくように」

「ああ！　次は河川敷で練習しているからまた来てくれ！」

夕陽を背に手を振る円堂と別れ、柊は自身のアパートに向かって歩み始めた。

共に歩いていた円堂が消えた事で静かになる河川敷の道。夕陽の光がキラキラと反射する河川を見つめれば何だか懐かしい光景が蘇る。これは確か7年前に柊が行った試合で無惨にも醜態をさらした時のことだろうか。

今日の試合後のことだ。結果的には今日の試合が勝利で終わった事から、雷門中のサッカー部は残存が決定。廃部という未来は消え去ることになった。正直なところ、この話はどこかでずっと似たような記憶があった。それは自身のかつていた桜城学園の野球部と始まりがそっくりだったこと。帝国学園に滅多打ちにされたわけではないが、かつて柊のいた桜城学園野球部も始まりは無残な結果からスタートだった。――ただ、柊の野球部と雷門のサッカー部で違ったところ、それは相手に何か印象を与えて試合を終えたか否かにあったところか。

雷門は一点を奪い、相手は棄権したため勝利した。だが柊のいた野球部は、一矢報いることも出来ず、相手が飽きて帰ったから勝利となった。そんな過去を今思い出した。忘れようにも忘れられない苦い記憶。今思えば柊も雷門があのようにならなくて本当に良かったと感じている。もし同じ結果になっていれば、どれだけ精神的負荷が彼らに襲いかかっていたか。周りからは嗤われ、罵られ、晒される。あの時の精神的苦痛がどれほど大きいか。柊にとって今思い出すだけでも堪ったものではない。

今日はいつも以上に疲れた。帰ったらまずはゆっくりと湯船に浸かってから、食事を済ませ、今日の総評でもつけるとしようか。そんなことを考えながら柊はひと伸びしていると、自宅まであと少しとい

う距離で目に留まるものが現れた。黒く塗られた車に、黒スーツの男達。よく映画やゲームで出てくるあっち系の人間を想像すれば分かりやすいだろう。見るからに明らかに関わってはいけなさそうな人たちだ。なぜあんなのがこの辺にいるのかは分からないが、こういう時は見知らぬふりをして通り過ぎるのが最善の行動である。

柊はそそくさと横を通り過ぎようとすると、一瞬、ほんの一瞬だけ偶然にも視線が交わってしまった。向こうが顔を覗き込むようにじっと見つめていた気がしたのだ。そのおかげか反射的に視線の方向を向いてしまったのだ。おそらくだが、あれで向かないという方がおかしい。

やばっ、と思いつつ早く立ち去ろうとすると肩にずしりと重みがかかる。まるでものすごく思い肩掛けリュックを急に背負わされるような感覚に、後ろを振り返れば黒服の男達がまるで「どこへいくんだ」と言わんばかりに柊の肩に手を置いていた。

「――不破柊だな？　総帥が待っている、ご同行願おうか」

「な、なんだ、お前達は！　私の何の用だ？」

「話は後だ。車に乗れ」

「――ッ！　私の肩に触るなッ!!」

肩に乗せられた手を払いのけると、柊は急いでこの場を離れようとする。冗談ではない、なぜ自分の名前がこんな人達に知られているのか。彼らの言う通りにしたら何をされるか分かったものじゃない。

しかし次の瞬間、左手を一気に締め付けられる感覚が走る。痛いという声を上げる暇も無く、男の太い手が自分の手首をがっしりと握っていたのだ。無理に動かそうとしても巨大な岩に手首が繋がれてしまったかのようにビクともしない。柊がいくら運動神経がよかろうが彼女もまたれっきとした女性だ。いくら抵抗したところで握っている手を振りほどこうにも、大の男には筋力では敵わなかった。

「な、何をする！　くそっ、やめろ！　放せ！　自由にしろ!!」

「抵抗するな！　おとなしく言うことを聞けッ!!」

洒落にならない、こんなの誘拐だ。何でこんな目に遭わなければならないんだ。恐怖心に煽られながら、無駄な抵抗だと分かっていて

も、言うことを聞くまいと必死になる。しかし次の瞬間、聞き覚えのある声が車の中から聞こえてきた。
「――放してやれ。彼女は元野球選手だ。大事な腕を故障されてはこっちの面目が立たん」
聞き覚えのある声を発した人物とは今日で二度目の顔合わせだった。
なぜ彼がここにいるのか分からないし、あの見えない瞳が何を考えているのかも分からない。ただようやく出来たプライベートに時間を邪魔しに来たということだけはハッキリと分かった。家に帰ってゆっくりしようと思っていた矢先に今会いたくない人物とこんな形で遭遇、柊にとってはいい迷惑だった。家まであとほんの数百メートル、たった数百メートルだったというのに、彼に会ったおかげで温かい湯船、食事、睡眠……今さっき考えていた事がどんどん遠ざかっていく。ただでさえ精神的に疲れているというのに、まだ今日はすり減らさなくてはいけないのか。用事があるのならもっとマシな方法があるだろうという気持ちを押さえながら柊は抵抗を止めると、念のために聞くことにした。――今日こっちのチームを散々痛めつけてくれた鬼道有人がまた何の用があるのかと。
「私にどんな用かな。帰りたいんだが……」
「そうはいかない。悪いが総帥がお前のことをお呼びだ。〝交渉〟をしたいと」
「……交渉？　私と何の交渉を？」
「それは今ここでは話せない。乗ってくれ、頼む」
今日の試合の時に見せた高圧的な態度ではなく、普通に誰とでも接するような大人しめの口ぶりに柊へと頼み込む鬼道。はて、彼はこんな人物だっただろうかと柊は違和感を覚えるが、返事を返す前に後ろの男達に後部座席に押し込められてしまう。痛いし苦しいし狭い。そしてむさくるしい。相変わらずこれでは誘拐だと、流石の柊も舌打ちをしながら怒りを露わにしようとするが、再び鬼道の謝罪で違和感を抱くと共に黙り込んでしまった。
黒の普通車にガチムチの黒服男三人、中学生の男一人、大学生の女

一人。ただ一人女である柊にとっては今すぐにでも息がつまって死んでしまいそうな空間だ。経験上むさくるしい空間には慣れているからいいものの、窮屈勘だけはどうも否めない。こんな姿で柊が非力な女性らしく大声でも上げれば、側から見れば通報待った無しだろう。まぁもっとも柊自身中性的な性格であるためか、そんなことは滅多な事でもない限り有りえないのだが。

「急にこんな事をして本当に申し訳ない。いや、すみませんでした不破さん」

「え？　あぁ……本当にいい迷惑だよ。……というか、君はそんな人だっただろうか？　もっとトゲトゲしているイメージがあったのだが……」

「あれは帝国学園キャプテンとしての鬼道有人であり、今目の前にいるのは一人の中学生としての鬼道有人です。サッカー部で活動している時とプライベートで使い訳なければ、流石に精神的に来るものがありますからね」

「へぇ～、君のような人でも精神的に来る、か。思いもしなかった」

「それはお互いさまでしょう。少なからず、あなたに今日〝機嫌取りを行う人間〟と言われた時や、総帥の言われるがままに〝雷門を痛めつけている間〟は良い気分はしなかった」

　予想だにしていなかった言葉が鬼道の口から出たものだから、思わず柊は目を見開いてしまう。試合の時は至って冷徹、戦う相手は完膚なきままに叩きのめす無慈悲な攻撃。フィールドであんな姿を見せてくれていた彼から、〝雷門にした行為を気にかけていた〟なんて言葉が出てきたのだ。驚かない方が逆におかしい。

「それで、その交渉の話っていうのは？」

「はい。俺も詳しく聞かされていないので分からないのですが、総帥はあなたの〝右眼を治す〟と言っています」

「――！　……右眼を治す……ね。じゃあ、それだけ私は君達に〝調べられてる〟ということか。どうりで最近ストーカーがいた訳だ」

「総帥はあなたの力を欲しがっています。もちろん、今日の試合で俺達もそう感じました。総帥の指示ではなく、俺達の本心から」

「……そう」
無関心そうな返事と共に会話はそこで途切れた。
柊は高級車に乗せられているのに気分が上がらなかった。それは今の鬼道が話したことでなのか、それともただ単に乗り心地が悪い下手クソな運転をされているせいなのか。窓の外さえ見られない車内で座席にもたれかかると、柊はつまらなそうな表情をするとともに腕を組んでゆっくりと目を閉じた。

11話：決意の日

7年ぶりに帝国学園に来た感想は、中身は大して変わっていないということだった。派手になっていたのは外観だけであり、最後に帝国と試合をした時と同じまま校舎内は残っていた。

柊にとって懐かしい記憶だった。練習試合としてこの帝国学園に赴(おもむ)いた際、メンバー全員が緊張し震え上がる。今思えば小心者の集まりだったと感じる思い出が昨日のことのように蘇ってきた。どんな形であれ、こうしてここへ来たということは、これも何かの運命なのかもしれない。そう感じた柊は影山が待つ場所へ着くまでの間、どうせ通る道だということもあり7年前に戦ったグラウンドを見てみることにした。確か野球グラウンドは一番奥にあるサッカーコートよりも手前にあったはずだ。

今は一体どうなっているのだろうか。そう思いながらグラウンドがかつて見えた場所まで来ると、残念ながらそこにはもう柊の記憶を思い出す光景は残ってはいなかった。

一面緑の人工芝、そして転がる無数のサッカーボール。茶色の土は消え、スコアボードも消失し、今やあのグラウンドはサッカー部の第2コートと化していた。

7年という歳月が流れたのだ。当然と言えば当然かもしれない。それに世間では、帝国学園野球部は7年前に一度敗退を期してから練習場所を移したとの情報もあった。――もうあの時の様子は残っていない。それを理解するのと一緒に、寂しさのような切なさを覚えると、柊は再びここへ連れてこられた目的を果たすため影山のいる場所へと歩き始めた。

◆◆◆

「――やぁ、待っていたぞ。掛けたまえ」

暗く、サッカー部の様子だけが映るモニターの部屋。ハッキリ言って人を招待するには最悪な部屋で彼は待っていた。柊が影山とこうして直接面を合わせるのは初めてだというのもあるが、相変わらず帝

国学園の総帥と呼ばれる人間は、異様な雰囲気を纏っていることを再認識させられる。
「さて、何が飲みたい？　紅茶か？　コーヒーか？　それともジュースか？　――おおっと失礼、そういえば君の好きな物は緑茶だったな。迂闊だった」
　優しくかけられる言葉に柊は黙り込みながら影山の姿を見つめる。どこまで自分のことを調べられているのかは分からないが、少なからず日常で自分が何を好んでいるかは筒抜けであるようだ。
　柊は先程鬼道と別れたばかりで今は影山と柊は二人きり。何をされるか分かったものではないし、逆にこっちから向こうの考えを読み取るなんて事も出来ない。だとしたら長居は無用だ。フカフカし過ぎで逆に気持ちが悪いソファに腰を掛けると、さっそく柊は本題に入ることにした。
「それで、私に交渉とは？」
「ふむ、まぁ焦るな。ほら、君の好きな緑茶だ」
　カタリと音を立てて茶の入った湯呑が目の前に置かれる。ふわりと漂う香りが柊の鼻腔をくすぐってくるが、今はそんなゆっくりと茶を飲む気分などではない。そもそもこんな場所で、雷門の選手に散々なことをさせた元凶と茶など飲んでいられるものか。
「話が無いのなら私は帰ります。正直私はあなたと話したくないし、顔も見たくない」
「ほう？　では聞くが、そのほぼ見えない〝右眼〟にも私が映っているのか？」
　座り心地の悪いソファから腰を上げようとした柊の動きが止まる。それを見て一瞬影山はニタリと笑ったかと思えば、ようやく柊が聞きたかった本題について話し始めた。
「7年前の桜城と帝国の試合。私も見てはいたが、ピッチャライナーが右の眼球に直撃したのはさぞかし辛かっただろう？　〝網膜剥離〟を起こした君の姿は見ているだけで実に痛々しかった」
　影山が自分自身の右眼を手で触れると、それにつられるように柊も右眼へと手が伸びる。かつて失明寸前まで陥り、今となっては碌に色

の判断さえできない左眼は瞼の上から触れば温かく、他社から見ても誰とも変わらない普通の瞳にしか見えない。
「……それが一体なんだと言うんですか？」
「まぁ、話は最後まで聞け。――私は、今日雷門と試合をしている最中、右眼の痛みを見せている君を見て思ったのだ。かつて『王の瞳』とまで呼ばれた選手が片目を失い、時折痛みを見せたりしながら、コンタクトレンズで無理やり視力を補っているのは見るに堪えないと」
　影山の言う言葉に柊はどう反応していいのか分からなかった。彼はなぜ赤の他人である自分のことをここまで気にかけるのか。そこまで彼にとって元野球選手だった自分のことが大事なのか。疑問が頭の中で募っていく間に影山は話を続ける。
「ポジションごとに存在する『王の部位』、『右翼・左翼・右脚・左脚・牙・爪・頭脳・指先・瞳』。私の友人である帝国野球部総帥、〝陽海無限〟は王の力が目覚めるのを恐れて、その部位を持つ選手を破壊しようとした。結局は『瞳』であった君を始めとして、ほとんどの部位を潰したものの、王は君臨。帝国学園（デビルズナイン）は桜城学園（ナインキングス）に敗れた」
　確かに桜城学園野球部はほんの短い期間〝９人の王様（ナインキングス）〟と呼ばれた時期があった。影山が言うように、ナインキングスと呼ばれた由来は、それぞれのポジションにいた９人の選手が、王の部位に比喩された総称で呼ばれていたからである。柊はその中で『瞳』の部分を担っていたことから『王の瞳』と呼ばれていたのだ。
「王の部位などと訳の分からない名前を付けてくれる人がいたおかげで、当時は恥ずかしかったものですけどね」
　７年前の当時、柊は動体視力・体の動きを捉えられるようにと、眼をひたすらに鍛えた時期があった。すると、いつの間にか誰も寄せ付けない程の洞察力を手にしており、そこから『王の瞳』と呼ばれるようになった。いわゆる『王の部位』に比喩したなんて言ってもそれは、誰にも劣らない長所を一つ得ただけに付けられた総称なのだ。９人の選手が一つずつ誰にも負けない長所を持っていれば、王の部位は９つ。９人で王様が出来上がり、よってナインキングスだ。思い出すだけでもっとマシな名前の付け方があっただろうとは柊は思う。とは

いえ、実際に中学野球の頂点に辿り着けたのは事実なのだから、キングであることは間違いはないのだが……。
「本題に入ろう、単刀直入に言う。君の眼を完治させる代わりに、我々帝国サッカー部が中学サッカーの頂点を極めるために協力者になってほしい。君の『王の瞳』は野球だけに使えるものではない。今日の試合を見て確信したのだ」
片眼しか残っていない自分の瞳がサッカーでも役に立つ？　一体何を根拠にそんなことを言っているのだと疑問を抱くと、柊に向けて〝その質問を待っていた〟と言わんばかりの表情で影山は話を続けた。
「私は今日鬼道を始めとして、雷門中のサッカー部員を〝二度と歩けなくなるまで〟完膚無きままに叩きのめせと指示した。だが、結果は我がサッカー部はそれが出来なかった」
「――ッ!?　今何と……!?」
少しずつ落ちていく声のトーンと、人間をまるで玩具のようにしか思っていないような会話の内容。まるで影山の発する声が、うなじから背筋にかけて冷たい触手となって這いずり回るような感覚に、柊は一気に鳥肌が立つと表情を青ざめさせた。沸き上がってくる恐怖感と嫌悪感が、まるで底なし沼となって深い闇へと引きずり込んでくる。
「帝国の選手が情をかけたという考えもあるが、いつも私の言うことは何でもこなしていた鬼道が今になって命令に背く筈は無い。なら思うようにいかなかった理由は簡単だ。――――不破柊、お前がその瞳をもってして、雷門を短期間で必要最低限のレベルまで鍛え上げたからだ!!」
影山はそう言って大きな声と共に満面の笑みをつくると、ソファに座っていた柊にぬっと近づいてきた。一歩、そしてまた一歩、その姿がどんどん大きくなってくるたびに柊の鼓動が危険信号を鳴らす。
――これはヤバい……!!
何が何でもこいつは自分を帝国に引き込むつもりだと悟った柊は、今すぐにでもこの部屋から逃げ出そうと腰をに力を入れた。――し

かし、
「――逃がさん。お前は私のものだ。その瞳も！　その長けた洞察力も!!　陽海無限（アイツ）のように壊すなど勿体ない。試合前に見せたあの小生意気な態度も、全部、全部、私が貪って帝国のものとしてやるッ!!!
それがお前にとっても一番の幸福だ、分かるだろう!?」
影山の手が柊の頬に触れたかと思えば、前髪をかき分けて視力の残っている左の瞳へと伸びてゆく。あまりにもおぞましい感覚に柊はその手を精一杯の力で払いのけると、目の前で自分に覆いかぶさってきそうだった影山を一気に押し返すように蹴り上げた。
「――ッ！　冗談じゃない、この変態野郎ッ!!　何が私にとっての幸福だ、気持ち悪い！　影山零治（お前）も陽海無限（あの男）と何も変わらないサイコ野郎だってことがよく分かったよ！　誰がお前のものになどなるか!!」
ドサッという音と共に背中から床へ倒れた影山。柊は恐怖心を抱きながらも彼に鋭い目つきを向ける。もし今抵抗せずに為すがままにされていたら、そう考えるだけで身の毛がよだつ。
「なかなか痛い真似をするではないか。もう一度よく考えてみろ、その不自由な片眼が元に戻るんだぞ？　私はお前を〝壊す〟のではなく〝救おう〟としているのだ。陽海無限と親友であった私の言葉なら君には分かるはずだ。そうだろう、不破柊。――いや、〝陽海柊璃（ひのうみしゅり）〟よ」
「――ッ！　嫌……やめろ……その名前で私を呼ぶな！」
――陽海柊璃。そう呼ばれた瞬間に柊は今一番思い出したくない人物が頭をよぎった。
柊の黒髪にも混じっている青紫色をモチーフにした華やかなスーツ。赤いスカーフを巻いた細身のシルエット。そして何かを壊す時に見せる満面な笑顔。脳裏を駆け巡るあの男を振り払おうと柊は頭を振る。
「事実ではないか。不破柊などと名前を変えて生きてはいるものの、お前は陽海無限の子。私と彼が理解し合えたのだから、彼の血を継ぐお前も私と理解し合えるはずだ。そうだろう？　柊璃!!」
「お前や、陽海無限（あの男）に柊璃などと呼ばれてたまるか！　理解し合える

なんてことは絶対にない。たとえ同じ血が流れていようと私の仲間の人生を殺したあの男を父親などと認めるものか！」
茶の入った湯呑を影山へと全力で投げつけると、未だ湯気の立っていた中身が影山の顔面に一気に降りかかった。それに加えて割れた破片が額を裂き、血を流させる。
「ぐおおぉぉ!!　貴様……理解し合えると思ってはいたのだがなッ！
――いいのだな？　貴様がそこまで言うならば後悔させてやる。雷門を潰し、最初から言うことを聞いてよかったのだと後になって喚かせてやるッ！」
唸り声を上げる影山を他所に柊は部屋のドアへと手を掛ける。
今逃げなければ大変な事になる。全くもって最悪な人間だコイツはと影山を睨み付けると、最後に部屋を出る前に柊はこう口にした。
「後悔はしない、お前が牙を向けてくるのならこっちも精一杯抗ってやる！　雷門は私が育てる、お前に壊させるものか!!」
ドアを蹴とばしてあの暗い部屋から飛び出すと、思うがままに外へと向かって柊は走り続けた。

全力疾走で数百メートルを走り続けたのは本当に久しぶりだった。あのまま影山のいた部屋を飛び出して外に飛び出したものの、帝国学園は思っていた以上に広かった。校外に出ようにもまだ道は長い。
息が切れて心臓が飛び出すくらいまで跳ね上がっているのに耐えていると、ふと出合い頭に柊はある人物とぶつかった。
「――す……すみません」
「あぁ大丈夫だ……ってアンタは……!!」
ぶつかった衝撃で尻餅をついた姿勢のまま顔を上げる。するとまたしても見覚えのある顔が映った。
右に付けた黒い眼帯に青い髪。これで会うのは鬼道と同じように三回目だろうか。柊の視線は今日戦った相手である佐久間次郎と重なった。
「総帥室にいるとは聞いていたが、何でこんなところに。それに尋常

じゃない顔色だぞ、何かあったのか？」
　ゼェゼェと呼吸が乱れて碌に会話も出来そうにない柊に佐久間は寄ると、あろうことか彼は柊の背中をさすり始めた。あの鬼道と共に全力で柊のチームを潰しにかかって来た佐久間がだ。
　とはいえ、佐久間が柊の様子を心配していたのは少なからず理由があった。実のところ佐久間も鬼道と同じ心境であったためだ。総帥の命令とはいえ雷門にした行為はあまり良いものではない、むしろサッカーどころか人間としてあのような事をして良かったのか。今日の試合を終えてからずっと彼もそう思っていた。
　今は帝国学園サッカー部の佐久間次郎ではなく、一人に中学生の佐久間次郎でいる時間。そんな時、鬼道から柊は総帥室にいるという話を聞き、時間があるならば一言そのことを詫びようと思って帝国学園内を歩いていたのだ。サッカー部の顔でいる時には簡単に口に出せない言葉を今言おうとして。そして、偶然にも目の前でフラフラの柊がぶつかってきた訳なのだから、まずは心配しない方がおかしい。
　疲労が回復すると言うよりも、人に会ったという安心感でようやく落ち着きを取り戻してきた柊は、佐久間に礼を述べると再び立ち上がった。
「あ、ありがとう。助かったよ、もういい……」
「そうか。いや、それよりも俺のことを憶えているか？」
「ん？　もちろん覚えているさ。タクシーで一回、試合で一回、ここで一回。計三回の顔合わせだね、佐久間次郎君」
「俺の名前を知っていたのか?!」
「そりゃそうさ。君達が私を調べてくれたように、こっちも君達を調べさせてもらったからね」
　帝国メンバーの顔は全部覚えて頭に入っている。静かなる狂犬と呼ばれる万丈一道、経歴一切不明な五条勝といったとんでもない異名揃いの、癖の強い選手たち。これほどの特徴的な選手が揃っていれば、帝国選手など柊にとっては覚えることなど造作も無かった。むしろ佐久間に至っては鬼道と同じ三回目の顔合わせなのだから比較的覚えやすい部類だった。

柊がお礼を述べて去っていこうとすると、「待ってくれ」と佐久間がそれを引き止める。まだ佐久間にとっては再会できたことはいいものの、伝えたかったことは言えていない。
「その、なんだ。今日の試合はすまなかった。雷門のメンバーにはやり過ぎたと思っている。言い訳かもしれないが総帥からの指示だったんだ」
横顔だけ自分へと向けていた柊に佐久間は一番伝えておきたかった言葉を述べる。すると、佐久間も予想していたように無音の時間がやって来た。
〝今さらなんだ。謝るくらいなら指示を無視してでも最初からこんな事をするな〟。そんな言葉が返ってくるかと覚悟していた。当然だ、そう言われても仕方がないことをしたのだから。だが、総帥からの命令は絶対だ。サッカーの頂点へ立つためには逆らうことは許されない。それが佐久間の今の心境だった。佐久間は何と言われてもいいように心の準備だけをしておくと、彼は次に柊が口にした言葉で驚くことになる。
「君も鬼道君と同じことを言うんだね。よかったよ、君達が本当のサッカーマシンじゃなくて。――佐久間君達にとって影山という男が絶対だということは今日よく分かった。君達も君たちなりであんなサッカーをする理由があるのだろう？」
「――！　あぁ……そうだ。影山総帥は俺達に最高の技術を与えてくれる、高みへと連れて行ってくれる。だから俺達は総帥の指示は裏切れない、何でもこなす。……しかし得られた力を総帥の言われるがままに、こんな使い方をしていて良いのか分からないんだ。なぁ、俺達のサッカーは間違っているんだろうか？」
佐久間は答えが見つけられないと、残った片眼を見せながら柊へと問いかける。その様子からは、おそらくチーム全員の言葉を代表としての質問と言ってもいいかもしれない。
「さぁ、それは分からないな。私、サッカーはそこまで経験豊富ではないからね。――でも、私だったらそうまでして上手くなろうとは思わないな。楽しくないし」

「……楽しく……ない？」
「うん、そういうことさ。試合の主役はあくまで君達だ、影山じゃない。それと、さっきあの影山（変態）と話をしてきたのだが、相当頭のネジが飛んでいたね。つい怖くなって逃げだしてきてしまったけど、〝君達よくあんなのと一緒にいられるな〟というのが私の意見だよ」
柊はクスクスと佐久間に向けて笑顔を見せると、「いけない、長話をしている場合じゃなかった」と言葉にして背を向けた。
「じゃあ私は行くよ。ここから外に出る近道を知らないかな？」
「え？　あぁ、中央通路に出てしまえば出口まで一直線だぞ」
「そうか、ありがとう。――――そうだ、君達が根っこから悪い人間じゃないと分かった事だから一つ言っておこうと思う」
後姿のまま横顔を佐久間に向けると、パチリと片眼を閉じる。
「――鬼道君にも伝えておいてよ。君達帝国学園の選手たちが本当の意味でサッカーをするようになった時、そんな日には『王の瞳』の力を貸してあげるとね」
佐久間は驚いて「それってつまり……!!」と口にするが、既にその時には言葉は届かなかった。あっというまに小さくなっていく柊の後ろ姿。やがて数秒もしないうちに佐久間の視界から彼女は消えていった。

12話：きっかけづくり

帝国学園との練習試合が幕を下ろし、早くも一日が過ぎ去ろうとしていた。

いつも以上に温かいと感じさせる太陽と、目の保養になりそうな青々とした植物群。甘い花の香りで夢の中へと吸い込まれていきそうになるバイトの時間を終え、今柊がいる場所は河川敷。そこで青い大空を見上げながら染岡と共に草の上で横になっていた。

「――ってな訳だ。どいつもこいつも、豪炎寺、豪炎寺ってばっかり言いやがって。雷門のストライカーは俺だっての！」

「確かにそう言われちゃショックだ。怒りたくなる気持ちも分かるよ」

「だろう!?　やっぱり分かってくれるのは円堂と不破ぐらいだ」

染岡がこうして柊に相談をしてきたのは、つい最近雷門中の練習試合が再び決まったことが始まりだった。相変わらず今回の練習試合も一週間後、負ければまた廃部という話だが、染岡が怒っている理由はそこではない。

今部員の中で飛び交っている話。――豪炎寺がいたから前回の帝国の試合は勝てた。でも今回の試合は豪炎寺はいない。豪炎寺がいなくて雷門が勝てるのか。豪炎寺を呼び戻すべきだろう。等々。今はそんなふうに一年生を中心とした豪炎寺修也という人物の話で持ちきりだそうだ。それで雷門のストライカーである染岡が「俺の力を信頼してくれないのかと」腹を立てて柊に相談してきたと。そんな経緯である。

考えてみればよくある話だった。ずば抜けて上手いプレイヤーがぽっと出て来て自分と比較される。技術が高ければ高いほどメンバーには支持され、下手をすれば今まで自分のいた居場所が奪われるなんて事にもなりうる。これは自分よりもアイツの方が頼りになるぜと言われているのと同じ事であり、実際に本人からしてみれば結構なダメージが入るのは言うまでもない。

このような事例はサッカーだけに言えることではなく、柊のいた野

球部にだって実際にあったことだ。かつてエースナンバーを付けていた柊も、自分よりも優れた投手が出て来て外野に飛ばされたという経験もある。柊すらもその時は流石に凹んでしまった。それくらいとってかわられるというのはスポーツ界ではよくある話だ。
「円堂は〝お前は染岡竜吾だ、豪炎寺になろうとするな〟と言ってくれたものの、結局今のところ俺は何も前に進めていねェ。円堂の言っている事は分かるんだ。俺は俺でありながら、豪炎寺と肩を並べられるくらいになりゃいい。だが、それだってのによ、どうもそのビジョンが見えないんだ。奴に負けない必殺技はどうやったら身に付けられるんだ……俺は奴のようにセンスが無いってことなのか……？」
染岡がどうしたらいいんだろうなと気疲れした様子で言葉を漏らした。
河川敷に来てから柊は染岡の練習している姿をずっと見ていた。点を取る主砲となろうと汗水流しながら何度も円堂相手にシュートを撃っていた姿を。だから染岡の言いたいことはよく分かった。
焦り、嫉妬、実力不足による自己嫌悪。それは言葉にせずとも彼の練習風景を見ていればよく分かる。おそらく染岡本人にとっては、色んな心情が体の中でグチャグチャに混ざり合い、今もミキサーのようにかき混ぜられている最中なのだろう。
珍しく染岡が漏らした弱音を柊は聞くと、何か思いついたように寝ていた体を起こす。そして染岡に向けて問いかけた。
「――染岡君は右利きだったね？」
「そうだが一体どうしたんだ？　――！　おい、不破！　どこへ行く!?」
「ちょっと待っててくれ。すぐに戻る」
何だアイツはと不思議そうな表情をしている染岡を他所に、柊はいつも寝ている河川敷の天然ベンチへと駆け寄った。そこであるものを手に取るといつものように「ふふん」と鼻を鳴らす。
「何を取りに行ってきたんだよ？」
「ふふっ、それはこれだ。何だか分かるかい？」
「おいおい、そりゃあ……」

困惑した表情で「何でこんなものを俺に渡してくるんだ」と言う染岡へと握らされたものは、一つの黄色いグローブ。一方で赤いグローブを片手にはめた柊はニコッと笑うと、続け様に片手に収まるくらいの軟式野球ボールを手の平上でポンポンと弄り始めた。
「染岡君、キャッチボールやろうよ」
「はぁ？　キャッチボールだぁ？　何でそんなことを今しなきゃいけねェんだよ！　俺はサッカーをやってんだぞ。そんなのが役に立つ訳――」
「――君の必殺技を完成させるのに役立つとも」
キッパリと断言する柊。対し拍子抜けした様子で「冗談だろう」と口にする染岡。第三者が見れば、普通に考えて染岡の反応は何一つ間違ってはいないと思うだろう。しかし発言した柊本人の表情を見れば、いつも練習に付き合っている時のものと変わっていない。至って真面目な様子だ。
ニッコリと染岡に向けて笑みを見せた柊はグラウンド内で実戦練習をしている円堂へと振り返り声を掛けた。
「円堂君！　染岡君を少し借りるよ！」
「――！　ああ、いいぜ！　必殺技の完成、楽しみにしているぞ染岡！」
円堂からの返事は即ＯＫ。満面の表情で染岡に向かって手が振られる。それを確認し、柊は染岡の手を取ると早速河川敷の野球コートへと移動した。
雑草が所々に生え渡り、あまり手入れのされていない足場。そしてサッカーコートとは少し違った土の固さ、ふみ心地。それを運動シューズで感じながら、柊は久しぶりに誰かとキャッチボールをする感覚に胸を躍らせる。
はてさて、では染岡君の必殺技を生み出すきっかけとなれるように頑張りますか。楽しそうな表情を見せながら髪をいつものように後ろで一つに束ねると、まずは一球。ほんの数メートルの距離から柊が染岡に向かって腕を振り上げた。
「いくぞ、染岡君」

ゆっくりとしたボールが染岡に目掛けて放たれる。山なりの弧を描いた軌道で一秒あるかないか滞空していたボールはやがて染岡の手元へ。直後にパシッ、という心地よい音が鳴れば、ボールはグローブの中へと飛び込んだ。
「おっ、ナイスキャッチ！　上手いじゃないか」
「こんな正面に球が来れば誰だって捕れるっての」
腕を振り上げて力一杯に一球、次は染岡が投げ返す。彼は男なだけあって柊よりも投げ返す力は強く、速い速度で柊へと向かって行く。そしてパシッではなく、パンッという強い音が鳴ると染岡の投げたボールは柊のグローブに収まった。
「ふふっ、ナイスボール。いい球投げるね。どうかなサッカーと一緒に野球も極めてみる？」
「馬鹿言うなっての。俺はサッカー一筋って決めてんだよ」
「ありゃ、フラれちゃったか。そりゃ残念」
グローブのボールが収まった時のビシッと来る快感がたまらない。球を受け止めた時の心地よい刺激と、投げ返した時の相手の胸元へ綺麗な線を描きながら収まっていく軌跡に、柊は楽しそうに笑う。一方で、本当にこんなのが役に立つのかと、いまいち不服そうなままの表情を見せる染岡。そんな二人がボールを投げ合い肩を温めること数分が経った。
「よし、じゃあ肩も体も温まって来たし、一回サッカーコートへ戻ろうか。あ、グローブはまだ外さないでくれ。ここからが君のメインとなる練習だから」
「何⁉　どういうことだ不破！」
訳が分からんと言う染岡を連れてサッカーコートに戻ると、円堂が使っている場所とは反対のサッカーゴールへと柊は向かう。もちろん手にグローブを付けながらサッカーグラウンドへ戻ってきたのだから、染岡だけではなく、円堂と一緒に練習をしていた雷門メンバーたちも不思議そうな視線を柊に向けてきた。
運動シューズでの地面のふみ心地が変わったことを確認し、続いて柊がとった行動は、円堂と同じようにＧＫとなってサッカーゴールの

前に立つことだった。ただし、ただ立つのではなく腕にはグローブを付けたままで、染岡にはボールとグローブを握らせている。あまりにも不思議な光景だったのか、柊との個別特訓を行っていた染岡に、気が付けば実戦練習をしていた雷門メンバーが寄って来ていた。
「観客が増えてしまったけど、まぁいいか。染岡君、確認するが君は雷門のストライカー、そうだね？　だったらいつもシュートする位置から私の後ろにあるゴールを奪ってみせてよ。――ただし、今君が手に持っている野球ボールでという条件付きで、ね」
　どこからでもどうぞとグローブを叩くと、腕を組みながらゴール前で柊は仁王立ちをして見せた。すると、その光景に雷門メンバーからは興味津々な視線が飛んできた。
「サッカーボールを蹴ってじゃなくて、野球ボールを投げてゴールを決めろってことか？」
「その通り。せっかく肩を温めたんだし、全力投球でも何でもいい。私の後ろにあるゴールネットを揺らせば特訓は終わり。その時には、君は必殺技を習得するために一歩前進しているだろう。私が保証するとも」
「おいおい、こんな近距離なら誰だって入れられるぜ。本当にこれが役に立つ特訓なのか!?」
「とりあえず投げてみるといいさ。口で言うよりも実際にやってみた方が早い」
　鋭い染岡の目つきがギラリと光ると、第一球が彼の指先からリリースされる。放たれたボールが速度をつけて向かう先は染岡から見てゴールの左側。柊から見てグローブを手にはめていない右側だ。
「よしいいところに行った、これなら簡単に入るぜ」と染岡が笑みをつくり、投げられた球を見ていた雷門メンバーも同じことを思う。だが次の瞬間、直後に皮革へ物体が接触した心地よい音が鳴り響いた。
　余裕そうな表情に、赤いグローブに収まっている白いボール。柊は簡単だと言わんばかりに、腕を伸ばしながらボールを受け止めていた。
「――何！　本当にキャッチしたのか?!　俺が言うのもなんだが速度

はかなりあったはずだぞ！」
「甘いな染岡君。この程度では後ろのゴールネットは揺らせないな」
凄く楽しげな表情を見せながら柊が染岡に向かってボールを投げ返す。染岡は再びボールを手に取るとそれを凝視し、再び強い力を込める。
今度はもっと速度を付けて一番ボールを取るのが難しそうな左上目掛けてボールを投げた。柊の身長から言えば反応できても捕ることは絶対に難しそうな位置だ。だが、それだというのにまたもや染岡は驚いた。ゴールポストの天井に片手で捕まり、己の体重を支えながら柊はボールを捕らえていたのだ。
上が駄目なら限りなく低い位置へ。しかし、今度は足から滑り込むような姿勢でいとも簡単に捕球される。ならば次はいっそのこと柊が動くことを前提に全力投球で正面へ。それでも、まるでどこに投げるかなんて最初から分かっていたかのように一歩も動くことなく再度ボールは柊のグローブによって静止させられた。
「すっげぇ！　あの柊さんの動き俺にも真似出来ないかな!?」
「いやキャプテン、真似しようとしても簡単には無理ッスよ！　だって柊さん、染岡さんがボール投げる前に動いているんスよ。まるで未来予知でもして動きを先読みしてるみたいッス！」
「本当に運動神経いいでやんすね。何であれでサッカーだけが音痴なのか謎すぎるでやんすよ」
柊と染岡の特訓を円堂達が見守っている中、いよいよ染岡の投げたボールは三十球を迎えた。されど、その三十球目も皮革の音が響くだけでネットを揺らさずに終わった。
「……ハァ……ハァ……全然ゴールにボールが届かねェ……。なるほどな、少しずつ特訓の意図が読めてきたぞ。最初は馬鹿にしていたが、確かにいい特訓かもしれないな」
「〝小さなボールをゴールに入れられない人間が、大きなボールをゴールに入れられるのか〟。どうやら特訓の意味を一つ理解してくれたようだね。ならば必殺技を身に付けるきっかけを得るのはそう遠くないはずだ」

ボールを指で握ると染岡へと投げ返す前に柊はアドバイスをここで口にする。
「ゴールを揺らすヒントをあげよう。〝君の球速はせいぜい１００ｋｍ／ｈ〟出ているか程度でしかない。私から見ればスローボールでしかないし、投げる前の動作で大体どこにボールが来るかなんてすぐに分かる」
「なに!?　だったらこんなの無理じゃねぇか！」
「と、思うだろう？　ところがどっこい、君の長所は何だ。その強いパワーじゃないのか？　言っておくが私は女だ、普通に男の人に力では敵わない」
柊は筋力や運動能力はそこらにいる一般の女性に比べて遥かに高いといえど、やっぱり男の力には敵わない。オマケに身長すらも低いのだ。男を圧倒するような女性も世にいるが柊がそれに該当することはまずないだろう。
「どうすれば強い力が出せる？　どんなふうに体を使えばいい？　どうすれば自分で今最高のパフォーマンスを発揮できる？」
「――！　まさか、そういうことか……!?」
「ふふっ、何か掴めたようだね。じゃあ大サービスの最後のヒント、ボールを使う競技って体の動き次第で面白いことが起こるって知ってたかい？」
その言葉の後、またいつも通り染岡に向けて柊はボールを投げ返す。フワリと浮いたボールが弧を描き、それをさっきと同じように染岡はキャッチしようとすると、先程までとは違った凄まじい衝撃が染岡のグローブに走った。言うなれば、今までの『パシッ！』や『パンッ！』などのキャッチ音ではなく『バシィッ!!』という今日一番の大きなキャッチ音。その衝撃を言葉で例えるならば、まるでキャッチしたボールが爆弾となって爆発するかのようなものだった。
染岡は痛みでグローブを振るが、顔を上げた際に視界に映る柊の表情と手に残ったこの感覚から、再び彼の眼は本気そのものへと変わる。
――そうだ、俺は染岡竜吾だ。世界にたった一人しか存在しない染

岡竜吾だ。円堂が言ってくれたように俺は俺のやり方で前へ進むんだ!!　どうせもう息が上がって肩にも力が入らねぇ、だったらこの最後の１球俺の魂をぶつけて必殺技の糧にしてやる!!!

染岡は少し下がった位置に立つと、そこからゆっくりと走り出した。そうだ、これは染岡自身ドリブルでゴール前まで上がって来てシュートを撃つという想定と重ねたものである。となれば、ドリブルで上がってくる分は助走となり力へと換算される。実にスポーツの理にかなった動きだ。しかし、それだけでは終わらないのが染岡だ。染岡は今ボールをキャッチした時に気が付いたのだ。柊はあんなスローボールでも凄い威力を出した時、体を大きく使って上半身と下半身の動きを連動させて投げていたことに。

これを意識して染岡がボールを投げた時、この場に集まっていた雷門イレブンは次の瞬間大きく目を見開くことになった。もちろん柊も含めて。

――染岡の投げた球はおそらく球速は１１０ｋｍ／ｈいやそれ以上は出ていたかもしれない。今日一番のボールは真っ直ぐと柊の真上を目掛けてゴールに向かった。当然柊が反応できない訳も無く、いとも簡単にグローブで捕らえる。ここまではさっきと変わらなかった。しかし明らかに違ったのは、収まったボールが急激に回転数を増して柊のグローブを弾き飛ばしてゴールネットへと突き刺さったのだ。まるで竜がとぐろを巻いて回転するかのように威力を増して。

「――あはっ♡」

その瞬間まるで体に快感が走ったかのように恍惚に満ちた表情を見せながら柊は笑った。

「――は、入った⁉　ッッしゃあぁぁ!!　すげぇ、何だ今の感覚⁉」

一人でガッツポーズを上げる染岡に近づくと、柊は彼の胸をグローブでポンと叩いた。

「凄いね……想像以上でびっくりした。どうかな、何かきっかけを掴めたんじゃないのか？」

「ああ!!　今分かった！　俺に足りなかったものは体を満足に使えていなかったのと、上半身と下半身の連動が全くなっていなかったこと

だったんだ！」
「ふふふっ、大正解。サッカーでは上半身の捻りが大事なスポーツ、特に重いシュートを打つストライカーには超重要だ。もうここまでわかったのなら、染岡君はすぐに必殺技を撃てるようになると思うよ。――さぁ今度は君が使うのは野球ボールではなくサッカーボールだ。円堂君が待ってるよ」
「ああ！　最初は馬鹿にして悪かった。本当に不破が指導してくれたことは無駄じゃない、必殺技を習得して一番に見せてやるよ!!」
「それは楽しみだ。期待しているよ、雷門のスーパースター」
染岡は柊の言葉を聞くと、ここで初めて視線を合わせて笑顔を作りながら頷いた。それはどこか迷いのようなものが吹っ切れていたような眼をしており、自信に溢れていたことは言うまでもない。
特訓を見ていた円堂の手を染岡が引っ張っていくと、再び雷門イレブンは今度は染岡を中心に一丸となって実戦練習に励みだした。

13話：葛藤を超えて

染岡の必殺技取得特訓に付き合い、あれから数十分後。喉が渇いたという雷門メンバーの声を聞いて、柊はコンビニへと飲み物の買い出しに行っていた。

最近では、すっかり春が開け、夏の兆しが見れるようになってきており、運動をしていれば汗で服が張り付いてくる。ポカポカ陽気とは言い難い今、万が一熱中症にでもかかれば、それは発展途上の雷門にとって大きなダメージになりうるだろう。予測して避けられる危機ならば事前に対応しておかなくてはいけない。特に染岡の必殺技完成まではあとほんの一歩なのだ。

是非ともこんなところで雷門メンバーにダウンしてもらわぬよう、買い物袋一杯につまったスポーツ飲料をぶら下げて歩いていると、ちょうど後ろから来た一台の黒の高級車が柊の横で停止した。

黒い車といえば柊にとって最近ではいい思い出が無かった。帝国学園の関係者に誘拐に似たやり方で黒の高級車に詰め込まれた出来事は数日たった今でも昨日の事のように覚えている。それゆえに、目の前にそんな高級車が止まれば自然と体を身構えてしまった。

「初めまして。貴女が不破柊さんですね」

「そうですが、どちら様でしょうか？」

赤茶髪の長い髪をした女の子、一言でいうならばいかにもお嬢様らしい子が窓から顔を出して話しかけてきた。

車内に見える彼女が身に付けているのは雷門中の制服。帝国学園のような真っ黒なものではない事から、とりあえずは変な相手では無いと柊は警戒を解く。

「雷門中学理事長、雷門総一郎の娘の雷門夏未です。サッカー部のことで指導者である貴方に一言伝えておきたいことがあって来ました」

「――！　り、り、理事長の娘さん!?　私のことをご存じだったのですか!?」

「何を驚いているんですか？　サッカー部の指導者という話なら帝国と戦う以前から知っています。円堂君があれだけ日中騒いでいれば

嫌でも耳に入ってきますよ」
　確かに一応、冬海卓という教員と会っている以上は彼を通して学校の上の人達に名前を覚えられていてもおかしくはない。円堂がサッカー魂を炸裂させて騒いでいるというのならば尚更だ。しかし、まさか雷門中には数える程しか行っていないというのに、一度も顔を合わせていない人に自分の顔を当てられるとは柊は思ってもいなかったのだ。
　夏未は柊に真剣な瞳を送ると、続け様にこう口にした。
「お願いと言っても頼むのは一つだけです。――豪炎寺修也。彼にサッカー選手として進む道を教えてあげてください」
「……？　豪炎寺修也……帝国から一点をもぎ取った彼をですか？」
　柊は腑に落ちないとばかりに彼女へと聞き返した。確か豪炎寺はもうサッカーをやらないと口にしていたのだ。帝国戦で活躍した際にも「もうこれっきりだ」と口にしてユニフォームを脱いでいったのをハッキリと覚えている。才能があり、雷門メンバーも彼を必要としているのはよく分かる。しかし、本人がやらないと言っているのに無理やりさせるというのは如何ほどか。円堂だってそう考えて勧誘したい気持ちを自重しているのに、今更自分が出て行った所で何になると柊は思った。
「不破さん、貴女だから伝えておきましょう。彼がサッカーを辞めた理由を」
「豪炎寺君がサッカーを辞めた理由？」
　夏未は口にした。
　豪炎寺修也の輝かしいサッカー人生の凍結。その理由は約一年前に、木戸川清修中と帝国学園の試合が行われた日から始まったのだと。
　豪炎寺修也の妹、豪炎寺夕香。兄のサッカーをする姿を追いかけていた彼女は、兄が出場する帝国との試合当日に交通事故に遭った。不幸中の幸いによって、一命はとりとめたものの、彼女は今もなお昏睡状態。稲妻総合病院に入院したまま、もう一年も目を開けてはいないという。この悲劇によって豪炎寺修也の日常はガラリと変化した。

自分がサッカーさえやっていなければ妹はこんな目には合わなかった。全ては自分の責任だ、だからサッカーはもうできない……と。それっきり豪炎寺はサッカーをやらなくなった。妹へしたことを償うために。

話を聞いた柊は、ここでようやく豪炎寺が病院に通っている理由を知ることとなった。

「なるほど、彼にはそんな過去があったんですね」

「ええ、だから貴女にお願いします。貴女なら彼の気持ちを唯一理解できる人間ですから」

理解できる人間ですから。その言葉を聞いて「ムムッ？」と柊は唸り声を上げる。

「なぜ私が彼を理解できると？　私は彼のように親族が事故に遭ったことなんてありませんよ」

「ええ、それは存じています。ですが貴女のご友人の中には、彼と同じ境遇に陥った人物がいたでしょう？　多分自分でも今、豪炎寺君がその人と重なっているのではないでしょうか」

夏未の言葉に対し、一体そんな情報をどこから掘り出してきたのかと呆れた表情を向ける。帝国学園といい、雷門中の生徒といい、なぜこうも自分のことに詳しいのだろうか。

「……なるほど。私のことも調べられている訳ですか。……どうも最近過去を掘り返してくる人間が周りに多い。まぁ別にやるなとは言いませんが、プライベートに関してはわきまえてくださいよ？」

「申し訳ありません。豪炎寺君のことを調べるついでに不破さんのことも調べさせてもらったのですが、お気に触ったようなら謝ります」

頭を下げてくる夏未に対して柊は腰に手を当てながら困った表情で見つめ返す。そして一つ「ふぅ」と息を吐くと、夏未の顔を上げさせてどうしても確認しておかなくてはいけないことを問い出した。

「豪炎寺君はサッカーをやりたいという気持ちは残っているんですね？」

「はい、少なからず私にはそう見えています」

夏未の即答が耳へ届くと、柊は吹っ切れたように鼻で笑った。
「――分かりました。彼がサッカーをしたいというならば背中を押してあげましょう。妹さんの言葉を代弁できるかは分かりませんけどね」

◆　◆　◆

豪炎寺修也は河川敷で練習に励むサッカー部を眺めながら悩んでいた。
――サッカーを辞めることが妹さんへの償いになるとでも？　勘違いも甚だしいわね。アナタに一番サッカーをしてほしい人は誰なの？
つい先程すれ違った雷門夏未という女。その彼女が口にした言葉が頭の中で何度もリピートされ、その度に豪炎寺は葛藤していた。
彼女の言う通り俺はサッカーをやっていてもいいのだろうか。夕香はそれを望んでいるのだろうか。妹は悲惨な目に遭って今もなお暗闇を彷徨っているというのに、その間兄である俺が一人でサッカーを楽しんでいる。そんな光景を夕香はどう見る？　分からない。受け入れて理解してくれるのだろうか。償いになるのだろうか。
夏未の言葉を聞いてサッカーと向き合う事は出来たものの、あと一歩を踏み出すことが豪炎寺は出来ないでいた。
「――そんな険しい顔をしていると男前が台無しだ。彼女にでもフラれたかい？」
「――！　お前は！」
一言「やぁ、また会ったね少年」という声が耳に入ると同時に、見覚えのある顔が豪炎寺の視界に映った。もうこれで話すのは４回目となる柊に対し、豪炎寺は冷めた目を向けると、彼女はビニール袋一杯のスポーツドリンクを置いて横へと寄って来た。
よほど自分が険しい顔をしていたのか。心配そうにスポーツドリンクを一つ渡してくるが、生憎今はそんなものを飲む気にはなれず断ってしまう。それっきり彼女は隣で橋の手すりに体を預けると黙

り込んでしまった。
　若干気まずい時間が流れていく。こういう時は何か話すべきなのだろうか。それとも黙って離れるべきなのだろうか。そう考えている内に、なぜこの女はここに来たんだと疑問が沸いてきた。
　豪炎寺はだんだんと頭が痛くなってくる。ただでさえ今悩んでいたところだと言うのに、この女がここに来た途端に何を考えているか分からないものだから、どうすればいいものなのか分からない。
　困った表情でいる豪炎寺だったが、最初に口を開いたのは柊だった。
「私が以前病院でした話を憶えているかな？　私の友人の妹が交通事故に遭ったという話なんだけども」
　咄嗟に振られた話の内容に豪炎寺は顔を向けた。その反応に対して肯定してくれたのだと受け取ると柊は話を続ける。
「君の前で悪いけれども、そのことで少し独り言を吐きたくなった」
　聞きたければ聞け。興味が無ければ聞き流せ。そう彼女から視線が送られる。すると豪炎寺は彼女が見せる姿勢に対して、自分も向き合い話を聞くという答えを取った。
　これから柊が溢すであろう独り言は、以前病院でした時にはぐらかされて聞きそびれた内容だろう。もしかすると、これから彼女が話すこと次第で自分が今どういう行動をとるのが正解なのか、それが分かるかもしれない。そんな期待が豪炎寺にはあった。
「私の友達は妹が大事故に遭ってからはまるで死人のようだった。同じ野球をしていても彼だけは本当に生きているのかいないのか分からないほどに生気が無かった。怪我はしても痛くないとも言うし、喜ぶという感情すらも忘れていたのだったかな」
　豪炎寺の目には「あぁ、なんて自分らしくないことを話しているんだ」という柊の表情が映った。まるで掘り返したくも無い思い出を嫌引っ張り出すような感じ。少なからず積極的には口を開きたくはないというのはすぐに分かる程だった。だが、それでも彼女は独り言という名の昔話を続ける。
「俺の責任で妹が。俺が野球なんてしていなければ。――何度その言

葉を兄は繰り返していただろうか。死の淵を彷徨っている妹にその声が届いているとも知らずに」
本当に馬鹿みたいな奴だった。兄が情けなくてどうするんだと言いたいくらいに。柊がそう続けて喋ると一度だけ目を合わせてきたような気がした。
「妹が描いた一枚の絵。そういえば、あれが見つかったのが運命の分かれ道だった。――確か絵のタイトルは『野球をしている兄貴はアタシのヒーローだ』だったかな」
今の言葉に豪炎寺はふと夕香が笑う姿を思い出した。
――お兄ちゃん頑張ってね！　凄いシュートを打って活躍するところを見せなきゃダメだよ!!
試合日に駆けつけてくれる妹の姿。それはいつも無邪気に笑っており、負ければ同じように悔しがり、点を入れて勝利した時には誰よりも喜んでくれていた。たとえ選手じゃなくても、妹はもはや大きな後ろ盾として存在し、いつも一緒に戦ってくれていた。
豪炎寺は今感じた。自分がサッカーを辞めると言った事は、むしろ妹の気持ちを踏みにじっていることだ。サッカーをしないことは償いでも何でもない。むしろサッカーをしていることが、今も闇の中で戦っている妹に対しての最大の報いだと。
「――ねぇ、豪炎寺君。妹さんの気持ちは君が一番よく知っている。だから、君が本当に後悔しない選択をして。私から言えることはそれだけだよ」
柊がようやくここで豪炎寺に対して振り返ると、優しすぎるとも言っていい口調でそう述べた。
するとその姿に豪炎寺は自然と口から言葉が出てきた。それは数日前にした時にはぐらかされた質問。今なら彼女は答えてくれるのではないか。
「――その兄妹はどうなったんだ？」
『それ以上は話したくはない。私にも感情があるからね』前回はそう言われて結局分からずじまいだった質問だ。おそらくは彼女にとっては、今までの話している雰囲気からも穿り返したくはない記憶

なのだろう。もしかすると彼女の話す昔話の結末は、その一枚の絵を最期に、兄と妹はもう二度と会えることのない最悪なものであるとも考えられる。だが、それでも豪炎寺は今ここで聞いておかなくてはいけないものだと判断した。先程彼女が言ってきた後悔をしない選択をするために。

柊は小さく笑った。そして再び豪炎寺を見つめる。

「事故に遭った妹さんは目を覚まして今は2人で暮らしているよ」

ふと発せられた言葉に、豪炎寺は胸の内で引っ掛かっていたものが取れて消えたように感じた。予想していた最悪な展開では無かったのだ。良かったと思うと、ようやくここで自分の中で決心がつく。

――俺はやはりサッカーをやるべきだ。

そう思いながら胸の内が晴れた様子で柊を見ると、彼女は豪炎寺の決心に気付いたのか満面の笑みを見せる。でもその直後に顔を背けて溜息を吐いたかと思えば、今度はしかめっ面に表情が変わり始めた。

「もう話しちゃったからこの際言うけど、兄の方なんて妹が目を覚ました途端に、更に野球が上手くなって私を追い越していった。おかげでポジションを奪われるは、打順はガラリと変わるは、本当に頭に来たよ」

「――！　じゃあ感情があるから話したくないというものは……」

「ああ、それはもちろん私が思い出すたびに今話した友達に嫉妬してしまうからだよ。だから話したくなかったんだ。――まったく本当にいい教科書だったさ。事故以来立ち止まってたかと思いきや、一枚の絵を見つけた途端にこれだけ伸びるんだから何があるのか分からないね」

あぁ、ヤダ、ヤダ。そんな表情をしながら肩をすぼめると、今度は豪炎寺のもとへ寄って先程断られたスポーツドリンクを握らせてきた。

ヒンヤリしていて気持ちがいい。そんな快感が浸っているといつの間にか柊は袋を片手に背を向けて歩き出していた。一瞬彼女が振り返ったかと思えばウインクを一回。そんな仕草をしてくる彼女を

止まって見ていると、同時にペットボトルにサインペンで書かれた文字が目に入る。
『Ｗｅｌｃｏｍｅ　ｔｏ　ｔｈｅ　Ｒａｉｍｏｎ　Ｓｏｃｃｅｒ　Ｃｌｕｂ!!』
筆記体で小奇麗に書かれた字。それを見た豪炎寺は口角を上げてフッと笑った。

◆　◆　◆

「――帰って来たか不破！　ちょっと見ていてほしいんだ。何だか俺の必殺技が完成しそうなんだ！」
「それは楽しみだ。でも染岡君、夢中になるのは構わないが水分補給も忘れては駄目だぞ。――他の皆もね」
手にぶら下げてきたスポーツドリンクを皆に見せると、水中に投げ込まれた餌を食べに来る鯉のように全員が駆け寄ってきた。どうやら予想していた通り、休憩なしで続けて練習をしていたようだ。
休憩を一度挟み、いち早く水分補給を終えた染岡はサッカーボールを手に円堂と共にゴール前へと向かう。その様子に、他の皆以上に二人はどこか気合が入っている。もう必殺技の完成は目と鼻の先なのだろう。二人に触発されるように柊も歓声を見届けようとついて行くと、数分後に実戦練習が行われた。
「来い染岡！　今のお前の全力シュートを打ってみろ！」
円堂が染岡に喝を入れると染岡が吠える。
明らかに今までのシュート態勢の時とは雰囲気が違い、何か大きなエネルギーが高まっていく。
「これが俺の必殺シュートだ!!」
エネルギーが一気に解放されると、直後に視界に映ったのはドラゴンだった。それも獰猛で、ゴールネットを揺らす姿はまさに獲物を狩る青竜。ファイアトルネードが無双の槍というならば、彼の必殺技は岩をも砕くライフルと表現するべきだろう。一目見ても分かる程に強烈な必殺技が今誕生した。
「や、やった！　うおおおおぉぉぉぉぁぁ!!!　完成したぞ！　これが俺

の必殺技だ!!」
天高くに拳を上げてガッツポーズを染岡がとると、それに感銘を受けた雷門イレブンが集まっていく。円堂をはじめとして皆に飲まれていく染岡の表情にはもう不安の色はない。これでしばらく彼は大丈夫だろう。
柊は腕を組みながら口角を上げていると、その姿に気が付いた染岡は照れくさそうに親指を立てる。
「壁を乗り越えた時の喜びか。青春とはいいものだな」
染岡のグッドサインに対してピースサインを笑顔付きで送り返すと、珍しく染岡は赤面を見せてきた。貴重な光景に思わず写真でも撮っておきたいところだがスマホの充電がほぼ無いというのが実に惜しい。
ハイテンションになったメンバーは必殺技に名前を付けようと騒ぎ始めたのはそのすぐ後だ。中学生らしい、なんちゃらクラッシュだの、なんちゃらアタックだの色々な案が出る中、つけられた必殺技名は〝ドラゴンクラッシュ〟。染岡らしい必殺技名の雷門の武器が一つ完成した瞬間だった。
――そして朗報はこれでまだ終わらない。
河川敷にやって来た一つの影。決心ができた彼も先程見せていた曇った表情ではなく、サッカーをやりたいという表情で歩み寄ってくる。
「――豪炎寺!」
円堂の声につられて、彼の存在に気付いた部員たちが彼の名前を呼ぶ。
豪炎寺は閉じていた目をゆっくりと開けると、その純粋な瞳で円堂、いやその場にいる全員に告げる。
「――俺、やるよ。サッカー」
その一言でその場にいる染岡と柊を除いたメンバーが再び再点火したように騒ぎ出した。まるでパズルのピースが一つはまり、その度に喜ぶ子供達とでも例えるべきか。でもそれは決して馬鹿に出来ないものであり、雷門イレブンにとっては高みへ進むための大きな一歩

になる瞬間であった。

１４話：ｖｓ尾刈斗中　前半戦

染岡の必殺技の完成に加え豪炎寺の正式入部から一週間。早くも廃部を後ろに控えた練習試合がやって来た。

今回の試合相手は摩訶不思議な雰囲気を漂わせている尾刈斗中学校。何やら在り得もしない異常現象が試合中に起きると噂されている不気味でもある学校だ。おまけに天候も曇り空であることからか、異様な気味悪さが増してきている気さえしている。

「尾刈斗中監督の地木流灰人です。今日は宜しくお願いします」

顧問の冬海先生が向こうの監督と握手を交わすを様子をベンチの隅で眺めていると、試合開始前だというのに何かが引っかかった。それが何かといえば柊は向こうの地木流監督とはどこかで見覚えがあるような気がしたのだ。はて、彼は一体誰だっただろうか。知り合いに似た人がいたような気がするという点までは思い出せたものの、そこから先がはっきりとは思い出せず、スッキリしない感覚が胸を不快にさせる。

「おや、君が豪炎寺君ですね。帝国戦でのシュートは見せてもらいました！　いやはや実に素晴らしかった。今回はお手柔らかにお願いしますね」

媚びを売るかのような物腰で地木流は豪炎寺に接する。まるで豪炎寺にしか興味ないという口ぶりに当然染岡が黙っていられる訳も無く、「アンタ達の相手は豪炎寺じゃない、俺たち全員だ！」と口にするが、向こうがとった態度は嗤笑。彼が直後に述べた言葉は「豪炎寺君と戦ってみたいから練習試合を申し込んだのですよ。弱小の雷門中学になど興味もありません」という明らかに小馬鹿にしたものだった。

逆上する染岡を円堂が抑えている様子を見ながら柊は思った。未だ雷門は舐められてばかりのチームであり、これは〝実に都合がいい〟と。

集合がかかり試合開始数十分前、ベンチにて全員が気を引き締めていると先程向こうの監督に言われたことが気に障っていたのか雷門

メンバー全員はピリピリしていた。一触即発とまではいかないだろうが、無駄に力が入っている事は見ればすぐに分かる程だ。
「クソが！　向こうの連中め、ムカつくぜ。何が雷門に興味が無いだ。ふざけやがって！」
「落ち着けって染岡！　ここで怒ってても始まらないだろう？　プレーで見せてやろうぜ！」
一番気が立っている染岡を円堂が抑え込む。やはり彼だけは誰よりもプライドが高く、おそらく今ここにいるメンバーではきっと精神的に不安定な状態といったところだろうか。別にカチンとくることは構わないのだが、中学生といえば精神面は完全に未熟。このままではプレーに支障が出ることもあり得るというのが心配だ。
そこで柊はどう落ち着かせるべきかと考えると、全員一つ吉報を口にすることにした。
「随分みんな気を立たせて張り切っているね。実に良いことだが、もう少し力を抜きなよ。どうせ〝この試合勝てるから〟さ」
試合を始める前から分かりきったような表情でベンチで足を組む。選手がピリピリしている中でそんな余裕を柊が見せているものだから、さすがの円堂も詰め寄ってきた。どうしてそんなことが分かるんだ、まだ試合は始まっていないぞと聞いてくるが、まるで未来予知でもしているかのように柊は口角を上げる。
「だって見てみなさいな、あの向こう選手たちの余裕の態度。舐めて掛かってくる相手ほど簡単に点を取りやすいチームはない。前に帝国学園から一点をもぎ取った時を思い出してみなよ」
今柊が言った言葉に選手全員がふと帝国戦を思い出す。ズタボロにされながらいったい点をどうやって取ったか。それは豪炎寺というストライカーが助けてくれたのもあるが、慢心している帝国の虚を突いて点を取ったというのが正しい。
「予測してあげるさ。前半は豪炎寺君か染岡君のシュートで先制。そこから相手のスイッチが切り替わり始めて、ようやく勝負が始まる。見たところ運動能力に差はない、だから君達のプレーをしっかりできればまず負けることはない」

あとは頑張ってねと告げた柊は、そのまま秋と春奈のもとへ寄って女子同士でサッカーの話をやり始めた。相変わらずいつもの柊の落ち着きぶりを見て、そこで染岡の逆立っていた気はようやく落ち着きを見せた。

「フン、確かにその通りかもな。少し頭が冷えたぜ」

染岡は冬海よりも顧問らしいことをしている柊に対して信頼を置いていた。必殺技の完成させるきっかけを作ってくれたり、的確な事をハッキリ言ってくれたり、そのような日々の行いから彼女の言葉は染岡にはよく通る。だから直ぐに彼は今の自分が冷静さが周りに比べ欠けていることを自覚した。もし今ここで同じことを言ったのが別の人だったらこうはいかなかったかもしれない。

――試合開始のホイッスルが鳴り、前半の開始。

最初にシュートを放ったのは尾刈斗側だった。

紫の火の玉が分身して襲いかかってくるような『ファントムシュート』。それが円堂を打ちのめしてゴールネットに突き刺さろうと牙を向けるが、神の手を持つ円堂もまた黙ってそんなことを許すわけがない。尾刈斗の必殺シュートは『ゴッドハンド』と衝突するが、次第に手中にて威力を失い静止する。セーブ成功だ。

両手で指を差しながら「いいねソレ！」と柊は円堂を誉め称える。いくら優秀なシュートといえど、帝国の放ったシュートに比べれば大したことはない。凌いだ後はこっちの攻撃だ。

円堂から風丸、風丸から少林寺の順でボールが渡り、そして少林寺がパスしたボールは染岡へとつながる。

必殺技の構えから続けて現れたのは青きドラゴン。ひたすらに練習して身に付けた『ドラゴンクラッシュ』はそう簡単には止められるような技ではない。相手のゴールキーパーは成す術も無く点を許し、柊が予想していたように最初の先制点が雷門へと入った。

『ドラゴンクラッシュ炸裂ぅ！　染岡のシュートによって先制点を奪ったのは雷門中だァー!!』

「ッしゃあぁぁぁ!!　どうだ、見たか!!」

実況の角馬が熱く盛り上がる中でガッツポーズをする染岡。それを見て尾刈斗中監督の地木流が「何ですって!?」とうろたえる表情を見せる。先制点を入れた染岡をベンチで褒め称えながらその様子を見れば実に面白い。こういうのがあるからいいのだ。舐められるのは相手から点を取りやすいというメリットも生まれ、自分より下と思っている連中からは様々な反応が見られる。本当にゲームが進めやすくて有り難いというのが柊の感想だ。

それから再び染岡にボールが渡れば、またもや『ドラゴンクラッシュ』によって追加点が入った。これで2対0、試合の運び出しはとてもいい。――だが、問題はここからだ。

「まさか豪炎寺君以外にこんなストライカーがいたとは驚きましたよ、雷門中のみなさん……。――雑魚が調子に乗ってんじゃねえぞ！テメエら、そいつらに地獄を見せてやれ!!」

監督である地木流の口調が一気に変わったかと思えば、キャプテンの幽谷を始めとした選手たちの雰囲気もガラリと変わる。不気味に口元を歪めているのを確認できたかと思えば、今度は柊達とは隣側にいるベンチから呪文のような言葉が聞こえてきた。

「マレ、マレ、マレトマレ……、マレ、マレ、マレトマレ」

ぶつぶつと口ずさむ地木流を見て、ここでハッと柊は先程から胸に引っかかっていたことが何なのかを思い出した。それと同時にベンチを立ち上がると円堂達に向けて指示を出す。

「警戒！　反撃が来るぞ！　相手の動きに惑わされるな！」

尾刈斗中の攻撃に対して雷門は迎撃態勢を取る。しかし、不思議な事に今まで普通にしていた選手たちの動きが明らかにおかしい。何かありもしないところを見ている者もいれば、変な所に動く者さえいる。しまいには……、

「――え？　あ、あれっ!?　半田さん!?」

「少林!?　何でお前が俺の前に!?」

向こうの侵攻の阻止に行ったはずの半田と少林寺、宍戸と松野がなぜか敵ではなく自分達をブロックするような形で向かい合う。側から見れば明らかにおかしい挙動だったというのにもかかわらず、本人

たちには自覚が無い。その間に尾刈斗中はゴール目掛けて一気に登り上げる。
ゴール前の砦として壁山と影野の二枚岩がそうはさせんと立ちふさがるが、ここで噂に聞くある必殺技が繰り出された。
「俺達を止めようなんて無駄だ！　〝ゴーストロック〟!!」
「マレ、マレ、マレトマレ！」
地木流が放った言葉の後、最後の門番である円堂を含め、壁山と影野の動きがピタリと静止する。動かそうにも動けず、それは強力な磁石のＮ極とＳ極がくっつき合うかのように地面と足が離れない。これは、円堂達雷門イレブンが事前にＤＶＤで目にした足が動かなくなるという現象だった。
「あ、足が……」
「動かないッス！」
影野と壁山の間をすり抜けて、ゴール前で幽谷が放った『ファントムシュート』はネット目掛けて飛んで行く。円堂も同じように足が動かず、ゴッドハンドは不発。ここに来て１点を奪われてしまった。
『ゴールッ！　一体何が起きたのか！　雷門イレブン、棒立ちのまま得点を許してしまう!!』
腕を組んで黙ってその様子を柊は見つめていると試合は再会。奪われたなら奪え返せばいいと染岡が再び上がって行き、必殺技である『ドラゴンクラッシュ』を放つ。――しかし、
「な、馬鹿な!?」
同じ技が３回も相手に通用するとは限らない。染岡の渾身の必殺技はいとも簡単に『ゆがむ空間』の中へと吸い込まれ、ゴールを阻まれてしまう。染岡は驚きで目を丸くしているがそんな暇は今はない、今度はカウンターだ。
ディフェンス勢が再び防衛を行うも、しかしここでまた『ゴーストロック』が繰り出される。今の雷門には成す術もなく２点目。これで同点だ。
「クソッ、これがＤＶＤで見た呪いだと!?　こんなものまやかしだ！」
「落ち着け染岡、奴らはどこかがおかしいと言っているだろう！」

相手の動きに何か仕掛けはないのかとじっくり探っている豪炎寺に対して、そんなものに見向きもせずに突っ込んでいく染岡。まさに格好の餌食とはこのことであり、『ゴーストロック』は予兆も無く忍び寄ってくる。
前半はさらに点を入れられ、逆転されたところで終了した。

「ゴーストロックか。子供だましとはいえ、味な真似を……」
地木流に対し懐かしそうな視線を向けながら柊が舌打ちをする。
はて、これから先彼らが逆転できるためにはどうさせるべきか。そんなことを考え部室に向かう。
部室の中で集まっている雷門メンバーはやはり、あの謎現象に悩んでいた。壁山が怖がる中、風丸や豪炎寺など頭がキレる人達を中心にはなぜあんなことが起こるのか必死に頭を働かせている。
足が動かなくなるのはもしかすると向こうの監督の言葉が何か関係しているのではないか。ふと円堂がそんなことを口走ったところで、柊はフッと笑う。
「柊さんは何か分からないか？　あのゴーストロックってのが一体何なのか」
「ん？　私は最初から分かったぞ」
「何!?　それは本当か！　どうして教えてくれなかったんだ、アンタあくまでも俺達の指導者だろう!?」
俺達には負けたら廃部という未来がまだ残っているんだ。そんな気迫を見せながら風丸が柊に詰め寄るが、柊の手が伸びたかと思えば口元に人差し指を置かれ、「ンムッ！」という声を最後に発しようとしていた言葉が中断される。
「練習試合なんだからそこを考えるのが君達のやることだ。それに言ったはずだ、君達のプレーをすれば勝てると。つまり攻略できるんだ」
「だが、簡単に言ってくれるけども今じゃゴーストロックの対処法が全然掴めないぞ！」
「分かった。なら私が試合中に攻略のヒントを口にしてあげるとも。

どこへパスしていいのか分からなくなったら、パスできる人達でボール回しをしていてごらん。ＦＷにボールなんて回さなくていいから」
いわゆる攻めなくてもいいからパス回しだけを行え。そんなことを口にした柊に向けて全員が「正気かよ」と奇異な視線を向ける。何せこっちは一点リードされているというのに、攻めずしてどうやって勝つのか。
しかし、雷門メンバーは次の後半戦で衝撃を受けることになる。まさか彼女の言ったことが試合の流れを変える鍵となることは、今は誰も知らない。

１５話：ｖｓ尾刈斗中　後半戦

『さぁ、後半開始です！　リードを許してしまっている雷門中学は逆転なるか!?』

雷門中のキックオフで後半戦がスタート。最初にボールを持っていた豪炎寺がバックパスで後ろへと蹴り返す。

「豪炎寺！　何でファイアトルネードを打ちにいかないんだ！　今は柊さんの言っていたような動けない状況じゃないだろう！」

円堂が豪炎寺に向けて声を荒げると、続いて染岡も「腰抜けめ！」と豪炎寺に向けて舌打ちをする。どうやらここに来てチームの乱れが出始めたようだ。

豪炎寺の動きから彼が何か考えている事は柊には大体は予想がつく。おそらく相手ＧＫの必殺技の原理を探っているのだろう。このままでは勝てない、今上がっても駄目だ、まだ早い、と。しかし、今相手にリードされている中で、豪炎寺が試みようとしている行動に気付けているのは彼女だけであり、他のメンバーはゴーストロックに対する焦りでそこまでの気が回ってはいなかった。

豪炎寺は至って冷静なタイプ。対して染岡といえば熱い激情タイプ。いわゆる凹凸のある二人が今の雷門のストライカーたちだが、どうもその凹凸が噛み合ってはくれない。おかげで後半戦が始まってからは、豪炎寺と染岡どっちにパスを回したらいいのかバックにいる選手たちが揉め始めるくらいだ。こんな時に仲間割れをしている場合ではないというのに、敵ではなく味方に熱くなっている。勝てる試合といえど自滅ルートになってしまえば元も子もない。そのためにも今回の試合で一番の課題となるところはゴーストロックの攻略ではなく、ストライカー二人が理解し合うことだろう。

「ナイスカットだ風丸！」

「おう！」

陸上部出身の足の速い風丸がゴーストロックをされる前にボールを奪うことに成功する。唯一まともに冷静さを維持している風丸、影野、壁山、三人のＤＦ陣。現状それがせめてもの救いといったところ

だろうか。彼らがいるおかげでＦＷが攻撃しに行く時よりも落ち着いて柊は試合を眺めていることが出来る。
　だが、問題はここからである。ＤＦ陣が良い動きをしても点を取れなくては意味がない。どうやってパスを繋げていくかだ。
「ワレ、ワレ、ワレマワレ……、ワレ、ワレ、ワレマワレ」
「ど、どうしたんですか不破さん!?　急に向こうの監督みたいなこと言い始めて！」
「ひぃぃ～、ま、まさか本当に呪い～!?　私達にも移ったりしないですよね!?」
　ＤＦ陣がボールを支配し始めたあたりから、地木流と同じようにブツブツと柊は何か言葉を呟き始めた。
　明らかに前半では普通にしていた彼女が突然そんな様子を見せるものだから、ベンチで試合を見守っていた秋と春奈が動揺を見せる。目金にいたっては興味があるのか、それとも怖いのか、よく分からない反応だ。
　その光景は風丸を始めとしてＤＦ陣、そしてＧＫの円堂にもよく見えていた。一体ベンチでは何が起きているんだと不安がよぎるが、そうしている間に相手はボールを奪わんと様々な手段を駆使してくる。
　もうこの試合何が何だかよく分からない、本当に勝てる試合なのかこれは。そう風丸が思い始めた時にふとは数分前に柊が言ったことを思い出した。
　――どこへパスしていいのか分からなければ、パスを回せる人達だけでボールを回せ。ＦＷには回さなくていい。
　小林、半田、宍戸、松野、栗松は染岡か豪炎寺のどっちにパスを出すのか揉めており、染岡と豪炎寺も波長が合わずに点を奪えずにいる。無理にパスを出そうものなら奪われるか、通ったとしてもゴーストロックの餌食だ。まさに今が柊の言っていたどこにパスを回していいのか分からない時だった。
　このままでは攻略なんて出来ない。そう踏んだ風丸は影野に向けてパスを出す。
「影野！」

「ああ……、俺達の存在感を出す時だ……」
ボールが回って来た影野は、今度は壁山へ。三人が三角形を作るようにパス回しを始める。普通に考えれば異様な光景だ。ゴールの目の前でパス回しをしているなんて取られれば、すぐに絶体絶命だ。しかし、今できることは柊の言葉を信じてやってみること。それしかゴーストロックを攻略するヒントを得られる方法が無いのだ。
技が決まれば奪われるのなんて既に分かりきっている事である。しかし今この場で唯一冷静な判断が出来るＤＦ三人は、ヒントが得られそうなことを何もしないまま試合が終わるのだけは絶対にしたくなかったのだ。
「馬鹿め。何を考えているのか知らないが、ゴーストロックの前ではどんな小細工だって無力だ。ボールを頂くぞ！」
幽谷を先頭に尾刈斗のメンバーが風丸たちの目の前までやって来ると再び呪縛の構えを見せる。何度も見せられて来た構えに、他のメンバーが「また奪われるぞ」と息を呑む。
「ゴーストロック!!」
「マレ、マレ、マレトマレ！」
地木流の言葉が幽谷の声に重なると、必殺技が発動。再び足が硬直したように動かなくなった。

――だが、それは雷門の足ではなく、尾刈斗側の足がだ。

『おぉっと、どういうことだ!?　尾刈斗中の足が急に止まったぞ！何が起きたんだ！』
角馬の実況に煽られるように尾刈斗中の選手たちが必死に動こうとしているが、表情は必死であるものの一歩も踏み出せてはいない。ビックリしているのは向こうだけでなく雷門の選手たちもだ。一体何が起きたのか理解できる者なぞ現れる訳も無く、その場にいた選手たちは誰もが不思議そうな顔を見せる。そんな光景に向こうの監督である地木流が焦った様子で声を荒げ始めた。

「何ですと!?　どうして自分達にゴーストロックが!?」
　そう、確かにゴーストロックは発動した。それは紛れも無くしっかりと。しかし、発動させたのは雷門イレブンにではなく、自分達の足にだ。よほどガチガチに固めたのか、数秒経った今もピクリとすら動いていない。
　一体なぜこんな事が起きたのか。地木流は困惑していると、彼の耳へとある言葉が聞こえてきた。
「ワレ、ワレ、ワレマワレ。ワレ、ワレ、ワレマワレ……あ、バレてしまった」
　地木流が次に見たものは〝催眠術〟の言葉を呟く柊の姿。それが視界に入った途端に彼は「ゲッ!?」と青ざめた様子で断末魔のような声を上げる。
「お、お前は……不破!?　ど、どうしてここに!?」
「やぁ、久しぶりだね地木流くん。相変わらず君らしい戦法だ」
　なぜお前のような人物がいるんだと柊は指を差されるが、「最初からいたのに気付かなかったの～?　そういうところ昔から変わらんね～」とケラケラと笑ってそれを受け流し試合に注意を向け直す。
〝旧友〟である彼とはじっくり話したい柊だが、今はそうはいっていられない。そんなことは試合が終わってからだ。
「秋さん、春奈さん、君たち二人だけに相手が使う必殺技の種明かしをしてあげるよ」
　一通り笑った後、試合を見ながら柊が二人に向けて口にする内容は至ってシンプルだった。先程呟いていたのはある一種の〝催眠術〟であり、相手の使うゴーストロックと原理が全く同じことを柊はしていただけのことであったのだ。
　そもそも呪いなんて大袈裟に言ってはいるが、サッカーの時だけ都合よく発動する呪いなんて聞いた事なんて無い。せいぜい考えられるものなんて、種も仕掛けもあるトリックだ。ゴーストロックもそのうちの一つと言っていい。
　ゴーストロックというものは攪乱する動きに、繰り返し(ループ)の言葉(ワード)を加えることによって催眠へと導入させる。雷門イレブンは相手の動き

で視覚と、地木流の言葉に聴覚を惑わされ、見事に催眠にかかっていたのだ。
「じゃあ、今不破さんが今言っていた言葉は……」
「そう、秋さんの考えている通さ。ずっと雷門のパス回しの動きに合わせて〝回れ(マワレ)〟って暗示をかけていたんだ。向こうが動きを封じる必殺技(ゴーストロック)ならば、今こっちがやったのは目を回させる必殺技(ゴーストロール)といったところかな。単純な子供だましでしょ？」
「なるほど！　だから尾刈斗の選手はありもしない味方へと技をかけてしまったのですね。本当に策士ですよ、そんな洞察力どうやったら身に付けられるんですか！」
　はしゃぎだす春奈の頭を軽く撫でると、「取材は試合後にね」とだけ告げて円堂の方に視線を向ける。すると彼もまた今の柊の行動で相手の技が〝催眠術〟であると気が付いていたようだった。
　となれば後は対処するだけだが、時間が残り少ない。果たして間に合うだろうか。
「ヒャハハハッ！　今さら分かってももう遅い！　対処できるものならしてみやがれ！　やっちまえテメェら!!」
　己らを縛っていた必殺技が解けると、今度こそ雷門にゴーストロックがかけられる。ボールは再び幽谷に渡り、ゴール前で再び円堂と一対一。ダメ押しの追加点を奪わんと、幽谷は『ファントムシュート』を打つために飛び上がる。
　正念場である。ここで止められるかどうかが勝敗の分かれ道だ。
　円堂の足を封じるゴーストロックは無理やり動かせるようなものではない。暗示を解かなくては動かせない。
　――そんな時に円堂がとった行動は大きく声を張り上げることだった。
「ゴロゴロゴロ！　ドッカーーーン!!」
　まるで喝が入れられたかのような衝撃に、直後円堂は自分の足が動くことを確認する。右でも左でも、ジャンプする事さえできる。だがボールは既に目と鼻の先にまでやって来ており、今からゴットハンド

をしては間に合わない。せっかく暗示を解いたもののこのままでは追加点だ。万事休すか……。
だが、円堂守はそれでも期待を裏切らない男だった。ＧＫはキャッチすることが絶対なんてことはない。新必殺技である『熱血パンチ』によって際どいコースの弾を弾き返すことに成功したのだ。その瞬間に動揺する尾刈斗中と、ワッと嬉々として騒ぎ出す雷門中。試合の流れが円堂によって今変わった。
「暗示をかけられたならば、打ち消せばいい。全く円堂君らしいですね」
ヒヤヒヤさせてくれるといった表情で目金が眼鏡を上げる。まさにその通りだと柊も今の目金の言葉に同情するほかない。ゴーストロックの攻略がまさか力押しとは思いもしなかったが、それでも攻略できたことに変わりはないのだ。あとは攻撃で点を奪うだけだ。
豪炎寺と染岡に目を向けると、相変わらず一方的に染岡が豪炎寺をいがんでいるのが分かるが、いい加減にしろとばかりに円堂が全員に向けて激を入れる。
「お前ら！　俺達はまだまだ弱小なんだ！　サッカーは一人で点を取るんじゃない。それぞれが守って、繋いで、決める。それがサッカーだろう!?　一点は皆で取る一点だ！　皆は豪炎寺だけではなく染岡も信じろ！　そして染岡は豪炎寺を信じろ!!」
その言葉を聞いた瞬間に全員の表情が変わった。たちまち雷門メンバー達は円堂が今言った言葉を心の中で復唱すると、何かを決心した様子を見せる。
直後に円堂から始まったボールはやがて誰にも阻まれることはなく、やがて染岡のもとへ。この間、尾刈斗の選手がいくらボールを奪おうと決してボールに触れることはできなかった。
「染岡！　相手の手を見るな！　あれも暗示だ！　平衡感覚を失いシュートが弱くなるぞ！」
「――！　お前まさか、最初からそれを探っていたのか!?」
染岡はハッとすると、ここで豪炎寺が今までしてきた行動の意味を理解する。それとともに豪炎寺という男の能力を素直に称賛すると、

自分の不甲斐なさに気付く。どうして俺はこう一人で突っ走って周りが見えてないのかと。
だったらもう、いがみ合ってなんかはいられない。円堂が言ったように一点は皆の一点だ。染岡は目の前にＤＦ二人が立ちふさがった瞬間に豪炎寺に目掛けて『ドラゴンクラッシュ』をパスとして放った。
青き竜はやがて豪炎寺のもとへやって来ると、今度は豪炎寺の蹴りが重ねられることによって赤き竜へと変わる。またしても新必殺技だ。それはドラゴンクラッシュにファイアトルネードの威力を加えたものに等しく、ゆがむ空間を突き破り、大きくネットを揺るがした。
『ゴール!!　追いついた、雷門の新必殺技により同点だ!!』
「キタコレ。こういうのを待っていたんだよ」
「新必殺技。あれはドラゴントルネードとでも名付けましょうか」
目金の隣にて、染岡と豪炎寺に向けて両手の人差し指を突き出しながら「良いシュートだった」とウインクをすると、二人は少し顔を赤くしながらガッツポーズを向ける。まさに凹凸が噛み合う瞬間だった。
その後も猛進撃は終わらず、雷門中は『ドラゴントルネード』で追加点を奪い逆転に成功。そして後半戦の終了と共に、練習試合は雷門中の勝利という形で幕を下ろした。

――試合終了から数時間後。
尾刈斗中がグラウンドを去った後で、円堂達は反省会を開いていた。
「よくやってくれたみんな！　今日の試合は俺達の大きな成長になる試合だった。特に染岡と豪炎寺、よく最後の場面で逆転してくれた！」
円堂が染岡と豪炎寺の肩に手を置いて白い歯を見せる。
ゴーストロックの攻略、新必殺技の誕生。柊から見れば豪炎寺と染岡もそうだが、ゴーストロック攻略のきっかけを作ったＤＦ三人、そしてファントムシュートを何本もセーブした円堂、後半戦でＦＷに息を合わせ繋ぐことに尽力したＭＦ、全員がこの試合はＭＶＰに見え

た。
やはりこの雷門は大きな可能性を持っており、進化のスピードが尋常ではない。それがよく見て取れていた。
腕を組みながら反省会を黙って聞いていると、いよいよ解散かなと思っていたところで円堂が今度は皆の前で柊の名前を出す。
「今回の勝利は柊さんがヒントをくれたおかげでもある！　感謝している、ありがとう！」
円堂の声に続いて全員が続け様にお礼の声を述べ始め、柊はキョトンとした表情をしてしまう。まさかこんなふうにお礼を言われるなんて思ってもいなかったのだ。まじまじと顔を見られながら、そんな言葉をかけらるものだから柊は途端に顔を背けてしまう。夕陽のせいなのか、それとも照れてなのか彼女の頬には真っ赤な色が差している。
「やめてよ、私そんなこと言われるようなキャラじゃないから……」
「ああ、もしかして照れてんのか不破？　ほほう、だったらもっと褒めてやるよ！　可愛い顔を向けてみな」
「うっ、からかわないでよ染岡君！　こんな大勢からお礼言われれば誰だって照れるに決まっているじゃない」
「ハハハッ！　口調が崩れてるぜ？　照れるとこんな可愛らしい反応するんだな。いつものクールな不破柊はどこへ行った？」
柊の反応を見て皆が笑い声やら笑みをグラウンドで広げると、つられるようにして赤みを帯びた頬が緩む。もうここまでくれば豪炎寺に続き、柊も雷門の一員と言ってもいいだろう。
フットボールフロンティアまではあと少し。円堂が「フットボールフロンティアに乗り込むぞ！」と意気揚々に声を上げると、それに続き全員はかけ声と共に大きく手を突きあげるのだった。

Ｅｘｔｒａ：外野三人衆

――暑い、とにかく暑い、死にそうなくらい熱くて暑い。

太陽さん、太陽さん。６月の初旬だというのに昨年以上にハリキリながら日差しを浴びせてくるとは何事か。陽炎がゆらゆらと揺れ、生えている植物を見れば元気一杯に青々としている。地球温暖化が進んでいるとは聞くが、この時期に気温が３５度まで上がるとはどうやら今年の太陽の調子は絶好調らしい。水筒の水を飲もうものならば生温く、黒のスパイクは熱を吸収して中はサウナ状態。まさに今日もまた暑くて熱いダブルパンチな練習日だ。

「キビキビ動かんかい！　このクソボケどもがぁ！　リズムが合ってねぇんだよ、弱点（コ）くすぐりリズム（イ）運動（ツ）を始めてまだ５セット目だろうが！　もうばててんのか!?」

暑くて熱い中、それをさらに上昇させるような怒声が響き渡る。

ガチムチマッチョでタンクトップの男が指示する練習メニューはいつも辛いものばかりだ。いや、辛いというよりもクソハード、むしろ拷問と言ってもいい。現に足が攣りそうという人がほとんどであり、この練習メニューをこなしていた人全員は今にも倒れてしまいそうだった。

「――ッシャ、オラァ！　とりあえず５セット目終わったから休憩だクソ共！　水をクソ飲んで、塩飴もクソ補充して、熱中症にかからないようにクソ注意しろ！　具合が悪い奴がいたら直ぐに言え、我慢していた奴がいたらぶっ殺す！」

まるで軍隊のように指揮する口の悪いこのガチムチマッチョマンは、我らが桜城学園野球部監督の山火活（やまびかつ）。元甲子園にも出場したことのある人であり、選手９人＋マネージャー１人の少人数の野球部を指導してくれる巨漢だ。

ここ桜城学園野球部は男子５人、女子５人（うち１人はマネージャー）という珍しい比率で構成されているチームである。普通野球部といえば男子の比率が圧倒的に多く、一人女子がいるだけでもかなり珍しいというのに、桜城学園の野球部に至ってはまさにそれを覆す

異色。ゆえに、ほかの学校から見れば女子選手が多いというだけで舐められるなど日常茶飯事だった。
「こ、こんな運動していれば死にますよ……まったく監督（ボス）は何を考えているんでしょうね……」
ベンチにて頭にタオルを被せながら息を整えている彼は、やがて尾刈斗中サッカー部の監督となる〝地木流灰人〟。死にそうな表情をしている彼はフェイスペイントが崩れ、今にも練習をやめたいと出ている。
「地木流くん、水飲まないとマジで死ぬよ。君は貴重な選手なんだから倒れられてはシャレにならない」
同じように息を切らしながら地木流に水筒を手渡してくる少女。紫色が入った短い黒髪を後ろでまとめている彼女の名前は〝陽海柊璃〟。彼女もまた、やがて〝不破柊〟という名で雷門サッカー部の指導者（コーチ）となる人間だ。
「僕は元オカルト部（文化部）ですよ？　不可思議なものに襲われても大丈夫なよう、耐性を付けたくて入ったのにこれは一体なんですか。目に見えないものに殺されるよりも、先に軍人もどきの監督に殺されますよ。あなた副キャプテンなんですから何か言ってやってくださいよ」
ヘトヘトの地木流を見て柊璃も困った表情を向ける。確かに無理してオカルト部から野球部に引っ張ってきた彼を考えればそれは申し訳ない。でも、そういう割には彼はまんざらでもない表情をしているのは気のせいだろうか。いくら練習がきつかろうが、辞める気はサラサラ見せないその雰囲気。それはきっと自分を変えたいという気持ちと、一緒に入って来た〝彼女〟の存在があるからだろう。
「でも君と同じオカルト部から来た花梨（かりん）はまだまだいけるって表情をしているよ。地木流くんが疲れて死にそうですといったら彼女はどんな顔をするかな？　爆笑かな？」
「なっ!?　霊乃さんの名前を出すのは卑怯ですよ！　オカルト部出身として僕は彼女とライバルなのは知っているでしょう！　そうやって僕のやる気スイッチを弄り回すのは止めてください！」
地木流灰人の扱い方は実に簡単だ。彼の前で霊乃花梨（たまのかりん）という女子

部員の名前を出せば簡単にやる気スイッチに触れることが出来る。ライバルであり、片思い中の相手であるのだから当然と言えば当然かもしれないが。

「それで柊さん、これからのメニューは？」

「柊って言うな。私には柊璃って名前があるのに、なんでどいつもこいつも柊って呼ぶかな」

「仕方ないでしょう、そっちの方が何となく呼びやすいんですもの」

部員たちの中では柊璃は柊という名で通っている。柊は触るとヒリヒリ痛むトゲのある植物の名前でもあり、「アイツ性格がトゲトゲしてるぜ」なんて事を小学生時代に言われたことがある。別にムカつくわけではないが、再び変なレッテルを貼られるのが面倒なため、素直に名前で呼んでくれる方がありがたいのだがそうはいかないらしい。

「それで、メニューとは？」

「ポジションについてシートノック。今回私は内野に行くから、外野の指揮は任せる。監督曰く、誰かがエラーする度に１ｋｍランニングだと」

「完璧に殺しに来てますね」

十分ほどの休憩が終われば、我らが監督（ボス）がバット（武器）を手に持って集合をかける。相変わらずタンクトップ姿でグラサンをかけながらバットを手にしているものだから、いつ見ても威圧感が半端ない。ノックを始める前の集合の度に全員が思っている事は、そこらにいるヤクザよりも怖く、２４時間怒り状態の監督はここ以外には存在するのかという疑問だ。

「ようし、集まったな雑魚ども！　練習を始める前に余談だが、地木流灰人（問題児２号）！　今日はテメェの誕生日だったな」

「――げっ！　なぜそれを……」

「大事な生徒の誕生日くらい知ってるに決まってんだろうがクソボケがぁ！　いいか、今日は俺が誕生日プレゼントをくれてやる。そいつはテメェの中に眠る強気な心を呼び覚ましてやることだ！　分かったか!!」

山火活はとにかく口が悪くスパルタだ。とにかく捻くれた根性をした奴や、チキンハートの人間には変なあだ名をつけてメンタルを容赦なくぶっ壊しにくる。現在の野球部には変なあだ名をつけられていない人間は……いない。

「まずはテメェだ、陽海柊璃（腰抜け二番手投手）！　いくぞオラぁ!!」

「お願いします、監督！」

ポジションについてノックが始まれば地獄が幕を開ける。

炎天下の中、喉は乾き、汗は目に入り、エラーをした途端に１ｋｍランニング。部員たちは熱を吸収する黒のユニフォームをこれほどまで恨んだことはない。

でも決して部員の中で辞めて逃げ出す人などいなかった。それは野球部は自分の中の何かを変えたいと言う人達の集まりであり、監督もまた部員たちを愛していてくれたからだ。だからキツくて野球部に入りたくないという人間は大勢いても、逆に野球部の中から辞めたいという人間はいない。

約５ｋｍのランニングを終え、ノックも終盤に差し掛かってきたところで柊璃の視界にはへとへとになった二人の人物が映った。地木流と霊乃、オカルト部から自分を変えたいとやって来た二人だ。

「地木流先輩～、あなたのエラーこれで２回目～、このままじゃアタシ達死にますよー」

「黙ってください……、あなたこの辛さ知らないでしょう？　誕生日プレゼントだか何だか分かりませんが、何本もノックを集中放火されればエラーしますよ……というか水を……」

「は～い」

ぐったりとしている地木流の頭にヤカンに入った水をかけて、ガボガボしてる姿を楽しんでいる霊乃花梨。相変わらず仲が良い二人だが、それを見かけた監督が怒声を上げる。

「おいコラぁ！　霊乃花梨（問題児３号）！　何勝手に俺の水を使ってんだクソッタレが！　ちゃんと残しておかなかったら承知しねーぞ！」

「え～、監督～。もっと早く言ってくださいよ～、無くなっちゃいました～」

「何ィ!?　テメェ……良い度胸だな。地木流と一緒に外野ノックの刑だ！　ついでに腰抜け投手の柊璃、テメェもだ！」
「いやいや、なんで私まで……」
「うるせぇ！　俺がルールブックだ！　口答えは許さん！」
部員たちがご愁傷さまという目で見つめてくる中、３人が外野ノックを受ける場所へ移動する。お互い名指しされた者同士で顔を合わせれば柊璃と花梨は余裕があるものの、地木流に至っては死にそうだ。
だがそんなときに朗報と言っていいのか分からないがノックのルールが変更される。それは今からエラーしてもｌｋｍランニングは無し、代わりに連続３人キャッチが出来なければエンドレスノックというものだ。
とにかく監督のノックは痛くて速くて恐ろしい。体力の残っている内にどうにか終わらせないと一生終わらなくなる。
一番手、ライトの花梨。二番手、センターの柊璃。三番手、レフトの地木流。そんな流れでノックが始まるが、最初体力が残っているのを知っているのか絶対に取れないようなボールを打ってくる鬼畜監督。
「オラぁ鈍足共、とっとと走らんかい！　だから試合で舐められてフルボッコにされるんだよ！」
少しでも体力のあるうちに終わらせたかったが柊璃も花梨も体力はゼロ、疲労度は地木流と並ぶ。
「あ、死ぬ……、これ終わらなくて死ぬやつだわ……」
「柊せんぱーい、しっかりしてくださーい！　地木流先輩、代わりに三本捕ってくださいよー。もうアタシも足が動きませ～ん」
「はぁ!?　無茶言わないでください！　一本取れるだけでも奇跡なのに無理ですよ！」
丁度今の声が監督にも聞こえていたのか怒声がグワッとなる。
「いいだろう！　地木流が三本捕ればお終いにしてやる！　いくぜ腰抜けオカルト野郎!!」
高い金属音と共に青空を舞う白球。正直とんでもないところに飛

んで行き簡単に捕れるようなものではない。だが、それでもボールを追わなければならない。監督が一番嫌う事は舐めたプレーをすること。彼の前で諦めたようなプレーをすれば間違いなく殺される。

「オラオラ、死にやがれ！　オカルトだか何だか知らねぇが、そんな訳の分からんションベンみたいなもの俺がぶっ潰してやるよ！」

再び怒声と共にとんでもない場所にボールが上がると、地木流はふと思った。なんで僕はこんな事を今やらされているのだろうか。自分を変えるために入った部活だというのに、なぜ自分の好きなオカルトを馬鹿にされなければいけないのか。僕を馬鹿にするのは良いけども花梨が好きなオカルトまでコケにする必要はないだろう、と。

そう考えると地木流は無茶ぶりばかりしてくる山火活に段々イライラしてきた。

「――クソが！　いつまでもヘタクソなノックしてんじゃねぇよ鬼畜マッチョが！」

難しいノックだというのにそれをキャッチすると地木流はそれを監督に向かって思い切り投げ返す。そのあまりの豹変ぶりと凄まじいボールの返球に部員たちは一瞬理解が追い付かずポカーンと口を開ける。

「ようやく眠れる本性見せやがったな！　ぶっ殺し甲斐があるぜ！」

地木流の顔のペイントはいつの間にか〝X〟の形に変化し、口調も性格も優しかったものから厳ついものへと変わっていた。

驚きを隠せない部員たちの中、それを見てニヤニヤしている花梨と、なぜかテンションを上げる監督。始めに強気な心を呼び覚ますと入っていたが、まさかこんな誕生日プレゼントになろうとは誰が予測できただろうか。

それから続け様に2本の鬼畜ノックが行われるが、彼はそれを見事にキャッチして見せる。一人で二人分のカバーも行いエンドレスが終わりを迎えた。

「ヒャハハハッ！　どうだヘボノッカーめ！　オカルトを馬鹿にすんじゃねーよ！」

「――――とか昔言ってたと思えば、今は中学生相手になにイキっちゃってんのさ。あの時に覚醒した地木流灰人が今やこんなふうだとは……」
「いやぁ……だって僕今監督なんだし……威厳を見せないと」
「はぁ……だからって対戦相手を挑発して、かつディスるのは駄目でしょ」
「アハハッ、地木流先輩相変わらず馬鹿ですねー！　なるほど、雷門中と対戦してそんなことがあったんですか～」
「うっ……そんな目で見ないでくださいよ二人とも」
　尾刈斗中と雷門が試合をしたその晩、試合中に偶然見つけたかつての〝旧友〟と柊は居酒屋に来ていた。もちろん彼と同じオカルトマニアな霊乃花梨も誘っての外野三人による小さな同窓会だ。
　柊はこうして二人と会うのは高校以来だった。相変わらず二人とも変わっていない様子で何よりであると安心する。花梨は町内会の草野球チームで活動をしており、地木流に至ってはまさかの尾刈斗中サッカー部で監督をしていたとは今日知った事だ。特に地木流にいたっては豹変した姿を見なければ彼であると気付けなかっただろう。
「かつて王の『左翼』と『右翼』と呼ばれた人が目の前でこうして酒に酔っている姿を見ると、本当に全国制覇した人間なのか不思議に思うよ」
　柊はかつて栄冠を手にした時の思いにふける。ボロボロになって故障した足を引きずりながら戦い抜いた二人の勇姿は忘れもしない。
「懐かしい記憶ですねー。どこの誰だかは分かりませんが『王の右翼』なんてダサイ名前付けてくれたおかげで足を壊されるなんて思いもしませんでしたよー」
「むむ……僕は案外『王の左翼』と呼ばれるのは気に入っていたんですがねぇ……。まぁでも足を壊されて全力疾走が出来ない体にされたのは同感です。柊さんは右眼の方はどうですか？」

「……相変わらずコンタクトをしなければほとんど見えないよ。調子が悪い時には疼痛さえ起こる」
右眼を触れば温かい温度。しかし見えている世界はあまりにも濁っている。コンタクトを外した時には腕時計で時間を見ることさえできない。日本一になった代わりに失ったものの代償は大きかった。当時に付けられた傷跡は今もなお完治せずに自分達の体に刻み込まれている。
「本当に一体誰が王のなんちゃらとかいう訳の分からん名前を考えてくれたんだかね。私としては腰抜け二番手投手と呼ばれてた方がまだいい」
「それじゃアタシは問題児3号―」
「僕は問題児2号なんて嫌ですよ!」
そんな他愛もない会話をしながら食事や飲み物を口に運び、酔いが回ること数時間が経った。もう一つの人格が出てきたのか、口調が荒くなってきた地木流。そんな彼を押さえ店を出ると、帰り道でふと花梨は夜空を見上げながらこんな事を口にする。
「そういえば最近、不破柊という人物を知らないかとよく聞かれるんですけど、柊先輩何か問題を起こしました?」
ダウンした地木流を押さえているというのにもかかわらず真剣な視線を向けてくる花梨に、柊の足が止まる。
「それを聞いてくるのは誰? 内容次第では花梨にも話しておかなければならないことかもしれない」
柊が感じていた謎の視線。今の時間帯など感じない時もあるが、ストーカーの気配は未だ最近でも健在である。
犯行は間違いなく影山だろう。奴が誰かを送って、情報を得ながらどう料理しようかと企んでいる、そんなところだろうか。そんなことが周りに起きているならば、花梨から情報を引き出してこようといわれている人物がいてもおかしくはない。
花梨に訪ねてくる人物の特徴を聞くと、やはりその色は黒に近かった。
柊は今身の周りで起こっている詳しいことは後でメールを通して

連絡すると伝えると、今日はその場で解散とすることにした。
「じゃあ地木流先輩は私に任せてください。それと、もしアタシに手伝えることがあったらいつでも呼んでください。今日の話で雷門中のサッカー部に少し興味が出てしまいました」
「それはありがたい。何かあった時には連絡するよ」
こうして元桜城学園野球部外野三人の同窓会は幕を閉じた。